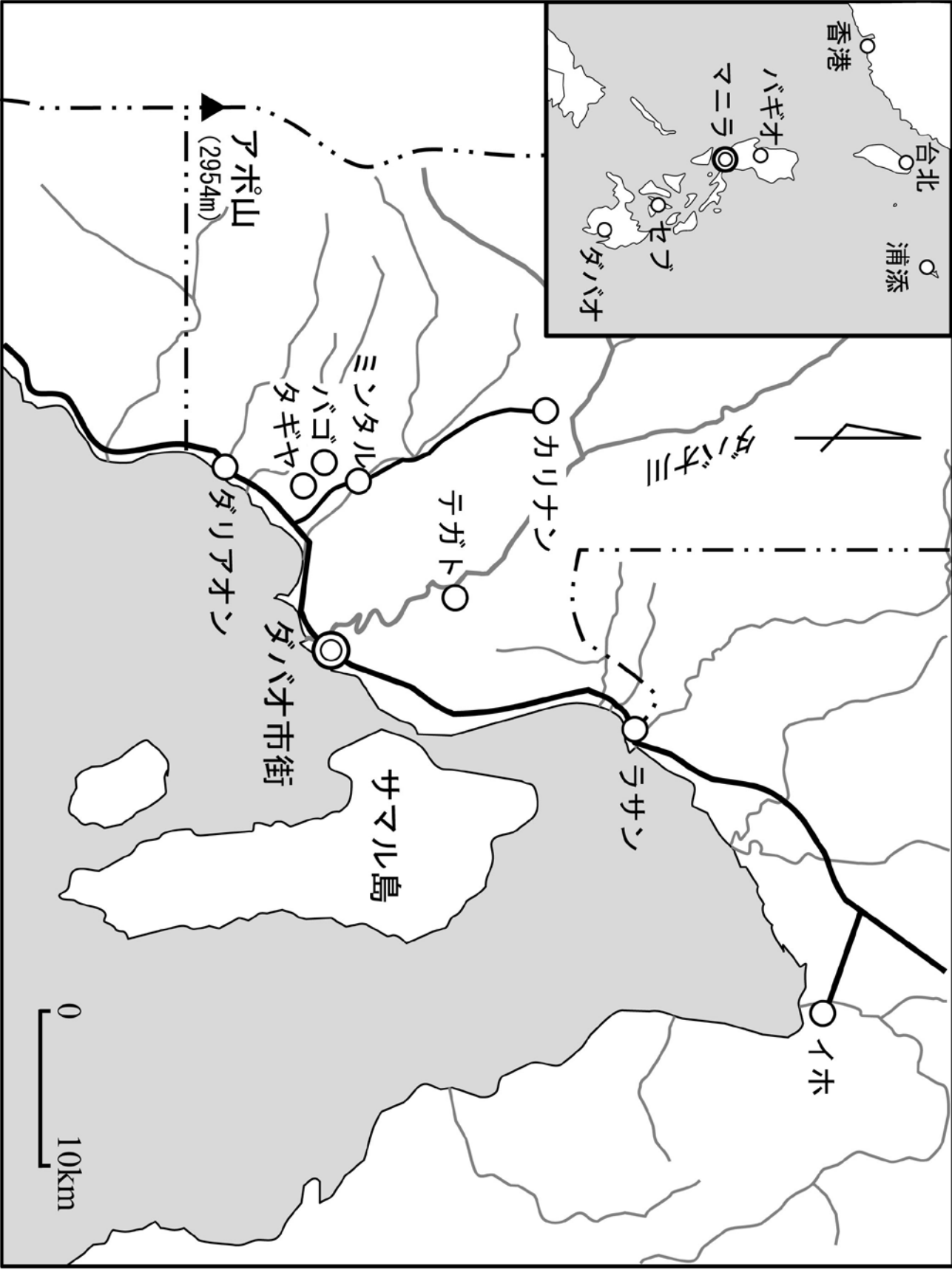


フ
イ
リ
ピ
ン

PHILIPPINES

1908（明治41）年、浦添から最初のフィリピン移民が渡航して以降、343人の浦添出身者がフィリピンへ渡った。彼らはミンダナオ島で主にマニラ麻の栽培に従事し、なかには労働で得た資金を基に麻山を経営する人もいた。第二次世界大戦末期の1944（昭和19）年、浦添出身者を含む日本人移民は日本軍と米軍の戦闘に巻き込まれ、多くの命が失われた。





肥沃な土地ラサンでのマニラ麻栽培

宮平忠一

フィリピン生まれ

昭和七年十一月十五日

私は昭和七年の十一月十五日にフィリピンで生まれました。父宮平仁王[※]、母カマーの長男です。家の屋号は次男宮平です。父は明治生まれで、大正十五年に渡航し、昭和三年に母を呼び寄せましたが姉のハルは沖縄に残っていました。浦添では農業をしていました。小湾という部落は、半農半漁で今はキャンプキンザーのなかになっています。

私の父は二〇代の頃ダバオのラサン耕地に行きました。小湾の方はほとんどラサンへ行っています。当時はハワイとかあの辺には受け入れができなくなった、行けなくなったみたいで、それでフィリピンに行ったようです。私の父も最初はハワイ辺りだったようです。がストップされたと聞いています。

当時移民した人は、浦添全体、沖縄も含めてほしい、農家の、土地の多い家庭はほとんど行っていないと思います。それで二男三男は土地ありませんから、その方々がだいたい行っているようです。

※外務省『海外旅券下付表』によると、大正十五年十一月二日に旅券が下付された本籍浦添村字小湾二の二宮平字三男の宮平仁正と記載されている。兄字勢が同日旅券を下付されていること、昭和十六年五月十三日の再渡航の下付表により、本冊収録の『海外旅券下付表名簿』においては最初の渡航については、宮平仁王と推定し記載する。

す。父も二男です。本家からの分け前がなかったのだと思います。もともと小さな部落ですからね。

父は城間の与座鉢徳さんのラサンの土地を買ったということです。後はほとんど自分たちで開墾しました。でっかい山を燃やしていた跡を見た記憶があります。ほとんど肥料もいらなかったみたいです。もう何千年か分かりませんが、そのままの昔の山ですから土地がうんと肥えていたのですね。山奥を開墾する様子は覚えていますが。このラワンの木というのはでっかくて、どうして切ったのかは覚えてはいないのですが、木の枝が折れるのは覚えています。空が見えなくなるぐらいバツタが飛んで来て、それが止まった枝が落ちてくるのを覚えています。その合間に、マニラ麻を栽培していたと思います。

ラサン耕地はダバオの中心からは離れた所にあつて、かなり山奥でした。ラワンを運ぶ汽車の上に乗って、ダバオの街に行ったことがあります。丸太はでっかいですから、一輛に五本ぐらいしか積みなかつたようです。山の中では自転車も乗れませんので、馬に乗って川を渡った覚えがあります。馬は自転車みたいなものじゃなかつたかと思っています。

フィリピンでは顔見知りの人が多く、親戚もだいぶいましたが、通常は顔を合わすことはありませんでした。広いですからね。隣といつても、近くても一〇〇メートル以上は離れていました。父の畑は二〇町歩ありました。六万坪ぐらいでしょうか。畑のなかには工場がありました。マニラ麻の工場は麻の皮を剥いてね、でっかい機

械に繊維を挟んでバーツと引つ張っていく、大変な作業だったと思います。工場には同じ小湾の人や、フィリピンの現地の人も働いていました。工場とは別に麻を入れる倉庫がありました。

いとこの宮平盛善さんから聞いた話では、ラサンは土地が肥えていますから、トマトを一本植えると、五〇メートルぐらい広がったそうです。この方は十六、七歳に行っていました、フィリピン語も上手で現地の方とよく話をしていました。家の造りは二階が住宅で、下はほとんど物置小屋でした。父は沖縄への送金もしていたと思います。

フィリピンでは、食べ物には不自由していませんでした。米は作っていたのか分かりませんが、野菜や果物はたくさんありました。川にはワニがいっぱいて、石を投げていたずらしたこともあります。向こうの蛇はでっかいのですが、小さいのはどうもなかったので二、三人で尻尾を引つ張って遊びましたね。ですが、大きい蛇には日本から来た人が巻き上げられて、飲まれた人がいたみたいです。

昭和十四年、フィリピンに父だけを残して母と姉の麻利子、弟の直一、治一と沖縄へ帰ってきました。私が長男だから教育は日本ということで、沖縄に戻り仲西尋常小学校に入學しましたが、戦争が始まって沖縄も危なくなっただので、学童疎開で宮崎県小林へ行きました。

父は戦後、フィリピンから川崎に引き揚げてきていました。私たちきょうだいは疎開で熊本の天草にいましたが、父が捜しに来ていました。合流後、みんなで川崎に行って二か月くらいそこにいて、

名古屋、福岡と移動して、昭和二〇年の十二月に沖縄に来ました。

仲間の収容所には、テントがいっぱいありました。今の浦添小学校辺りだったと思います。四家族ぐらいが一緒に、ダンボール箱みたいのを積んで分かれていたのを覚えています。父は昭和二一年の四月八日、学校の始業式の日に病気で亡くなりました。私たちは四年ぐらい仲間のキャンプにいました。昭和二四年に小湾部落全体で、今の所に移りました。

最初は勢理客に、ということと準備をしたのですが、軍の布令で一マイル以内はダメということになって、今いる所、宮城クモトバルに移りました。地名は宮城で部落名は小湾です。

今、私たちがフィリピンへ行ってもあまり意味がない、意味がないというより全然覚えていませんから。

【二〇二一年七月五日 三木健調査】

沖縄県浦添市

ダバオで生まれ、六歳のときに沖縄へ引き揚げ

知念英太郎

フィリピン生まれ

昭和九年七月五日

ミンダナオ島のダバオで生まれました。フィリピンでは四女・五女・六女の三人の姉と私、そして七女・八女の妹が生まれています。耕地はオヤンゴリンと聞いたけどね。戦争がどんどん厳しくなってきたので、六歳ぐらいのときに母ときようだいで沖縄に戻ってきました。

最初にフィリピンに行ったのは、多分祖父の知念亀助だったと思いますよ。それから、父の盛助^{*}が行きました。そして落ち着いた後に、今度は母だけ呼んだようです。沖縄で生まれていた長女・二女・三女の三人の姉は祖母に預けて、母はフィリピンに行ったそうです。それと入れ替えに、祖父亀助は沖縄に帰って来ました。呼び寄せの理由はやっぱり生活のためだったんじゃないかと思います。あつちは景気がよかったです。浦添では農業をしていたはずですよ。昔はとても貧しかったですか。

フィリピンでは現地の人もたくさん雇っていたと思いますよ。家

※外務省「海外旅券下付表」によると本籍は沖縄県中頭郡浦添村字内間三九で、戸主亀助長男となっている。フィリピンへは二四歳二か月のとき、父の呼び寄せにより大正十五年九月十日に旅券が下付されている。

は高床式の二階建てでした。トタン葺きの家でしたね。床下には豚や鶏を飼っていて、その上の一階部分に私たち家族が、二階部分には雇っていた現地の人たちが寝泊まりしていました。少し離れた所に麻を挽く機械がありました。

私たちが沖縄に引き揚げたとき、父は仕事のために残りそのまま現地で亡くなりました。父が亡くなった場所は家の近くの山です。夜、日本軍の飛行機が墜落し、現地というブテリア（瓶に石油をつめてひもをさし込んだもの）を持って乗員を助けに行ったようなんです。しかし飛行機の燃料が漏れていて、それがブテリアに引火して巻き込まれてしまった、と現場にいた人から後から聞きました。父の遺体は平良さんと金城さんが埋葬してくれました。戦後、昭和四九年に母と二女が墓参に行ったとき、金城さんの案内で父を埋葬した場所まで行き、小石を持ち帰ってきました。

引き揚げは台湾経由だったようです。引揚船のなかで私は甲板を駆けまわって遊び、母を心配させたと聞いています。浦添に戻った後は父の実家のある内間に行きました。仲西国民学校四年生の八月から、宮崎県の小林にきようだい四人で学童疎開しました。最初は寂しさは感じませんでしたが、向こうでは少しホームシックになりました。

満二年ほどして沖縄に戻ってきました。インヌミヤーから浦添の仲間にアメリカ軍のトラックに乗って来たのですが、相当な変わり様でした。トラックには一緒に疎開した仲西国民学校の人たちが乗っていました。母たちは羽地に疎開していたためみんな無事で、仲間

で再会しました。

中学を卒業後、すぐに軍で働きました。最初は泊にあった倉庫地帯で、メッセンジャーみたいに書類をあちこちの事務所に配達する仕事を一年ほどして、昭和二七年にキャンプズケランで空調関係のメンテナンスの仕事を昭和五〇年七月までして、翌月の八月から平成十一年十二月までキャンプキンザーで同じく空調メンテナンスの仕事をしました。ダバオ会がありますが参加したことはないですね。

【二〇〇九年八月九日井口学・土屋なおか調査】

沖縄県浦添市

共同で麻山を経営していた父

又吉英仁

フィリピン生まれ

昭和十二年十一月一日

父は又吉蒲戸※といいます。牧港の後仲門の二男です。生まれは明治三四年の十一月。日にちは忘れしました。父は関東大震災の後、向こうで後片付けのボランティアのようなことをしました。各県から

※外務省『海外旅券下付表』によると、又吉蒲戸は本籍が沖縄県中頭郡浦添村字牧港一二六番地となっており、フィリピンへは農業のために大正十五年三月五日に旅券が下付されている。

派遣されたようで、沖縄からも相当行つたはずですよ。その後、父と一緒に派遣された浦添の人たちとそのままフィリピンに移民したみたいです。確か、城間のヨザコウシンさんのお父さんとミヤザトアンチュウさんと一緒だったと思います。

向こうでは共同で麻山を買って事業をしていました。最初は下働きをしていたのかもしれませんが、その話は聞いたことがあります。その後から、同じ牧港でメーウフザト(前大里)の旧姓宮城マカト、私の母を花嫁移民でフィリピンに呼んでいます。当時母は二三歳ぐらいだったはずですよ。姉静枝(昭和十一年生)、私、弟の正雄(昭和十五年生)の三人がフィリピンで生まれました。

フィリピンではトンカラにいました。共同で購入した耕地は、現地のフィリピン人から買ったと思います。当時は麻の値段が上がって、相当儲かったと聞いています。その後、父と一緒に経営していたヨザさんとミヤザトさんが帰ることになり、父は二人から耕地を引き継いで経営し、現地の人が十人ほど働いていました。畑について行こうとすると「危ないから」と怒られていましたね。麻を干したり梱包したりする様子も、近寄ったら邪魔だつてことで追い払われるから、遠くから見ているだけでした。水牛や馬を麻の運搬に使っていたようです。麻を保管していた倉庫に鹿が飛び込んだこともありましたね。麻をどここの会社に出荷していたかというのは聞いていません。沖縄にはだいたいぶ仕送りをしていたようです。

昭和十六年頃、戦争が始まるということで、父は残ったまま、母ときょうだい三人沖縄に引き揚げてきました。そのとき、母のお腹

には三男の英吉（昭和十七年生）がいました。しばらくして、父から「沖縄も危ないからすぐ疎開しなさい」という手紙が届きました。あの頃沖縄には兵隊さんが来て、大きな家は全部兵隊さんが入っていました。それで昭和十九年の夏休みに、家族で熊本に行くことになりました。

私たちの船は、対馬丸の次に出航しました。すると、「あの船がやられた」と、すぐに引返して運天港に避難しました。それから後は、昼のあいだは水上飛行機に誘導されながら、私たちの船は島づたいに行っただけです。夜には大島の古仁屋辺りに避難して、鹿児島に着きました。

引き揚げは昭和二十一年頃、小学校三年のときでした。佐世保からインヌミヤードウイに着いてDDTをまかれたあと、浦添の仲間に行きました。そして、そこで父と合流したんです。父は浦賀辺りから引き揚げて来たようで、私たちよりも半年ぐらい先に来ていました。

戦後、父は軍の消防署に勤めました。母は熊本から引き揚げるとき、ミシンを持ってきて使っていました。そのミシンは浦添まで持ってきていて、戦後もしばらく使っていました。

【二〇〇九年十二月十六日 井口学 調査】

沖縄県浦添市

バカ力耕地での暮らし

知念和子（旧姓平良）

フィリピン生まれ

昭和十三年五月十一日

私は経塚出身の平良俊太郎[※]の長女として、フィリピンで生まれました。屋号はアガリグワ[※]といっていますね。最初は祖父の平良仁和[※]が昭和三年に単身フィリピンに行きました。祖父はフィリピンに行く前、区長を務めていたそうです。祖父はハワイへ行くつもりで渡航したのですが、何故かフィリピンに降ろされたと聞いています。後から祖母のカマドも呼び寄せるつもりだったらしいのですが、すでに四〇歳にもなっていたこともあり、渡航しなかったそうです。

父平良俊太郎は昭和十二年に祖父の呼び寄せにより、母苗（当時二三歳）を伴い、フィリピンに渡航したそうです。

祖父はフィリピンのバカ力耕地でマニラ麻の栽培をしていました。麻畑では五〇〇株の麻を栽培し、土地は地元の地主から借りていました。麻は収穫後、繊維をとり、倉庫で天井につく位の高さまで積み上げて保管していました。それから馬車に積んで、繊維を出荷していました。この作業では現地の方を多く雇っていて、そうした方々

※外務省『海外旅券下付表』によると、身分は戸主仁和長男、本籍は沖縄県中頭郡浦添村前田二八六番地。フィリピンへは昭和十二年十二月二七日に旅券が下付されている。

※外務省『海外旅券下付表』には、平良仁和は明治二八年二月十八日生まれで、本籍は沖縄県中頭郡浦添村字内間八六六番地。フィリピンへは農業のため昭和五年九月十二日に旅券が下付されたという記録がある。

が寝泊まりして仕事をしていました。彼らは給料をもらうと、石の上でよく博打をしていましたね。麻栽培の仕事の合間に、父が山鳥を捕ったりすることもありました。

麻畑にはトウモロコシや芋、タピオカ（現地ではカモテカーフィーといっていた）も植えられていたのですが、猿が集団で来て、芋などを手でつかんだり、口にくわえたり、両脇に抱えて盗んでいくことがあったんですよ。女の人は作物を投げつけられることもありました。畑の敷地内には川があつて、母はそこで洗濯をしていました。

戦争が近づくと、男の人は徴兵されていきましたが、父は背が低かったので徴兵はありませんでした。でも後から、軍で輸送関係の仕事に従事することになり、飛行場の建設にも参加しました。

戦争中はずっと雨が降っていました。自宅に弾が落ちたので、両親と私・妹のヨシ・弟の五人でブンガンに向けて歩いて避難しました。その後、ブンガンからタモガンに逃げる途中、麻畑のなかで麻の葉で屋根を葺き、そこで家族五人で寝ることもありました。そのとき、私は防空頭巾を被っていたのですが、飛行機が飛んでいく音がしたのです。その音が途切れた後に辺りを見ると、まわりにあつた麻が全て倒れて焼け野原になっていました。攻撃によってできた大きな穴が至るところにあり、負傷した避難民もいました。こうした状況で、生きているのが不思議なぐらいでした。

避難中は日本の兵隊について行ったら大丈夫だと思っていたのですが、かえって日本兵に狙われて危険でしたね。水を飲むにも川は濁って、しかも死体もあつて臭いがしたので、とても飲めるもの

ではありませんでした。それで木の葛を切って、そこから出てくる水を飲んだんです。ずっと山のなかを歩きまわっていたせいか、親指の爪が剥がれてしまいました。避難中、母はお腹に赤ちゃんがいたので流産してしまい、歩けなくなっていました。

戦争が終わって三か月後に、家族を捜すため山中に来ていた人から戦争が終わったことを教えてもらったのですが、それでもしばらくは山のなかを歩いていました。この時期になると、避難民を確保するために米兵が山中に来ていて、私たちは捕虜となりました。その後、母は病人を収容する施設に連れて行かれました。そこで働いていた今帰仁村湧川出身の与儀さんという方が、母にご飯やリンゲルを提供してくれました。

引き揚げのとき、病人だった母は二分へ行き、それ以外の父と私はアメリカの船で鹿児島に向かいました。ところが鹿児島に着くと、そこはいっぱいだというので船に戻されて、横須賀に行きました。横須賀に着くと、何の予告もなしに、DDTを体が真っ白になるくらいかけられました。実際、頭にシラミ、体にノミがいて、着物をお湯で洗濯しても虫がまだ残っていました。

横須賀では地元の学校に滞在しました。学校に滞在した人のなかには、シベリア帰りの人もいて、いいコートを持参していました。この学校は二階建ての建物が五棟あったのですが、五棟目は壊されていて薪にされていました。ひとつの教室に三世帯で暮らしていて、私たちは二棟目の二階で生活をしました。ここでは電気コンロでご飯を炊き、毛布やモンペの配給もあり、毛布をオーバーに仕立てた

りしました。配給はメリケン粉もあったので、父がヒラヤーチーを作り、それを持って農家で大根や米と物々交換をしていました。交換したものをリュックに背負って電車に乗っている際に、荷物を没収されたこともあったそうです。配給されたおにぎり一個をジュースにして食べたこともあります。横須賀では、父と私はマリアアにかかり四〇度の熱が出て、体が震えて大変でした。

その後、大分で療養していた母を迎えに行き、昭和二十一年の十二月に横須賀から引き揚げました。インヌミに着き、そこから安波茶で降ろされ、経塚に帰りました。経塚では畑で芋を作っていました。畑に鉄の破片が多くあって、それを拾って売ることもありました。中城村の伊舎堂の人が馬車で毎日来ていて、鉄の破片を一斤一B円で売りました。

沖縄に戻ってから、両親はフィリピンの話をするのを嫌がりました。また、戦後沖縄で生まれた弟や妹も、フィリピンの体験について聞いてくることは特にありません。

ダバオ会には、最初は父だけが参加していました。中村源照さんが会長になってからは私も参加し、現在は理事をしています。最近からは、フィリピン人と日本人との間で生まれた二世、三世の方々の関係者を捜す団体（リーガルサポート）に所属しています。五月には摩文仁にあるダバオの塔にも行きます。

【二〇〇九年十月十七日 井口学 調査】

沖縄県浦添市

線で結ばれない記憶

比嘉護

フィリピン生まれ

昭和十六年二月三日

両親は小湾出身の比嘉榮俊・千代^{*}で、私は長男です。父は大正四年の生まれで、昭和十二年頃に親戚にあたる私の母方の祖父、比嘉榮久を頼ってフィリピンへ行ったそうです。父はラサンの耕地で働きました。そして、昭和十四年頃に祖父の長女である母千代が小湾から呼び寄せられて父と結婚したそうです。

私がフィリピンのことで記憶にあるのは、父と祖父が石灰のような白い粉を使ってワニを捕ったことや、暴走した水牛を見たことです。ただ、水牛が農作業に使われたことはないようです。

これは確かな記憶かどうか分かりませんが、戦争のこととただひとつ覚えているのは、山の中に追われて、雨が降っていて、道端で母が亡くなったことです。そこはラサンから離れたタモガンだったと思います。当時母は三三歳だったそうです。私はフィリピンで母と二人の弟、二男勝彦と三男勝実を亡くしました。榮養失調だった

※外務省『海外旅券下付表』には、比嘉護の父榮俊、母千代、母方の祖父榮久に旅券が下付された記録が残っている。渡航の早い順に、比嘉榮久（本籍地浦添村字小湾六一）は、農業のために昭和五年八月二日下付の旅券でフィリピンへ渡航した。その後比嘉榮俊（本籍地浦添村小湾八〇、大正四年九月三日生）が昭和十二年六月十日下付の旅券で、比嘉千代（本籍地浦添村字小湾六一、大正二年六月九日生）が昭和十四年一月十三日下付の旅券でフィリピンへ渡航している。

のではないかと思います。フィリピンでは、ただもう逃げているだけということを覚えています。アメリカ軍ではなく、現地の人から逃げていたそうです。

沖縄に帰って来たのは父と私だけですが、一緒に引き揚げたわけではなく、私はよそのおばさんに連れられて日本まで来て、父と再会したそうです。父は現地で召集が何かされて、別に引き揚げとなったようで、大分の鍛冶屋で働いていました。私を連れて帰ってくれた方は、首里の末吉出身の女性でした。この方は戦後屋富祖におられましたので、正月などには毎年あいさつに行っていました。大分の鍛冶屋の方とも、父が元気なあいだは親父がありました。

母方の祖母の比嘉ゴズは、フィリピンへは行っていないで、浦添から天草に疎開していたので、私と父は天草へ移り、そこでいとこたちと遊んだことを覚えています。

戦後、ダバオへは慰霊墓参のツアーで三回ぐらい行きました。四、五年前ほど前に、移民一〇〇年祭がダバオであったのでフィリピンに行ったのですが、ラサンまで行こうと思ったら、ドライバーが「行かない。怖い。」と言っていました。ダバオ会の総会にはあまり行つてませんが、五月十五日の慰霊祭には毎年行っていますよ。

戦争体験といっても実感としてはありません。ただ、山道を逃げた記憶しかありません。断片的にしか記憶がないですね。線で結ばれないです。

【二〇一一年七月五日 三木健 調査】

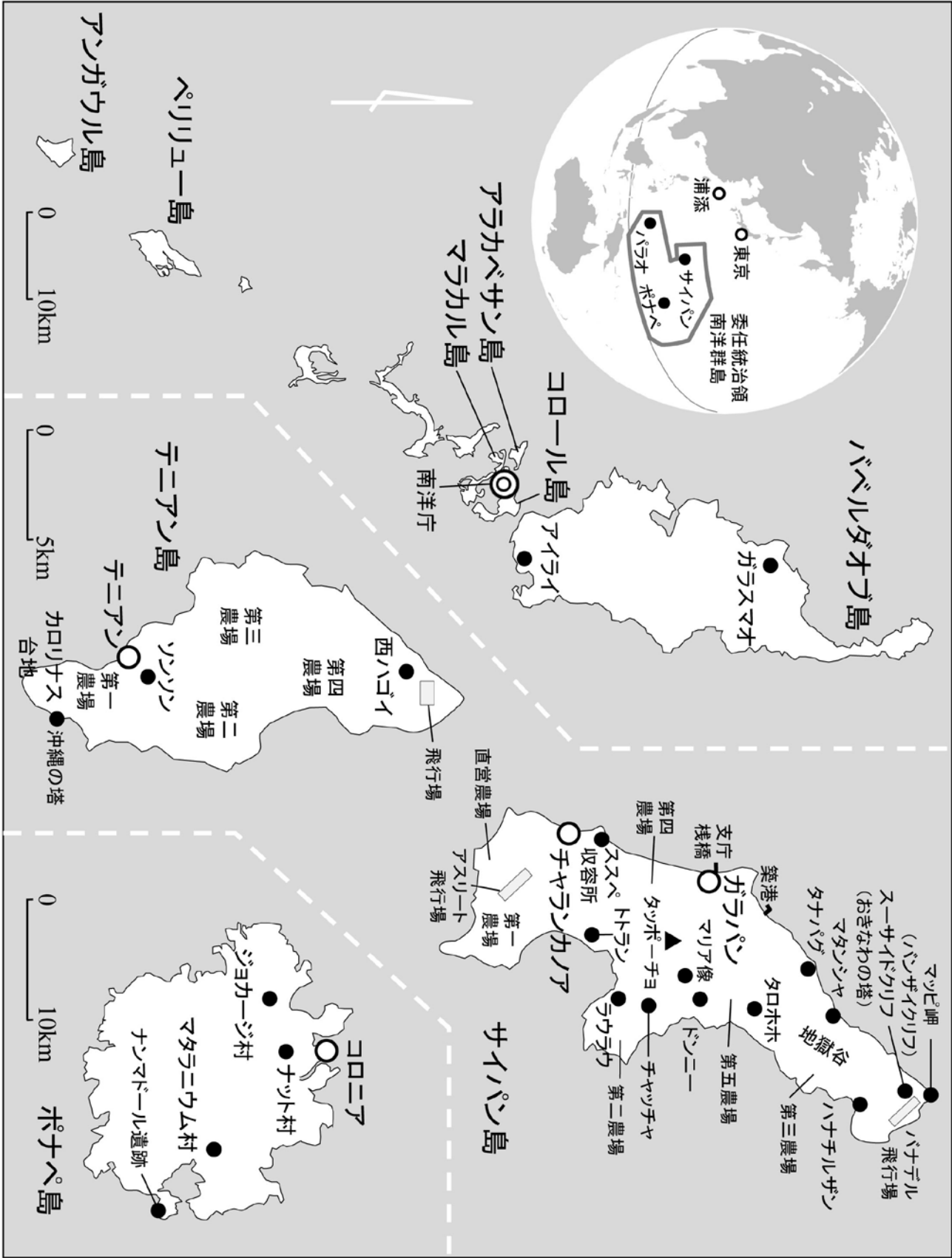
沖縄県浦添市

南洋群島

NANYO (South Sea Islands)

南洋群島への本格的な移民が始まるのは、1919（大正8）年のベルサイユ条約により、赤道以北の旧ドイツ領諸島の委任統治国が日本に決定されて以降のことである。現在判明しているだけで、浦添からアジア太平洋地域に渡航した60%以上が南洋群島に移住している。彼らの多くは南洋興発によるサトウキビ農業に従事していたが、現地の人から土地を借りて農作物を生産し、成功を収める人もいた。1944（昭和19）年に米軍との激しい戦闘があり、日本の敗戦により人々は収容所生活を経て郷里へ引き揚げを余儀なくされた。





サイパン実業学校へ進学

内間安光

サイパン生まれ

昭和四年

父は当山出身の内間三郎。明治の生まれでしょうね。母は具志川出身でマツといました。父は働き者で、上運天という人が父を見て、その人の奥さんの妹を紹介して、そして呼び寄せて結婚したのが母です。きょうだいは長女のヨシ子姉さん、弟の安德、妹の文子の四人です。父は家が貧乏で、土地も何もないのでサイパンに出稼ぎに行ったんじゃないかなと思います。大正九年に行ったと思いますが、あの頃は西村時代って言うていたようですね。

私は昭和四年に向こうで生まれ、昭和十一年頃にマタンシャの小学校に入学しました。昭和十九年三月に高等科を卒業して、サイパン実業学校に入学しましたが、私たちが最後の入学生でした。結局、実業学校で勉強したのは一か月ぐらいで、それから勤労奉仕でした。六月からアメリカ軍の空襲と艦砲射撃、そして十五日頃には上陸したので、それから戦争に追われてしまいました。

当時のサイパンでは、第一農場はアスリート、第二農場はチャッチャ、第三農場はマタンシャ、第四農場はタロホホにありました。父はタナパグで農業をしており、私たち六人家族は六畳一間の家で暮らしていました。当時、明かりは石油ランプ（ホヤランプ）で灯

火管制のときにはランプに黒い布を被せていました。家は炊事場付きでしたが、食事が終わると食卓を片づけて、そこで寝るくらいの広さでした。午後八時頃に夕食をとり、勉強するために机を出して、終わったら机を片づけ、午後九時か十時頃に寝ていました。家では親同士あるいは大人同士は方言を使っていたましたが、子どもには標準語で話していました。

私が物心ついた頃から、父はマタンシャで販売用の野菜作りをしており、そのなかでキュウリやカボチャ・トウガン・大根・ネギを栽培していて、母は最初の頃は豆腐屋をしていました。その後、小学校三年か四年生の頃に、タナパグに土地を求めて、家族でそこへ移り住みました。家は極楽谷の下の方にありました。極楽谷は水が豊富ですが、暑さで水が枯れることもありましたね。ここでも一町歩半の畑を使って家族で野菜作りをしました。野菜作りは組合で行かない、組合長は原さんという人で、この人が各家庭をまわっていました。

あの頃の暮らしは、朝五時に起床して、学校へ行く前に草刈りをして牛に草を食わせ、学校から帰ると野菜を収穫したり、また牛に草を食わせるという毎日でした。

父は当山出身の五、六人で模合をしていたようです。後から聞いた話では、昭和十六、七年頃には、兵役逃れで当山の人サイパンに来たそうです。日本人は現地の人のことを「バーブイ」（豚）と悪口で呼ぶこともありました。

マタンシャの小学校は男女共学で、一クラス四〇人のうち、ほと

んどが沖縄出身者で、本土出身者は数人でした。その一方で、先生方は全員本土出身者で、後から少しは沖縄出身の先生も出てくるようになっていました。学校は午前八時半にスタートしました。学校では標準語を使用していました。高等科では吉村先生が、私にパラオにある海軍の潜水学校を勧めたのですが、母は私を「長男だから実業学校に行かせたい」と思っていました。それで、私はサイパン実業学校へ進学しました。マタンシャの小学校からは、四人が実業学校に入学しました。当時のサイパン実業学校は、卒業すれば軍の幹部候補になることができたんですが、今から思うと、そのまま学校を出ていたら兵士として死んでいたかもしれません。実業学校には、現地の人が二人入学していました。

実業学校の試験では、筆記試験はなく、学校の成績と口頭試問だけで審査されました。入学後の健康診断は支庁病院で行ないました。学校では、午前中は勉強して、午後になると学校の農場で家畜用の餌にする草を刈りました。そして午後三時頃に学校が終わり、市場か家に行き、家では草刈りをしていました。放課後に友人と遊ぶことはありませんでした。あの頃は女の子と話をする、上級生からひどい目にあわされたんですよ。だから女学生がよく通るサイパンの一、二丁目は、上級生以外通ってはいけないといわれ、下級生はサイパンの三、四丁目しか通ることはできませんでした。

マタンシャには南洋興発の倶楽部（広場もあり、側には酒保もあった）があり、沖縄県人会を年に一回そこで開いていました。そのときには一〇〇人以上集まっていたと思います。そこでは、小学生を

数名表彰し、私も小学校六年生と高等科二年のときにそれぞれ表彰されたことがあります。相撲大会（ウチナー相撲）や女性による琉球舞踊などもありました。ただ、浦添出身者独自の集まりはありませんでした。ガラパン町にはサイパンキネマがあつて、そこで映画（日本の時代劇）を二、二回見たことがありました。

昭和十八年頃から、空襲が年に二、三回あり、土・日曜日の学校



サイパン実業学校跡地に建つ記念碑 [2012年 石川朋子撮影]

が休日のおきにも空襲がありました。私は学校で空襲時の伝令を担当して、先生とのあいだを行き来していました。しかし、昭和十九年の五月を過ぎると、父がバナデル飛行場に徴用されたため、通学前に自分で野菜を市場に持っていくようになりました。自転車通学していたので後ろに野菜を積んで、それを市場に持っていききました。市場では、担当の人（沖縄出身者）に野菜を預けて自分の名前をいい、帰りにその売上の伝票を受け取っていました。

昭和十九年六月十一日に米軍の機動部隊が来ており、十三日の午後一時頃から艦砲射撃が始まりました。当時、住んでいた所の裏山に海軍の陣地があったので、山中に逃げ込みましたが、そこでは日にちがどのくらい過ぎていたかは分かりません。避難中は、雨期にもかかわらず雨が降らず、湧き水は海側しかありませんでした。米軍は意地悪なことに、軽飛行機で薬剤をまいて、水を苦くして飲めなくさせることもしていました。また、食べ物日本軍のキャンパンもありましたが、あまりにも固いので、どんなにひもじくても食べることはできませんでした。

その後、極楽谷の洞穴に十日ぐらい避難した後、軍が「民間人は北の方に行きなさい」と言うので、そこを出て、マタンシャ、バナデル、南貿耕地、マッピーに行きました。マッピーではアダンの林があり、アダンの陰に隠れましたが、行き場も食べ物もありませんでした。海端で海水を使って米を炊いたのですが、辛くて苦みもあり、食べることはできませんでした。そして、約一週間後の七月十六日、海側で母と私・妹の三人で米軍に投降しましたが、母は足の指の怪

我が原因で、収容所で亡くなりました。父はこのときすでに亡くなっており、姉は軍属ということで、捕虜になりたくないといって逃げたしまい、三角山の地獄谷で亡くなりました。弟もバナデルの飛行場で亡くなりました。

捕まった後、みんなと一緒にトラックに乗せられて、ススペの収容所に行きました。収容所では、入った順番ごとに団体を作っていて、私たちは十団体でした。私は収容所内から軍作業に勤務し、食糧部隊の食糧運びをし、その後サイパンの一四八陸軍病院に住み込みで働きしました。米兵と同じ食事をして、一日二五セントの日給をもらいました。そこで草刈りの仕事をしたのですが、アメリカの鎌は草刈り用としては使えなかったですね。

沖縄に送るパラシュート付きの食糧を梱包する仕事もしていました。この食糧が沖縄に行くことを知って、箱に自分の名前を鉛筆等で書いたこともありしました。当時、サイパンからはB 29が毎日五〇機から六〇機飛んでいくのが見えました。

陸軍病院に勤務しているときに、日本降伏の日を迎えました。このときは仕事が休みとなりました。

昭和二十二年二月、妹と二人で引き揚げました。引き揚げる際は、米軍の袋に衣服だけ詰めて、日本の駆逐艦に乗りました。久場崎に上陸し、インヌミヤードウイからアゲダーノメー（コザ三区）に行きました。それから仲間の収容所に行き、当山に戻りました。インヌミヤードウイでは父の姉が迎えに来ていました。

戦後、私はコカ・コーラに就職しました。私は会社の水道部について、

材料となる水の製造やその消毒の仕事をしていました。社長は白人でしたが、実際はドミというフィリピン人に経営を任せていました。そのなかで、フィリピン人が日本人をいじめることがありました。コカ・コーラを退職した後、「これからは自動車の世の中だ」と思い、自動車について勉強し、城間のランドリーの下にあるモータープールで働きました。コカ・コーラを辞めて二、三年後に、今度は修理の技術者として再びコカ・コーラで働きました。

毎年六月二三日の慰霊の日には、識名霊園の慰霊碑に行きます。約二〇年前に一回だけサイパンの慰霊祭に参加しました。沖縄からサイパンに行くと、飛行機の飛ぶ音もかつての家の跡もなく、ギンネムばかりになっていて寂しかったですね。かつて耕していた畑も、今は現地の方が耕していました。

【二〇〇九年八月十日 宮内久光・井口学 調査】

沖縄県浦添市



内間安光（右）さんへの聴取調査 [2009 年撮影]

サイパン生まれのグスクマンチュ

比嘉幸正

サイパン生まれ

昭和四年三月十四日

我々の話をしても今の子どもたちはどう聞くでしょうか。あまり関心ないようですが、ただ後々の人の参考になると考えお話しします。

私は昭和四年にサイパンのチャツチャで城間出身の父セイホ、母カマドの長男として生まれました。父がサイパンへ行った動機は、浦添では財産もなく、生活ができないのでサイパンで儲けてこようということでした。

南洋興発という製糖会社がサトウキビを植えさせて、土地をみんなに与えて、確か二五年契約で払い下げるようになっていたそうです。健康診断があったのですが、父は背が低かったので、検査で落ちたはいけないうと、友達に測ってもらったそうです。長女姉さんが大正十三年生まれだと思いますから、父はその前にサイパンへ渡っていますので、大正の初期に興発の募集で行っているわけです。母とは、呼び寄せで結婚しました。サイパンではサトウキビを栽培していて、一万八〇〇〇坪、六町歩の畑がありました。

私たちの住んでいたラウラウのカツタンには、現地の人も近くについて、みんな木の実とかを食べていました。住居は高床式で、下は山羊とか犬とかを飼っていました。家族は両親と姉二人、妹二人、

弟二人でした。一番上の姉はもう結婚していて戦争で亡くなりました。一番下の弟は収容所で生まれました。父は体が弱かったので、人夫を雇って仕事をさせていましたが、戦争が始まると、この人たちも軍に徴用されましたので、私が畑仕事をしていました。主にサトウキビでしたが、畑も休ませないといけませんから交互に休ませて、芋を植えていました。普通の芋チンヌク（里芋）やタロイモだったと思います。

チャツチャの小学校は、一クラス三〇人で六年までに八クラスありました。高等科は二クラスでした。学校へはにぎり飯と味噌を弁当に持って行きました。複式学級というのでしょうか、先生一人で高等科一年、二年の両方に授業をしていて、両学年合わせて三〇人ぐらいの生徒がいました。ほとんど沖縄の人でした。ヤマト出身の人もありましたが全然区別が付きませんでした。カツタン村には、ヤマト出身は一軒だけでしたね。カツタンでは浦添出身は一世帯しかありませんでした。特に浦添の、城間の出身というような集まりをもつことはありませんでした。

両親は家では方言を使っていました。私も家では方言、学校ではヤマトグチでした。先生はウチナー出身の国吉先生といいました。戦争の影響で本当に勉強ができたのは、高等科一年まででした。

その頃には軍作業もあって、各家庭から一人ずつ割り当てがありました。うちでは父が病弱でしたので私が作業に出ていました。アスリート工場へ、にぎり飯二つを持って歩いて行きました。穴を掘って高射砲をとり付ける作業でした。その最中、アメリカの戦闘

機が爆弾を落として初めて、空襲警報が鳴るのですね。私たちは、どうか戦闘機もあるのだなと見ていたのですが、すごかったですよ。戦闘機が一万メートルほど高く飛んでいるのですが、日本の戦闘機は八〇〇〇メートルしか上がらないので、もう差があるのですよ。だから機関銃を撃つても当たらないのです。高射砲の用意はしてもとり付ける時間がないのです。トーチカを作るのも大変な作業でした。飛行場建設も手作業みたいなものでした。

戦争が激しくなって、家族で壕に避難したのですが、父は喘息で仕事ができませんでしたので、蓄えた食糧はサトウキビしかありませんでした。ですから長男の私が食糧を探しに出ていたのですが、途中、崖から海に飛び込んで死ぬ人を多く見ました。こんなふうにして死ぬものかと、自分の壕に戻ったのです。

日本軍の総攻撃は敗戦に終わり、日本が負けたことを知って、家に帰って死のうと家族で話していました。夜になってマタンシャの壕から出ようとした頃、「Come on come on」と、アメリカ軍による投降の呼びかけがありました。家族は誰も出ることができず、私を手を上げて出ると十五人くらいのアメリカ兵がいました。「Oh Nice boy」と言っ、私の頭を押す所を家族が見ていました。するど「Father you come on come on」とまた言うので、私が父に「出て来いと言っているよ」と言っ、家族みんな出てきて捕虜になりました。捕虜となったのは七団体くらいだったでしょうか、トラックに乗せられてススぺの収容所に連れて行かれました。途中、悲惨な光景も目に入ってきました。死んだ人のまわりにいっぱいハエが飛んでいます

ので、消毒するためにDDTをまいていました。それをブルドーザーで片付けるのです。本当に戦争はないほうがいいです。

収容所では登録も何もなく、すぐに何人ずつと分けられてテント小屋に入れられました。食事は朝と夜の二食でした。仕事は強制ではありませんでしたが、仕事をするとう給料がもらえました。アメリカの兵隊が来て、捕虜を車に乗せて行くのです。普通の仕事は一人三五セントでした。班長は一日五〇セントでした。アメリカ兵が班長に指示して、仕事をさせていました。収容所の食事はご飯と味噌汁でした。野菜や肉が入るときもありました。収容所内の作業で、私は弾運びをしました。アメリカ軍の船から弾を運ぶのですが、栈橋が壊れているので船が着けられず、引き潮になってから船まで歩いて行って運んできました。ドラム缶をみんなで押して、軍の車に積みました。トラックに積み終わると軍が持っていきました。今度はまたトラックから降ろして、弾を撃つ所まで運ぶのです。この軍作業を一週間ぐらいました。弾運びの次は食糧運びをしました。船から降ろしたものを部隊まで運んでテントを被せるのですが、ちょうどそのときに日本の飛行機が空襲にきたこともありました。食糧部隊では二か月ぐらい働きました。

昭和二〇年の六月一日になって、部隊にあるコカ・コーラ工場で働くことになりました。コカ・コーラは機械が自動で詰めていくのですが、ワッシャーという機械で洗うので、並べる作業や詰めて入れる工程で瓶を並べるのはアメリカ軍の兵士がしていたのですが、不器用で瓶を割ってばかりいるものだから、私に「Hey boy come

on」といって、「なんだ？」と答えたら、「お前できるかい？」「OK you can do?」と聞くと「I try」と答えて、やってみたらうまくできたので「Tomorrow go come here」「明日の朝からこっち来い」ということになったのです。工場はススぺの軍の食糧部隊にありました。給料は一緒に三五セントでした。後から日本人の方が器用だということで全部工場のなかも捕虜に変わりました。

B 29が広島に原子爆弾を落とした八月六日に、機械を止めさせられました。投下して戻ってきた頃「マシンストップ」と言うのです。「まだ三時だよ」と不思議に思いました。「飛行機見ろ」と言うので「なんで飛行機を見るか、どこにいるのか」とみんなで言い工場から庭に出て「Everybody stand up」と言われて空を見ていたらB 29が戻って来ました。「atomic bombs」「Hiroshima no more」と言っていました。私は逆宣伝しているのだと信用しなかったのですが、三日後に長崎にも落としていました。後に収容所でガリ版刷りのちらしを見せられて初めて、原子爆弾が広島と長崎に投下されたことを知りました。長崎のときは特に機械を止めて見なさいということはありませんでした。

日本が戦争に負けたので沖縄に帰るとなったとき、「沖縄にもコカ・コーラの工場があるので、そこで働きなさい。沖縄はアメリカ軍が管理しているから、ゲートに入るときにPWがいるのでこれを渡しなさい」と、パスを渡されました。

二月に沖縄へ引き揚げることになりました。LSTで直接沖縄に着きました。LSTのなかは空っぽだったと思います。十日ぐらい

乗っていたと思います。食事は軍が食べているものでした。不自由とかはないのですが、二月ということで寒いですから、皮がむけて霜焼けみたいになってしまいました。

インヌミヤードウイに着いて二週間ぐらいそこにいました。その頃、沖縄の人はもう軍作業をしているけれど、南洋から帰ってきた私たちは死体の片付けから始まりました。コザに病院があつて、そこで病気や怪我で亡くなった人たちを葬るのです。インヌミの広場に一体ずつスコップで穴を掘って埋めていく作業でした。作業中の昼食はKレーションという缶詰で、一つはビスケット、一つはヌードルだけでしたが、体がもたないので三日ぐらい考えて大きく穴を掘って、三体ぐらいいっぺんに埋めることにしたのです。多いときは一日十体ぐらい埋めたこともあります。父は喘息でしたので、家族でこの作業をしていたのは私だけでした。その後浦添の仲間の収容所に入りました。

仲間のテントにいたとき、MPともう一人兵隊がやってきて、比嘉幸正、比嘉幸正と探してきたのです。ですから、サイパンで渡されたパスを出して見せたら「Tomorrow morning eight o'clock come here gate」ということで翌朝待っていると、兵隊がジープで私を迎えに来ていました。そして、今の場所と同じコカ・コーラの工場に連れて来られました。女性も十人採用されて、男性は私一人、それから一週間ぐらいして男性も四〇人採用されました。

男性はコーラの木箱を作る仕事で採用されていました。女性の仕事は掃除でした。私は機械のとり付けです。それ以外の作業員はア

アメリカの兵隊でした。五年間はアメリカ兵がいて、その後はPWでしたが、彼らもだんだん帰されるので沖縄の人が多くなっていました。沖縄のコカ・コーラは昭和二年の四月一日創業で機械をとり付けて、十月の半ばから製造を始めました。

戦後はサイパンに行きたいという気持ちにはなれませんでした。

【二〇一二年九月六日 石川朋子 調査】

沖縄県浦添市



コカ・コーラで働く比嘉幸正さん [1949年撮影 比嘉幸正氏提供]

サイパンで父と生き別れる

桑江秀子

サイパン生まれ

昭和七年七月二六日

私は昭和七年に、サイパンの北村バナデルで生まれました。父は石垣島、母は黒島で生まれ、黒島で両親が会って結婚しました。最初は親戚の男性がサイパンへ行ったのですが、そこで落ち着いた後に、父もサイパンに渡航しました。

最初の頃、父は人に使われていました。私の母は長女キク・二女トシ・三女富子を連れてサイパンに呼び寄せられて、私と弟の盛昇がサイパンで生まれました。サイパンへは船に乗って行ったそうですが、親戚はみんな船酔いしたのに母は船酔いせず、みんなのご飯まで自分が食べたと言っていて話していました。キク姉さんはサイパンで結婚しましたが、夫が黒島の方でグアンスー（仏壇）を見るとのこと黒島へ戻り、しばらくしてそこで亡くなりました。

家族を呼び寄せたとき、父の畑はたくさんあったようですが何町歩だったかは聞いていません。私の生まれたバナデルは平坦地で、サトウキビ栽培が主でした。忙しいときには同じ八重山の人を人夫として雇っていて、メーヌヤーといっていた人夫小屋もありました。人夫の人たちとはご飯を朝昼晩一緒に食べていました。月に一度の買い出しのときは親と一緒に汽車に乗りました。

学校はバナデルからマタンシャの学校まで通っていましたが、遠くて大変でした。南洋興発のキビを積む汽車は、親が一緒でないと乗れなかったので、歩いて通いました。弟は体が弱く、急いで走ると咳が出るので遅刻することが度々ありました。それで姉に「早く歩きなさい」って怒られたことがあります。汽車が一番線を通ったら、「今大体どのくらい」、二番線の所で汽車を見たら「もう急がなきゃ」と言う感じで、汽車の時刻に合わせ、母が作ってくれた弁当を持って登校していました。

学校へ着くと、校門の前でお辞儀をしてから入りました。大体一クラス二〇人か三〇人で男女は一緒に、私は確かバナデル一組だったと思います。学校には本土出身者も多く、八丈とか山形の人たちもいましたが、隣近所にも内地の人がいて、親同士もお付き合いはあったと思います。

学校のこと覚えてるのは、運動会でネットくぐりをしたことです。母から「頭をうんと下げないと、綱に引っ掛かるよ」と教えられて、一番にくぐりましたが、終点でゆっくり走って、ビリになっでしまいました。運動会ときは、お肉や野菜の重箱もあつてご馳走でした。

先生が内地の人で、学芸会ときに本土出身の人たちはみんな役がありました。沖縄の人は役をもらえませんでした。勉強も内地の人をひいきしていたと思います。沖縄の先生は一人ぐらいしかいませんでした。

私が国民学校を終わって、ちょうど高等科に行くときに戦争にな

りました。小学校の入学式はお父さんと一緒に「名前呼んだら大きな声で『はい』っていうのだよ」と教えてくれたことを覚えていますが、卒業式は戦争になっていたのでありませんでした。

その頃、友だちが大きな十三ユウエー（十三祝い）をしてもらって、ご馳走を学校で私たちにも配ったことがありました。私は十三ユウエーをしてももらえなくて泣きましたが、富子姉さんが「お祝いしたら、みんなに酒も注いであげるんだよ」と言われて諦めました。

バナデルの屋敷はボロボロでしたが、父は花が好きでしたから、庭だけは綺麗にしていました。母はずっと家事をしていて、忙しいときは畑の手伝いをしていました。

バナデルに飛行場を作るといわれて立ち退き、タラホホに移りました。六年生まではマタンシャの学校でした。飛行場を作るなどの仕事をさせられたりはしませんでした。チャッチャのオオハマ病院が父の親戚で、内地に引き揚げて行くつていう人の家を紹介してくれました。そこは学校の近くでした。この家は内地の人の屋敷でしたから、トタン屋で新しく広かったですね。障子張りで一番座・二番座・三番座とありました。台所には大きなテーブルがあつて、みんな一緒に座って食事をしました。子ども部屋みたいなはありませんでした。夜は蚊帳を吊って寝ました。タラホホでの食事は、あの頃お芋が多かったですね。家には親戚のおじいさんがいて、その娘がガラパンで仕事をしていたのですが、忙しいということで、その子どもたちを私の母が見ていました。母も苦勞していたと思います。二女のトシ姉さんは、八重山の人とテニアンで結婚して暮ら

ていました。

戦争のときは両親と三女の富子姉さん・私・弟の盛昇・親戚のおじいさんとその孫三人の九人一緒でした。富子姉さんと結婚した義兄は、タラホホの飛行場で現場監督のようなことをしていた方で、戦争で米軍の兵隊が上陸するからバナデルに逃げた方がいいよと教えてくれたのです。避難の途中、親戚のおじいさんとはぐれてしまいました。

バナデルの海の所にみんなで移動しようとしたとき、前にいた人の子どもが泣き出しました。夜だから分からなかったのですが、前に敵がいたのでしょうか。すぐ機関銃で攻撃されて、それでみんなバラバラになってしまいました。私は富子姉さんといたのですが、姉が持っていたみんなの着替えが入った風呂敷包みを結び直しているあいだに、母たちとはぐれたのです。後でもと来た道に戻ったら、母とおばたち、弟に会うことができたが、父とは会えませんでした。私たちは海の近くで捕虜になりました。

最初は一か所に集められて、トラックに乗ってススのキャンプに行きました。キャンプはトタン屋根で、下は地面でした。捕虜はどんどん来るので、父が来ていないかねってすぐ探しに行きました。はぐれる前、父はいとこの子をおんぶしていました。その子が捕虜になっていて、話を聞くと、「子どもはどうもしないからねって、僕一人置いておじさんは逃げたよ」って言っていました。父とはもうそれきりとなってしまいました。

収容所では三家族で一部屋が割り当てられていて、炊事場はまた

別にありました。食事はご飯と味噌汁でした。学校のようなものもありましたが、勉強らしい勉強はできなかったと思います。母は軍のランドリーで洗濯の仕事をしていました。母の代わりに私が洗濯屋の仕事をすることもあります。

キャンプで一年半ぐらいして、戦争が終わったというのを聞いて沖縄へ引き揚げることになりました。LSTで沖縄のインヌミに着いて、テント小屋にいました。冬は初めてで寒かったですね。



収容所へ移される前に配給品を受け取っている人たち。
サイパン島にて。[1944年撮影 沖縄県公文書館所蔵]

一週間ぐらいそこにいて、同じLSTで今度は宮古、八重山へ向かいました。宮古の沖に來ると、宮古の人を降ろして一週間ぐらい沖に停まっていた覚えがあります。男の人などはそこでお芋を買ったりしていました。

八重山に着いたときは母と富子姉さん・弟の盛昇・親戚の子どもたちが一緒でした。母の実家のある黒島に帰る船がなかなか来ないので、富子姉さんの旦那さんが八重山の大浜の人で両親がいましたので、そこに一週間ぐらいお世話になりました。黒島に帰る人は私たちだけでしたね。黒島に帰ると、母の姉が迎えに来ていました。そしてその方のお家でお世話になり、十六歳頃まで黒島にいて、母と私と弟は、富子姉さんのいる石垣へ移りました。石垣には二〇歳ぐらいまでいたかなと思います。

その後、ご主人が恩納村の方という、登野城のおばさんと一緒に沖縄に行つて、石川のキャンプでその方の雑貨店で働きました。二、三年はいたでしょうか、八重山から手紙が來ると懐かしくて。ホームシックにかかっていたのでしょね、泣いていました。

二五歳ぐらいで結婚しました。最初は安謝の産婆さんの家を借りて、後から浦添に移りました。浦添はいい所ですね。

夫に南洋の話をすることもあります。父も結局どうなったか、死んだのか何なのかも分からない。海を見ると、那覇の泊から水平線の遠くを見たら、何ともいえない寂しさですね。

一回目の慰霊墓参でサイパンへ行ってきました、父が呼んでいるのかねと思ひまして。二回目も行きました。姉さんたちも一緒に行

きました。南洋帰りの集まりでサイパン会とか、マタンシャの集まりにも参加したことがあります。識名の慰霊祭は二回ぐらい行きました。でももう長いこと行っていないせん。

【二〇一一年九月六日石川朋子調査】

沖縄県浦添市

家族を亡くしたサイパンでの戦争

棚原武雄

サイパン生まれ

昭和九年十一月十日

私は父棚原牛、母カマの長男で、サイパンで生まれました。父も母も浦添の西原の出身です。結婚して娘が二人、私にとっては姉の春子と千代子が生まれていました。

最初は父が出稼ぎということで南洋へ行きました。後で母と姉たちは呼び寄せられました。そのとき、母のお腹には私がいきました。妹のシズコ、弟の武治、武信がサイパンで生まれました。戦後、サイパンの収容所で、君子が生まれました。

父はサイパンでは農業をしていました。サトウキビ・芋・それからスイカなどを作っていました。どこに出荷していたかは分かりま

せんが、牛が引く荷車にいっぱい乗せて集積所へ持つて行きました。私が八歳になるまではダンダンという所にいました。ラウラウともいうようですが、私たちはダンダンといっていました。九歳になったときにアスリートへ引つ越しました。サイパンでは、父が渡ってから十年間暮らしました。

家はトタン葺きで広く、野菜は自分たちで食べる分だけを作っていました。芋は豚の餌にもしていました。家畜は豚・鶏・山羊・牛を飼っていました。サトウキビと綿は出荷していました。綿は山で栽培していました。

ダンダンには線路が通っていて、家の方からだいたい一〇〇メートル向こうの方に線路がありました。線路をひとつ越えて学校へ行きました。線路沿いに酒保がありました。

学校で勉強したことなどは遠い話ですから、記憶にあんまりないのですが、朝礼式で腹下しのナチョーラを飲まされたことを覚えています。生徒は一学年一クラスで、三〇人ぐらいいたと思います。沖縄の人と、他の県の人の区別は分かりませんでした。朝鮮の人もクラスにいたと思います。日本人と同じで朝鮮の人たちも農業をしていたと思います。三年生の途中で戦争になりましたが、学校生活のなかで覚えていることは、運動会や学芸会です。運動会では家族でお弁当を食べました。

現地の人たちは山にいて、日本人は街にいましたから現地の人たちは見たことはありませんでした。向こうの人とは親睦があっても酒を飲ませてはいけませんでした。家では標準語を使っていました。

父と母は二人で話すときはシマクウトウバを使っていました。

国民学校はやがて軍に供用されましたから、山学校、山に集まって勉強することになりました。集まった生徒は二〇人ぐらいでした。時間になると先生が来て授業がありました。学年はバラバラでした。それから、すぐ戦争が始まりましたので、そんなに長くは山学校はしていません。

サイレンが鳴って、山に空爆があり、海を見たら軍艦がたくさんあって、艦砲射撃が始まりました。もう家にいられない、アスリートにいたら危ないからと、線路づたいにどんだん北の方に向かい、防空壕で隠れていたのですが、食べ物がなくなりましたので家に帰ることにしました。しかし、壕の外にはアメリカの兵隊がたくさんいて、木の葉っぱをかぶってカモフラージュをしていました。少しも動かないのですが、急に銃を持った兵隊が立ちあがりましたのでびっくりしました。逃げ出したのですが、その兵隊たちは何も危害など加えませんでした。

私たちはそれからずっと避難生活で、マッピの方まで逃げて行きました。タツポーチヨのふもとの壕にたどり着きました。六人ぐらい入る壕で、戦車の音が聞こえました。艦砲射撃の前には、ヘリコプターがまわりますので、艦砲射撃が始まるのが分かりました。一番上の長女の春子がそれで破片を受けました。父が破片をつかんでとうとうしたら熱くて、食い込んでとれないものですから、カマで切ってちよつと広げてとって捨てました。父は防衛隊、春子姉さんは軍属で飛行場に勤めていたのですが、家族と一緒に避難していま

した。タナバコまで行かないところの絶壁で隠れていたとき、上からの機関銃で父は撃たれて亡くなりました。私たちは撃たれた所は見えてませんが、倒れている父を見ました。弟の武治と妹のシズコもそこで亡くなりました。戦争がもうすぐ終わるといふときでした。

亡くなった父と弟、妹の三人を並べて寝かせ、身重の母は弟武信をおぶって海岸端の長い防空壕、自然の壕に避難したのですが、敵の軍艦が日本語で出てきなさいって呼びかけてきました。何もしないから出てこい、出てこい、何分以内で出てこなかったら放射機で焼くと呼びかけるものですから、出て行きました。日本の兵隊も四、五人いましたがおとなしく捕虜になりました。そのときには弟も亡くなっていました。弟は何も食べるものがなくて餓死させてしまいました。おっぱいもあげられない、飲み水も食べ物ありませんでしたから。お米を持っても炊けなくて。一度は塩水で炊いてみましたが、辛くて食べられるものではありませんでした。

残った母と私と傷を負った姉の春子と千代子の四人は収容所へ行くことになりました。私はあんなに激しい戦争で傷ひとつもなかったのを不思議に思いました。

壕から出て行くと軍用のトラックが待っていて、捕虜を乗せて収容所へ連れて行きました。トラックの所には捕虜になった人がたくさんいました。みんな水をもらって、チョコレートももらって食べていました。

私たちはススペの収容所へ連れて行かれました。南洋興発の製糖工場の煙突が立っている所でした。煙突は危ないからとアメリカの

人が倒したので、戦争が終わったと感じました。収容所には孤児院とか売店もありました。畑を耕したり、死体を運んで、片づけたりという作業をしていました。朝鮮の人のキャンプ収容所は別々でした。

姉の春子は収容所に入ってから、傷口がひどくなって破傷風にかかっていました。座っていても後ろに転がったりしてじっとしていられなくなっていましたので、軍病院に入院しました。母もついて行けませんでしたから、連絡を待っていました、とうとうその後は戻ってきませんでした。

収容所には学校があつて、トタン葺き建物で、教室もちゃんとありました。先生はどこから連れて来た方なのか分かりません。学年はバラバラで、どんな勉強をしたのか覚えていません。

収容所では団体ごとに運動会などもありました。走ったり、俵かつぎなどもありました。団体で勝負をしました。映画も上映されました。映画館はなくて青空映画館で、外国の映画を観ました。売店の近くに酒保がありました。売店の近くに炊事場もありました。ご飯が炊けているか見に行くと焦げたものをもって食べることができました。

その頃、まだ戦争が終わっていないからと山にいる兵隊がいました。その人たちは私たちが収容所に入ってから、銃撃をされていてバンバンと、聞こえていました。戦争が完全に終わってから、日本の戦闘機が来て撃ち落とされていました。収容所にその戦闘機が落ちたことがありましたね。



日本人収容所で遊ぶ子どもたち。サイパン島にて。
[1944 年撮影 沖縄県公文書館所蔵]

収容所には二年くらいいました。収容所の生活も子どもでしたからブランコをしたり子ども同士で遊んだり、楽しかった記憶があります。ホウオウボクという南洋桜も咲いてとても綺麗でした。

南洋では日本人が一等国民で、朝鮮の人が二等国民、現地の人が三等国民だったと思います。戦争が終わると日本人は三等国民になっていました。

収容所にいた人たちは何回かに分けて引き揚げて行きました。引き揚げ船はなかが空洞で、そこにみんな泣いて座っていました。揺れてあつちに行ったりこつちに転がったりしました。荷物は着物だけで他には何もありませんでした。

私たちは直接沖縄に引き揚げて、インヌミヤードウイの収容所に入りました。それから浦添の仲間の収容所に来ました。仲間の収容所には一年はいなかったと思います。仲間の収容所は、入口に門番する人がいました。沖縄の人でした。仲間の収容所では子どもたち同士で遊ぶということはあまりありませんでした。そしてようやく西原に帰ってきました。西原にあった家に二所帯入れられました。南洋では標準語を使っていたが、引き揚げてからは方言を使いました。

これまで南洋のサイパンでの話などはしませんでした。戦後サイパンへは墓参団で母と二人で一度行きました。ダンダンの家も探して家にあった丸いタンクを見つけることができました。水タンクはコンクリート製でふたつありました。私たちの屋敷のあった場所には現地の方が家を建てて住んでいました。

タクシーもないしバスはありませんので、自家用車を持っている地元の人たちに頼んで島をまわりました。

その後は行っています。でも懐かしかったですね。覚えていることは、ようやくこれぐらいです。

【二〇一二年九月五日石川朋子 調査】

沖縄県浦添市

サイパンで篤農家として成功していた両親

上間芳子

サイパン生まれ

昭和十年十月二三日

私の父、山内盛起は明治三八年八月十六日、恩納村南恩納で出生しました。母も同じ南恩納出身の佐渡山ツルで、歳も同じでした。母は父の呼び寄せでサイパンに渡航したそうです。父の長男にあたる家もサイパンに渡っていたようですが、長男ということもあり、戦前で沖縄に引き揚げてきたそうです。生前、父は昔のことはまったく話さない人でしたので、サイパンの話は主に母から聞かされていました。

父は師範学校に在学していて、寮では屋良主席と一緒にだったそう

です。父は師範学校を三年で中退し、十九歳のときに単身サイパンに渡航したと聞いています。最初の頃は南洋興発のサトウキビ作りの小作人をしていたようですが、はつきとしたことは分かりません。ただ、そこでの賃金がものすごく安かったため、まわりから頼まれ父が先頭にたつて会社に賃金を上げて欲しいといった交渉をしたそうです。しかし、しばらくすると会社の方から土地を明け渡すようにいわれたため、現地の人からタツポーチヨのすぐふもとに土地借りて、そこを開墾して野菜作りを始め、そこに暮らしていました。

父は県人会の役員もやっていたようで、私は一度だけ父に連れられて交流会に行ったことがあります。そのとき、隣にいたおじさんが私にかまぼこを分けてくれたことがとてもうれしかったことを覚えていますが、父は学歴があつたため、サイパンで教員して欲しいといわれていたみたいですが「教員をしに来たんじゃない」ときっぱり断つたそうです。戦争直前になると警防団長も務めていました。

私たちが住んでいた所は、東村だったと記憶しています。私が生まれる頃には篤農家としてガラパンの街やテニアン島に野菜を卸していました。開墾当初は何もなかったのですが、母は長女をおんぶしながら野生の豆をとりに行ったりしていたそうです。私が小さい頃はトタン葺きの小さな家だったのですが、戦争の二年前に家を新築しました。当時としては大きな家でした。石垣を組んでその上に家を建て、その側に地下タンクを設置し、そこに雨水を貯めていました。地下タンクがなかったときには、通学路の近くあった大きな川から水を汲んでいたと聞いています。

南洋でも芋は食べますが、白米も普通に食べていました。あと、野菜とお味噌汁をいただいでいました。私の家では豚や山羊も何頭か飼っていたし、鶏は一〇〇羽以上を放し飼いにしていたので、時々親戚を呼んで家畜をつぶし栄養会をすることもありました。

サイパンにいた頃は、沖繩の話を両親から聞くことはありませんでしたが、時々黒砂糖が送られてきて、母は「黒砂糖が送られてきたよ」と言って、とても大事にして私たちに与えていました。

当時、私は五つ六つくらいだったので仕事を手伝ったりすることとはなかったのですが、両親は芋やキャッサバ・ハワイイモ・ピーナツなど、とにかくいろんなものを作っていて、白ネギやトマトをひとつひとつ新聞で包んで箱詰めにしてカレーターに積んで市場に行っていました。テナアン島にも卸していたので、船の出るときには忙しそうにしていました。サイパンはハブがいなかったので、母たちがトマト畑で仕事をしているあいだ、実を食べたりして遊んでいました。

両親が野菜をガラパンの街に卸すとき、何度か一緒に行ったことがあります。お菓子はあまり買ってくれませんでした。時々アイスクャンデーを買ってもらったり、沖繩そばを食べたりしました。支庁桟橋で仕事をしているあいだ、妹と二人で待っていて、帰りにアチコーコーのかまぼこを食べさせてもらったこともあります。小学校に入学するときには、ランドセルを買いにガラパンのデパートまで行きました。グライダーの大会や相撲大会を見に行ったこともあります。

学校はチャッチャにある尋常小学校に通っていました。学校は海岸の近くにあつて、タツポーチョのふもとから海まで歩くのがとにかく大変でした。床張りの校舎でとても立派な建物でした。

登校のとき、門には日の丸があがっていて、まずそこに最敬礼して入り、そして、帰りもまた振り向いて礼をして帰りました。日の丸は上級生が当番制で掲揚していて、揚げたり降ろしたりするときにはトランペットを吹いていました。教室には教育勅語が額に飾られていて、いつも口ずさんで席に座っていたので、日常的に覚えていきました。一年生のときは沖繩出身の国吉光子先生が担任をしていました。当時の授業は教科書を使って読み書きをしたり、音読をしたり、修身もありました。授業は楽しかったのですが、やっぱり歌と言えば軍歌が多かったです。学芸会もそういう内容でした。あまり覚えていないのですが、運動会のようにアメリカのルーズベルト大統領的をお手玉でぶつけるという競技もありました。最後の運動会るとき、現地の女性たちが花の冠をかぶり、ワンピースを着てフラダンスのように踊っていた様子がとても印象に残っています。

クラスには本土出身の子もいましたが、沖繩出身とか本土出身とかの意識は特にありませんでした。戦後になって、名前で「この人沖繩の人だったんだな」って思うくらいです。

ただ、これも母から聞いた話ですが、南洋庁に勤めていた沖繩出身の人が、沖繩の人たちを困らせたことがあつて、そこでも父が出て行って話をしていたみたいですので、大人のなかでは沖繩差別も多少はあつたと思います。

それでも、ごく普通の生活をし、戦争直前には陸稲も作っていました。それが実って、ゆらゆらと黄金色になった頃、戦争が始まったのを覚えています。三年生に進級したばかりのことでした。

戦争が始まって最初の一週間ぐらいは、家のすぐそばにある小さな防空壕のなかにいました。父はあらかじめ非常用の防空壕をすぐ近く、家から五メートルぐらい離れた岩の下に穴を掘って「大きい壕に間に合わないときはそこに駆け込むように」と言っていました。しかし、ガラパンから避難してきた人たちが私たちの住む所まで押し寄せてきたので、私たちは逆に追い出される恰好になりました。飼っていた家畜も瞬く間に全部なくなり、みかんの木にたくさんあった実もすべてなくなっていました。さらに、爆弾でやられてしまったので、今度は親戚と一緒にジャングルのなかに逃げ、自然の防空壕に行きました。夕方になると、日本兵がやってきて「明日からここはもつと激戦になって危険になる。他の兵隊たちと一緒に逃げなさい」と言われました。ですが父が「兵隊と一緒に行ったら余計危険だ。自分たちは残る」と言い張ったのです。私は泣いて「みんなと一緒に死んでもいいから、一緒に行こう」と言ったのですが、父は頑として譲りませんでした。親戚の人たちは兵隊と一緒に逃げ、私たちはそのまま一週間ほど壕のなかに残っていたのですが、また後から日本兵がやってきて結局は壕を追い出され、母はわずかな荷物を持って父と姉たちが下のきょうだいを抱え、私は三年生だったので父の後を一生懸命ついて歩きました。四〇日ぐらい山のなかをさまよい歩き、七月二〇日に私たち家族は米軍に保護されました。

保護されたとき、見たこともない人たちが鉄砲を持っていたので「みんな一緒に殺されるんじゃないか」と思って少し怖くなりました。ただ父は片言の英語が話せたので、米兵と何か話をして米兵が父の手に鉛玉やお菓子を渡していました。「みんなに配りなさい」ということだったと思います。でも、私たちはこれに毒が入っているんじゃないかという気持ちと、鉛玉に煙の臭いが残っている感じで、なかなか食えることができませんでした。本当は水も飲みたかったのですが、水を飲むこともできませんでした。

米軍に保護され、収容所に来たのは夜明け頃でした。最初の頃はトタン葺きの床なしの砂地の上で何世帯も一緒になって生活していました。そこで何日か寝起きたあと、別のテントに移動させられたのですが、そこにはすでに知らない人たちがいて、とても窮屈な所でした。一日一個おにぎりの配給がありましたが、体が衰弱きつていたので初めは喉を通りませんでした。配られていたビタミン剤を何とか飲んでいたぐらいです。

それから、再び収容所を移され、八〇人と一緒に生活をしました。トタン葺きの長屋でした。しばらくしてさらに収容所を移され、そこではじめて味噌汁の配給を受けました。味噌汁といっても具も入っていないもので、栄養的にとても足りているものではありませんでした。父はその炊事担当、確か沖縄の人だったかと思いますが、その人に何とかならないかという交渉をして、少しずつお麴が入るようになりました。しかし、栄養失調で亡くなる子どもたちはいいて、私の一番下の妹も「お肉が食べたい」と言いながら亡くなりました。

その頃、希望する人は收容所の外にある農場に通うことができるという情報が入ったので父が申し込み、家族で農場通いをしました。朝九時頃から集団で移動し、夕方に戻ってきました。そこで収穫したものは自由に食べることができたので、ヨモギとか食べられるものを摘んで持って帰って食べていました。余ったときには、私たちは売店といていましたが、そこに買い上げてもらいました。

農場では学校が開校されていたので、そこに少し通っていました。教科書はなかったのですが、主要科目と南洋群島の地理を習っていました。学校には星条旗が掲げられていて、英語の授業を二世の方が教えていたことを覚えています。私は收容所に学校があったことは知りませんが、すぐ上の姉は農場の学校ではなく、收容所の学校に通っていたといっていますので、收容所のなかにも学校があったと思います。

沖繩に引き揚げてきた年ははっきりしませんが、二月だったことは覚えています。命だけもらってきたような思いでした。戦後、慰霊祭に二回行きましたが、そのときに自分たちが住んでいた屋敷に行ってみたくて訪ねたら、当時土地を貸してくれた人の家族がいらっしゃったので、事情を話すと車を出してもらい古屋敷まで行って案内してもらいました。今は現地の方がきれいなお屋敷を建てて住んでいましたが、父が掘った防空壕と炊飯がひとつ残っていました。

私たちは両親の故郷である南恩納に引き揚げました。そこには母の祖母とおじのお嫁さんがいて、祖母たちが住んでいた家の半分を

仕切って住んでいました。父はそこでも周囲から「教員になってほしい」と説得され、長く勤めないことを条件に教員の仕事に就きました。五、六年は勤めたはずですが、退職後は区長を務めながら母と一緒に農業をしていました。

私は引き揚げから二か月後の四月に恩納小学校に編入しました。本当なら五年生のはずが一級下の四年生からはじめました。なので「何で一級遅れなのか。言葉だって標準語なのに。何でこんな差別をするのか」と父に強く反抗したけどダメでした。南洋にいた頃は標準語だったので最初は方言が分かりませんでした。でも、友達との遊びの中で自然に覚えていったので、苦労した覚えはありません。中学は恩納中学校に通い、高等学校の受験をして合格通知まで受けたのですが、その高校に通うことなく八重山に行くことになりました。というのは石垣島で瓦工場の工場長をしている母のいとこが訪ねてきて、その人から八重山の話聞いた父が移住を決めたからです。

私たちはいわゆる開拓移民ではありませんでした。母のいとこの友人にお医者さんがいて、その方が新川に別荘を持っていたのでそこに住むことになりました。その家は瓦葺きで周囲は木が茂っているような所にあつたので、その周囲を開墾していきました。父にとってはとてもいい環境でしたが、私たちはなじまず、帰りたい一心でコザにあった看護学校を受験し、三年通って正看護婦の免許をとりました。卒業後は宮古にある政府立の療養所に二年、金武保養院に一年勤めました。そのときの婦長さんから「公看学校になる気持ち

はないね」と言われ、那覇で一年ほど勉強し公衆衛生看護婦の資格をとりました。資格をとった後は、八重山の保健所、コザ保健所、石川保健所に勤めました。

公衆衛生看護は、結核予防やマラリア予防などの予防指導が主ですが、当時は助産婦も少なかったので産業衛生や学童保健など幅広く扱います。八重山にいた頃は、星野や伊野田といった開拓移民集落と小浜島を担当し、集落をまわって講習していました。昼はみんな忙しいので夜に講習会や説明会、たまに映写会をしました。

一九六二年に八重山出身の人と結婚し、再び八重山の保健所に勤務することになりました。二年ほど勤めたのですが、ちょうどそのときに養護教諭の採用試験に合格し、那覇や西原の中学校で勤めました。そのあいだに、浦添に移住してきました。

【二〇一一年八月二九日宮内久光調査】

沖縄県浦添市

サイパンの記憶

池宮繁子

サイパン生まれ

昭和十八年四月十五日

私は結婚してすぐ、昭和四四年に茶山に来ました。茶山ができた最初の頃ですね。茶山は寄り集まりで色々な所から移ってきた方がいます。私はサイパンのチャツチャ村生まれで、父は旧具志川の兼箇段（米原）、母は与那原の出身です。父は大正四年、母は明治四五年の生まれです。

昭和に入ってから、両親は一緒にサイパンへ行ったそうです。母は妊娠していて、長男がサイパンで昭和十年に生まれました。サイパンで生まれたのは長男兄さん・長女姉さん・二男兄さん・三男兄さん・そして二女の私です。沖縄に帰って来てから妹が二人生まれました。サイパンから家族で生きて帰ってきたのは、両親と長男兄さん、姉と私です。二男、三男の兄はサイパンで亡くなりました。

サイパンでのことは、ほとんど記憶にありませんので、主に姉から聞いたことをお話しします。

父の仕事はサトウキビ作り、南洋興発の募集で行ったのだと思います。サイパンには父のいとこの二家族、姉家族がいたそうです。最初は雇われていたそうです。父は末っ子できょうだいも多く、長男以外は海外に出ていたようで、兄二人はフィリピン、一人はブラ

ジル、アルゼンチンへ行った姉もいます。

父のいとこたちが先にサイパンへ行っていて、働いたお金と手紙などが送られてきていたそうです。その手紙には、沖縄と同じ環境でサトウキビがあつて海があつて、魚がいっぱいいて、果物がいっぱいあつてと、まるで夢のような話がかかれていたそうです。それで若い新婚の両親は夢を見たのでしょう。昔の沖縄では土地がいっぱいあつても長男が継ぎますから、二男三男は自分で働かないといけません。父の実家は土地は結構ありますが、夢を求めてというか新天地を求めてというか、働きに出たのだと思います。

母は大きなおなかでサイパンへ渡航し、出産したのですが、生まれた兄を取り上げたのは産婆ではなく、父のいとこだったそうです。母は出産してからすぐには仕事ができせんから、父が一人で仕事をしていたと聞いています。父の姉やいとこたちも出産ラッシュだったそうで、みんな近くに住んでいたので生まれた子をお互いに預かるなど、助け合っていたという話です。引き揚げてからも、亡くなるまで近くに住んでいて行き来をしていました。

戦争が始まるまでは、贅沢ではないけど、のどかだいい暮らしだったそうです。いい暮らしというのはちよつと語弊があるのですが、マンガーやパンの実など果物が豊富で、海もきれいで楽しい思い出がいっぱいだったということを姉もいとこたちもよく話しています。戦争の話も、私は当時まだ一歳でしたから分かりませんが、壕のなかで日本兵に鉄砲で殺されそうになったり、壕から追い出されたなどの話は色々聞いています。

昭和十二年生まれの姉は国民学校の一年生で、空襲が始まると学校へはちよつとしか行けず、入学のために靴を買ってもらつて喜んだのも束の間だったと言っていました。兄は三年生で、軍の作業をしたそうです。学校の校舎にも兵隊が入つて来て、自分たちは校庭の木の下で授業を受けたそうです。

父は怪我をしていたので兵隊にはなれず、手旗信号で合図をする仕事をさせられたそうです。どこかへ派遣されるのではなく、家族と一緒に行動していたので、戦争が始まったら一緒に逃げたといっていました。父も一緒でしたので、家族は生き延びることができたと思います。

家族は島の最北端のバンザイクリフまで逃げるあいだ、空爆があり、艦砲射撃もある、後ろからも弾が飛んでくる、行き場がなくて、追い詰められていたようです。そして、バンザイクリフでは、海しかありませんから家族みんな飛び込んだそうです。

父が飛び込むついでに、姉は、海で死んだ人がいっぱい浮いているので「いやっ」と言つて抵抗したそうです。そうしたら置いていくよつて、父にいわれて飛び込んだそうです。飛び込んだ所が、岩と岩のあいだの潮だまりで、みんな同じ所に落ちて運よく助かったといっていました。助かって海から出ようと足を踏み出そうとしたら死体がいっぱいあつて、なかなか海岸に出られなかったそうです。穴に隠れているところを上から「出てこい出てこい」と言われて、結局、捕虜になったそうです。ススぺの収容所に着いたときは、十二月のクリスマス前だったそうです。米軍上陸から半年近く逃げ

まわり、昭和十八年生まれが一番小さい私はやっと息をしている状態でした。ずっと母がおぶって逃げていたそうです。水も食べ物も十分ないので、おしっこもウンチも出なかったそうです。一歳とちよつとで重かったはずですが、よく捨てられなかったなと思います。二男兄さんは五、六歳で、父が抱いて座っているところを後ろからやられて、父の股を通って太ももをもぎとられて亡くなりました。三男兄さんは三、四歳で、栄養失調で亡くなりました。

父は戦時中の教育を受けていますから、捕虜になることは絶対いやだったようですが、米兵も投降呼びかけに慣れていたので水や食べ物で自分の口に入れて、大丈夫だと見せて、日本語が少しできる二世の方が呼び掛けていたので、家族そろって穴から出て行ったそうです。母も兄も怪我をしていて病院へ行かされたのですが、女は殺されると思ったようで母は絶対行かないと、私を抱いてここから動かないという感じだったそうです。

収容されたとき、私はカリマヤー（枯れた猫、痩せた猫）のようで、声も出ないぐらいに弱っていたそうです。戦後、親戚に「お母さんだったから、あんたはこうして生きているのだから親孝行をなささい」と口酸っぱく言われました。

収容所では、父たちは作業に出るようになりました。父は作業に行く途中、乞食みたいな孤児がいて、よく見たら、父の姉の子どもたち六人だったので、連れて帰って来ました。いとこたちは私たちより先に捕虜になっていたようですが、孤児だったので配給の食べ物も満足にもらえず、縁の下の所にいたそうです。それから、沖

繩に一緒に引き揚げるまでずっと父や母が面倒を見ていました。そんなわけで、いとこたちは両親を死ぬまで大事にしてくれました。今でもお線香をあげに来てくれます。

キャンプでの生活は、父はゲートから出て作業をしていたそうで、帰りには腰にいっぱい野菜をくくって、拾った物などを持っていたそうです。家族だけでなくきょうだいの子どもいますから、配給では足りなくて野菜を持ち帰ってきたのでしょう。キャンプの規律は結構厳しくて見つかったら銃殺もありえたそうです。

私たちの引き揚げは昭和二十一年の肌寒いときでした。米原には結構サイパン帰りがいます。姉やいとこたちが集まったら、戦争の話やサイパンの話ばかりでした。

南洋といえば戦争の話が多いですよ。もちろんマンゴーがあったとか魚がいっぱいいたとかっていう話は聞きますが、私にとってはサイパンイコール戦争です。沖縄は唯一の地上戦とかがいますが、サイパンも同じように地上戦で悲惨な思いをして大変でした。いとこたちは両親ときょうだい三人を亡くしているので、毎年といっていいほど、慰霊墓参でサイパンへ行っています。私の両親に「自分たちがお金出すから一緒に行こう」とずっと誘っていましたが、父も母も一度も行きませんでした。一生懸命働いて、夢を見て、ある程度生活ができていたのに、全部失って子どもの骨さえも持って帰れなかったですからね。父も母も私たちには南洋のことは話したがりなかったです。最後まで、何であんな島に行くのっていう感じで父も母も、首を縦に振らなかったですね。とにかく口に出せないよ

うな深い傷を負っていたと思います。

姉は七、八年前に慰霊墓参でサイパンへ行きました。バンザイクリフを見て「こんな高い所から飛び込んで、よく生きていたと思った」と私に言っていました。姉はいとこがどこにいたとか、家の間取りとか、全部覚えています。いとこは戦後行つたときに、水タンクの形で自分の屋敷跡を見つけたといっていました。

私も行って自分の生まれた所を確認したい、という思いはあります。私にとって特別な所です。来年あたり行こうかと思っています。

【二〇一一年九月九日石川朋子調査】

浦添市立図書館

神戸での女工体験とサイパン・テニアンでの生活

平敷寿恵子

当山生まれ

大正十二年八月十五日

私は大正一二年八月一五日の生まれで、母は又吉ウタミといい、浦添の当山の出身です。父三郎は首里からのイリムーク（入り婿）ですが、旧姓は同じ又吉で、母とは親戚関係にありました。長男兄は盛善、二男兄さんが盛美、長女姉さんがウト、二女姉さんが八重

といい、私は末っ子です。父は農業を知らない、できない人で、スィダルーといわれていたので、馬鹿にされているという気持ちがあったようです。

父はペルーに行ったのですが、病気をして仕事ができなくなって沖縄に戻ってきました。ペルーへ行く前に在郷軍人のパーティがあつて、お酒を飲んで浦添ゆうどれの階段ですべて胸を打つていたので、この後遺症もあつて、気候に合わなくて病気になつたらしいです。一緒に行つた方たちからこのままペルーにいては大変だから「むこう運賃」（沖縄で迎えてお金を支払うこと）で沖縄に帰るようにいわれたそうです。母はお金を準備して棧橋に迎えに行つたそうです。父は帰国後、結核になつて私が生まれる前に三三歳で亡くなりました。黒い蝶ネクタイをしている父の旅券の写真は見たが、戦争で失くしてしまいました。

母は畑で家族が食べる分の野菜を作つて、夜は帽子クマーをして私たち子ども五人を養い、高等科まで行かせてくれました。姉二人は学校卒業後、紡績に行きました。ウト姉さんは私に着物や履物を送ってくれました。私は末っ子で、姉とは親子ほど年も離れていました。私はヨーガリーグアだったので、みんなが芋を食べていても、私だけは白いご飯を一合炊いて食べさせて貰っていました。痩せていたけれど、病気もしなかつたので六年生のときに、八か年皆勤賞を貰いました。皆勤賞を貰つたのは、一、三人でした。

盛善兄さんは卒業後、浦添小学校の給仕をしていたのですが、ユーリキヤー（優等生）だったので、先生方がもったいない、どうにか

助けないといけないと、今の通信教育のようなもので一か月一円の授業料を先生方が一人五〇銭ずつ集めて勉強させてくれました。あの当時、兄の給料は十円だったと思います。これは一、二年で卒業すると先生や巡査になれるということで目標にして頑張っていました。ところが、兄は途中で「沖繩にいてこんな狭い所で暮らすよりは海外に出て大地主になりたい」ということで親戚の人と二人で南洋に行くことにしたそうです。そのとき兄は十七、八歳だったと思います。私が八歳、一年生のときでした。南洋の島の人の土地を何十年か借りる契約で行きましたが、最初は日雇い人夫をしていました。ですから、最初の頃は送金などはありませんでした。生活が落ち着いて家も造って、同じ当山部落にいた安和ミツさんと呼び寄せて結婚しました。盛美兄さんも盛善兄さんに呼ばれて、学校を卒業して十六歳のときに南洋へ行きました。

兄たちが南洋へ行つて、姉たちが結婚した後は、母方の祖母・母・私の三人で暮らしていました。私が十三歳のときに盛善兄さんが四歳になる娘を見せに帰ってきていました。そして戻るときに部落の青年を三、四人と具志川の方で年配の方を連れて行きました。

部落の青年たちは、徴兵されて兵隊に行かすのは怖いからと、親に頼まれて連れていきました。ここではエーキンチュの息子たちですから、サイパンでの農業はきつかったと思いますよ。私と母もいずれは南洋に仏壇を持って行くことになっていました。

高等科二年を卒業して一年ほどして、十五歳くらいのときでしたか、兵庫から母のいところに来ていました。このおばさんから「一緒

に内地へ行くねー」と誘われましたが、南洋へ行くことになっていたので、母も祖母も絶対に行かさないといいました。私は「怖けど、いっぺんは行きたい」と、母にお願いしてようやく「一か年なら」と母が許してくれました。

おばさんは尼崎の鉄工所で働いていましたので、私もそこで働いていました。しばらくして、それまで森永製菓は朝鮮と沖繩の人は雇わなかったのですが、戦争が始まって朝鮮の人も沖繩の人も募集するようになりましたので、履歴書を出しました。沖繩の人二人と、朝鮮の人何人かが「塚口工場」に採用されました。一〇〇〇人くらい女工さんがいて一番大きな工場でした。真っ白なユニフォーム、エプロンを着て、帽子グワールをかぶってかわいい服装で、いつも服装検査がありました。最初はピース部に入って白いハッカのお菓子「ピース」を包んでいました。できがった点数で給料も上がりました。

次にキャラメル部に移されました。一つ一つ包んで十個ずつ集めて、缶に入ると切符みたいなものを渡され、その切符の数で点数がつきました。ピースの場合はただガラガラガラーと包むのですが、キャラメルは手で包みますから、私はゆっくりひとつずつおいて、遅いものですから十九は包みきれませんでした。アチコーコーのキャラメルも食べられました。

工場では沖繩の人、朝鮮の人といって差別されて作業を分けられたりすることはありませんでした。でもあちらの方はすぐに「お国はどこ？」と大阪弁で聞くものですから、沖繩といったらばかにされるので九州、鹿児島とかいうと「そうか」と言われました。同じ

作業台に沖縄の人はいませんでしたが、隣の作業台には先輩がいました。この方と話すときも慣れないといけないと思って、大阪弁を使うようにして方言は使いませんでした。

工場の大きな池には船もありましたので、休み時間にはこれに乗ったりもしていました。相当広い敷地でしたから、畑を作りたい人には作らせていました。お昼ごはんは社内食堂で食べると給料から差し引かれますから、私はお弁当を持って行っていました。

給料は十円で、下宿から工場までの汽車賃は会社がいくらか負担していましたが三円はかかったと思います。母のいとこの家に下宿して下宿代も払ったら残るものはなくて、沖縄にお金を送ったことはありませんでした。

一年だけということでしたので、翌年の旧正月には帰りました。沖縄から来た人が「母が足を怪我している」と言うので帰ったら、何でもなかったですね。嘘をつかないと帰ってこないと思ったようです。会社の人に辞めて沖縄へ帰るとしても、他の会社で働くのではないかと思われて、「ここで働いた方がいいよ」と説得されました。それでも辞めるという話をしたら、それなら退職金は沖縄へ送るからねということになり、後から四〇円が送られてきました。

兄たちは私を女学校に行かせたいと、学費は送るからと母に手紙を出したのですが、もしも学費を送れなくなったらどうするかと心配していました。それなら、サイパンに私を呼んでこっちで高等科を出れば、サイパンの女学校に入れると思うからここによしなさ

い、とまでいったのですが、母は「沖縄に祖母と二人残るのは寂しい」と言っただけで聞かなかったようです。それでとうとう六月になると兄から、早くサイパンに来なさいという手紙がきました。その日の晩には運賃として一〇〇円が届きました。

兄たちは、私が沖縄で結婚してしまうと沖縄に残って母の面倒をみることになるからと、私をすぐ呼び寄せました。母はウフオバー（母方の祖母）は高齢だから、船で何日もかかる所へは連れていけないから、サイパンへは行けないということでした。このウフオバーは戦争のときに壕で亡くなりました。母は避難させたり大変だったそうです。結局母は南洋へは行きませんでした。二女のヤエ姉さんは、旦那さんが海軍だったので沖縄にいました。

私は昭和十六年にサイパンへ行きました。その年の六月には戦争で沖縄から海外へは、特に南洋へは行けなかったのですが、六月前の申し込みだったという村長の証明があればいいということでしたので、村長は親戚だったのでお願いに行きました。村長は親戚だからといって証明できないということでしたが、内地を経由して行くことはできたので、兵庫、神戸まで船で行って、横浜へ汽車で行き、そこで二、三日滞在してサイパンへ行くことにしました。横浜ではつるや旅館に泊まりました。私は一人で行くのが心細かったのですが、兵庫で私とおなじ歳でサイパンへ行く人がいて、一緒に行きました。サイパンまでは一週間ほどかかりましたかね。長女のウト姉さんもサイパンへ渡航していて、真栄原出身の旦那さんとマタンシヤに住んでいました。

長男の盛善兄さんはサイパンのタナパグという所に現地の方の土地を借りて野菜を作っていました。広い畑で主にタピオカを作っていて、畑の土はふくふくとやわらかくて、牛に犁を引かせていました。サイパンにはタピオカ工場が二か所ありました。兄は大橋タピオカという会社に出荷していました。タピオカ芋はカレーターに乗せて運んでいました。

盛善兄さんの所では当山から連れて行った人が二人、具志川の人が一人住み込みでいました。他にも今のアルバイトみたいにおばちゃんたち四、五人が毎日来ていました。兄はカボチャも作っていて、最初はナンセイ会社という所に納めていたのですが、みんなで組合のような会社を作って自分たちでカボチャを出荷するようにしました。賞ももらって、柱時計をもらっていました。

兄の家はガラパンにあって、とても広い長屋になっていました。人夫たち三人が寝る部屋があって、仏壇を置ける部屋を兄たち親子が使っていました。炊事場があって、端っこにもうひとつ部屋がありました。床下は上がっていて、タピオカを保存してありました。屋根のトタンに板も敷いていました。

二男の盛美兄さんは、ドンニーで雑貨商を始めました。そこでサイパン生まれのシマブクさんという方と結婚しました。この義姉さんがお産でしたので、私は売り子をして、兄の子ども・長男・二男・長女の面倒を見て手伝いました。

お産が済んで落ち着いた頃、「あんたはもう何かしたいのだったら、学校へ行かすからどこがいいねー」と言ってくれました。姉妹だけ

も女学校へ行っていないので、サイパン女学校へも行かせたいということでした。私は小さい頃から洋裁が好きで、四年生の頃から新聞を切り抜いて縫っていました。六年生か、高等一年のときでしたか、ミシンを習いました。みんなはミシンを後戻りさせたりしたのに、私は順調にこれができて、ミシン屋さんみたいねと先生にほめられました。私は高等科一年のときに浦添小学校のセーラー服が縫えたので、村長さんの娘のセーラー服を縫いました。それで兄さんに「私は洋裁が好き」と言ったら、「じゃあ、早く行って申し込んできなさい」ということでガラパンの三和洋裁学校という所に行かせてくれました。

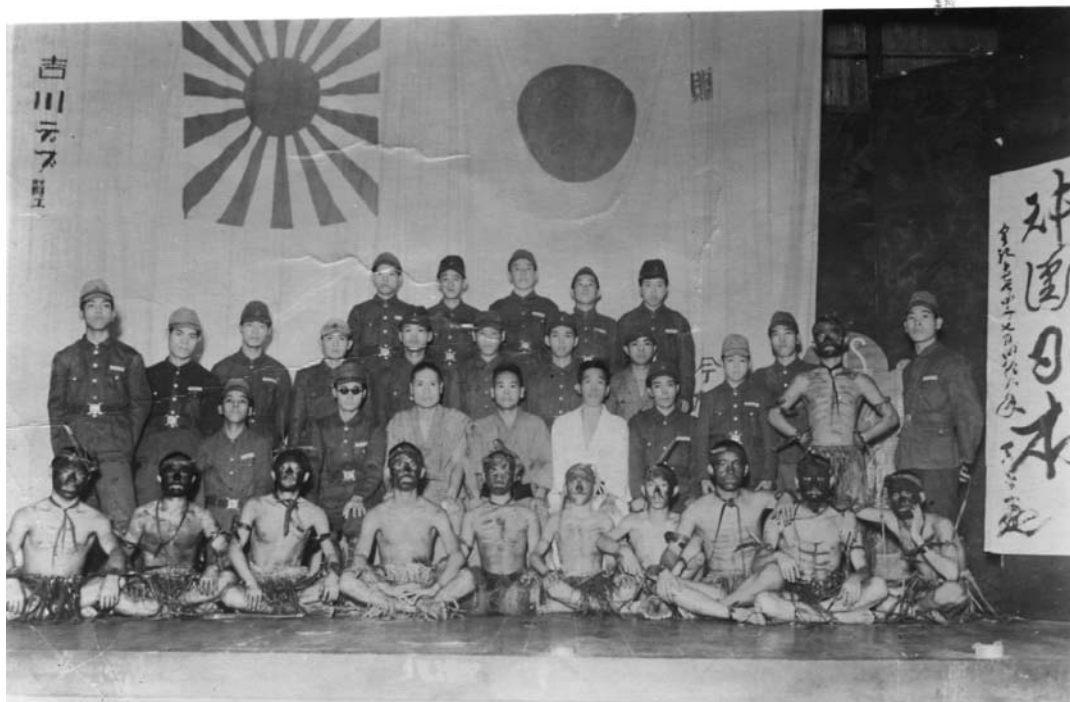
学校へは自転車で通いました。サイパンではほとんどの人が一台自転車を持っていました。兄の店の儲けも一か月十円くらいだったと思うのですが、一か月十円の洋裁学校の月謝を出してくれて、六か月間通いました。先生は名護出身の謝花先生でした。洋裁学校の生徒は十人くらいで、午前と午後の部の授業がありました。私は午前の部に通っていました。ここを卒業してもミシンがないと役に立ちませんが、私は裁縫で自分のお店も持ちたいと思っていました。グアムが陥落すると、サイパンに向こうの物資が入ってきて、軍関係の人たちが純綿の白いシャツを売ったりしていましたので、兄がそれを手に入れて私がそれでワイシャツを縫っていました。

私の夫は親たちが決めた許婚^{いなさけ}で平敷兼栄といい、私より四歳上でした。貧乏で何もない家でしたから、「アッタガコーヤー、ソナヒンスムンニクレルネー（なんで子どもを貧乏人と結婚させるの）」と

人は言ったのですが、私の兄や母は、当山の青年のなかで一番立派な子だから、必ずこの人と結婚させよう、沖縄で他の人と結婚してはいけないということでした。夫は四男で最初はサイパンにいました。

私が森永製菓にいるとき夫から手紙をもらいました。「又吉兼栄」という差出人にして送ってきました。兄が私のユニフォーム姿の写真を見せたそうです。その手紙は文章も字もよくて、私がかないませんでしたので、これだったら結婚してもいいねーと思いました。それから文通をしました。夫は小さいときに母親を、十四、五歳で父親を亡くしています。父親はリウマチで仕事ができず、長男の稼ぎで家族を養っていました。夫はとてもディキヤー（優秀）で、高等科も通っていましたが、村長さんのお父さんに、「もう親孝行と思って学校を辞めなさい」と言われて中退したそうです。父親も亡くなつて、土地も屋敷もなく、人夫をして、道ツクヤーなどをして、一人で大変苦労をしました。そして、十六、七歳の頃にサイパンへ行きました。夫の二男兄さんが先にテナアンへ行っていて、八百屋をしていましたが、その後お菓子屋を開店させ、繁盛していました。それと一緒にやろうとテナアンへ呼ばれたそうです。テナアンのソンプンにあるお菓子屋さん「平敷菓子店^{へしきかしてん}」というお店で、とても美味しいと評判のお店でした。

年頃になった私は、テナアンへ行って夫と結婚することになりました。私のきょうだいは、みんな夫のことが好きでした。私はご飯の炊き方も分からなかったので、テナアンに行く前日にウト姉さん



テナアンでの青年団の集まり [平敷寿恵子氏提供]

から、「米は洗って、水はこれくらい入れなさい」と教えられました。テニアンに行くときは、盛善兄さんは村人会の会長をしていて、その集まりがあるから連れて行けないからと盛美兄さんと、ウト姉さんが一緒に行ってくれました。

「今どきはもんぺ姿でサイパン神社で結婚式をあげるのが流行っているけれどどうするね」と兄が言ったのですが、私はタカシマを結うために髪も伸ばして、結婚式もするつもりで、肌着と長襦袢は自分のものを準備して行きました。でも、嫁ぎ先から反対されましたので結婚式は挙げないでモンペを着て、付き合いのあるお菓子組合の方などを招待して、すき焼き会をして終わろうということになりました。

結婚後、私は毎日お店でお菓子を焼く鉄板を拭いたり、夫や夫の兄とケーキや色々なお菓子を作っていました。メリケン粉もたくさんあった頃はよかったのですが、輸送ができなくなったときには、私の兄が大橋タピオカにタピオカ粉を交渉してくれてテニアンに送ってもらい、タピオカ饅頭というお菓子を作って売りました。

空襲が始まる頃、夫は青年団として警防団も兼ねていて、その務めをしなければいけなかったので、私は隣のおばさんたちと避難しました。お店も兵隊が入ってきたので、私たちは他の場所に移らなくてはなりません。夫の兄が「炭小屋でケーキを焼いて、自分たちはここに住むので、二人はサイパンのお兄さんの所へ行きなさい」と言ってくれたので、昭和十九年の三月に私と夫はサイパンへ行くことにしました。私もサイパンへ戻りたかったので兄の所で

世話になりました。夫の兄家族は、子持ちはサイパン、テニアンから疎開するようにとのことになり、兄嫁が妊娠していたので、沖縄に引き揚げるようになったのですが、やがて沖縄に着くというときに船が攻撃を受けて亡くなりました。

雑貨店をしていた盛美兄さんも戦争の影響で商売ができなくなりましたので、私の夫と一緒にサイパンの三塚部隊に履歴書を提出しました。私も洋裁の技術があったので、軍属の腕章をつけたりする仕事があったので履歴書を出したのですが、女はまだ採るか分からないけれど男は使うから、と二人は合格して軍属として勤めることになりました。私は一応相談するので待つていなさいということで、半年くらい待たされて四月に採用通知がきました。でもその頃はつわりになつていたので断りました。夫の給料は七〇円でした。

盛美兄さんは事務の仕事に就いたのですが、目が見えにくくなっていました。内地に行かないと治せないということで、赤十字の船に乗って横須賀の病院に入院して治療を受け、そのまま内地で終戦を迎えることになりました。

六月からは空襲などで避難することになりました。夫の給料日に空襲になって、給料を見もしない、使いもしないうちに着替えと一緒に風呂敷に包んで避難したのですが、盛美兄さんのお嫁さんの妹にこの包みを預けてしまいました。そうしたらこの子がこの風呂敷包みをもったまま、きょうだいたちと海に飛び込んでしまいました。助かった人もいましたが、その子はそのまま亡くなってしまいました。

私たちは盛善兄さんの家族も、隣組の人たちも一緒にタナパグの

山の壕にいました。ひと月は自分の壕にいたのですが、七月にバナデルの大きな壕に移りました。軍属だった夫も解散ということで、私たちを探しに来ていました。夫は盛善兄さんの子どもたち、めいたちに水を汲んできてあげると水を汲みに行つて、そこで背中に弾があたつて亡くなつたそうです。夫が帰つて来ないのでしばらくたつてから一緒にいた方から聞きました。私が妊娠していたので、すぐにはいえなかつたそうです。夫の遺骨を拾いには、いい時代になつたら連れて行くといつてくれたのですが、結局、行くことはできませんでした。

この壕には二〇〇〇人は入っていました。避難して二日目でしたかね、天井が開いていて手榴弾を投げ込まれました。私は怪我しませんでした。爆風で口の中もごみだらけ、歯も真つ黒になつていました。深い壕でしたから、盛善兄さんとはそのときバラバラになつてしまい、どうなったのか分からず、兄の息子の盛一（長男）もそこで亡くなりました。三番目の子どもを妊娠していた盛美兄さんの奥さんのフミさんとその子どもで長女のキクエ・長男のモリヒコは、私たちとは別で自分の親と避難して亡くなりました。

私は盛善兄さんの奥さんのミツさん、子どものハツコ・盛次と海にいたところを捕虜になりました。盛次が海水を飲んで、下痢をしていて、キャンプに入ってから亡くなりました。

私は長男兼一を昭和二〇年一月二三日に、キャンプで出産しました。キャンプには私たち家族のかかりつけだった産婆さんがいらつしやつたので、その方が生ませてくれました。

長男が生まれて一週間目でしたか、姉が息子をお風呂に入れようとしたときにお尻から膿が出まして、私も乳腺炎にかかつてしまったのでキャンプから出て、私と息子は軍の病院へ四〇日間入院して治療を受けました。最初の寝台はシラミがいっぱいで、とてもそこにはいられなかつたのですが、しばらくして病棟へ移ることができました。病院でのミルクは哺乳瓶の三回と決まっていました。息子はそれでは足りずに泣きますし、みるみる痩せていくものですから、砂糖水を飲ませましたが、死にそうになっていました。退院してからは、キャンプでは一缶配給がありましたので持ち直しました。

息子の皮膚にブツブツが出たときに、キャンプにいた年寄りが、「これは胎毒だから血を抜きなさい」と言つたので私はびっくりしたのですが、産婆のヨナミネさんが「こんなに痩せて栄養失調の子の血をとつては大変」と言つたものですからキャンプのお医者さんに診てもらうと、胎毒ではなく、皮膚の病気でした。

キャンプにいるときに配給があつて、海軍のズボンで息子の服を作りました。めいたちにも手縫いで服を作つて着せました。キャンプで働くと一日三五セントもらえました。キャンプで沖繩の様子をテレビで観せられました。沖繩はもうだめだ、ということでしたが私は絶対嘘だと思つて観ませんでした。

終戦になつて、南洋に残りたい人は残れるということだったので、沖繩には誰もいないと思つていたので、住み慣れた南洋に残るつもりでいました。でも、強制送還で最後に私と息子、盛善兄さんの嫁のミツさんとその娘の四人で引き揚げてきました。

長女のウト姉さんは山で出産したのですが、その子は助かりませんでした。末っ子のテツコは二、三歳でしたが海かどこかで亡くなりました。ウト姉さんも捕虜になつてしばらくは元氣だったのですが、産後の出血などのせいでしょうか、キャンプで亡くなりました。ウト姉さんの旦那さんと子ども四人は沖縄へ帰ってきました。

沖縄に引き揚げて、しばらくはインヌミヤードウイにいました。浦添から引き揚げ係のテドコンジュンジさんが来ました。テドコンさんは、二女の八重姉さんが嫁いだ豊里家の娘のお婿さんでした。母たちはこの方と一緒に嘉間良にいる、というので私たちもそこへ行くことにしました。

嘉間良には一か月ほどいたでしょうか、一番早い引き揚げで浦添に帰ることができました。それから浦添の人たちは次第に帰ってきました。浦添のキャンプにいるときに、ハワイにいた親戚のアワリヨウキさんが「安和という人はいますか」と探していました。安和は祖母の実家ですから、親戚だということになり、キャンプで親戚みんなを集めて写真を撮りました。

二男の盛美兄さんは、目の治療のために行った内地にそのままいました。妻子がサイパンで亡くなったことを大橋タピオカの方から聞いて、鹿児島で那覇の方と再婚して、衣料品の商売をして永住するつもりだったようですが、私が引き揚げてきていて、母と四人でいることを知って、一度密航船で帰ってきて、私たちを鹿児島に迎えるという相談をしました。けれども、沖縄に戻ってきた方がいいと考えて、沖縄に引き揚げて、九十商会を興こして成功しました。

私はサイパンでの洋裁の技術を活かして、軍での仕事などをしました。後からは盛美兄さんの会社の支店をまかされました。そして、浦添に家を建てることもできました。

戦後サイパンへは五、六回行きました。遺骨収集へは盛美兄さんと八重姉さん、ウト姉さんの息子と四人で行きました。キャンプで亡くなったウト姉さんの遺骨は、姉さんの旦那さんが印をつけて埋めていたので見つけることができましたが、夫の遺骨は探せませんでした。

【二〇一一年九月八日 石川朋子調査】

【二〇一二年八月二日 石川朋子調査】

沖縄県浦添市

南洋で十年、八重山で十年、台湾で十年、そして浦添へ

久田友明

サイパン生まれ

昭和三年

父は久田友俊ゆしゆんといひます。父親は四男で、長男は早くに亡くなったそうです。二男は久高という家に養子にいました。祖父はユウシンといい、首里の当蔵の出身です。今でもその番地があります。

当蔵界わいは首里にしてもちよつと上の方だったから、明治三八年まで旧慣制度というものがあつて、久田の人はそれまでは田舎落ちしていませんでした。旧姓は嘉手苅といい、西原のサガリバナのある所だそうです。

私の母はモウシといい、那覇の靴屋の娘で、旧姓は渡嘉敷といいます。とても優秀な人でした。のちに、私が師範学校へ入ってから、差別されてはいけないということで八重子という名に変えました。

明治三八年に父は八重山のシイナバルへ開墾に行きましたが、そこで上手くいかなかったそうです。それで丸一商会の二〇〇〇トンの船を持って、魚を市場でさばいていたそうです。

父は、南洋募集が始まった最初の頃、大正十四、五年ぐらいに行つたと思います。サトウキビ栽培は大変でしたから、父は体も大きかったので台湾でカツオ船に乗せようということだったそうです。

まず父が渡航して、母と私は後から追つて行きました。南洋へは神戸、横浜をまわつて行つたそうです。十五日くらいかったのじゃないでしょうか。母はそのとき二〇歳と若く、大変苦労をしたと思います。

サイパンには四年ほどいました。チャランカノアでいい土地を貰つてサトウキビを作っていました。いい土地ということは成長も早いのですが、作物がネズミに食われることも多く苦労もありました。そのとき、このサイパンでの暮らしも、限度があるということで、テニアンへ行くことになったそうです。その前に、テニアンで必要な種苗を作り口タへ行き、私が四歳から六歳頃までの二年ぐら

を口タで過ごしました。種苗場は慰霊の塔の向かい側の所にありました。口タには鹿がたくさんいて、留守番をしているときなど、寂しくお茶箱や素麺箱などでも大きいものに隠れて鹿の鳴き声を聞いていました。住まいは高台にありました。まわりにはハスノハギリの大きいものがたくさんありました。

口タからテニアンに移ったときはあまり記憶にありませんが、小学校に入った頃に妹が生まれて、その頃からのことはよく覚えています。妹は南洋興発の病院で産まれました。

私たちはテニアンの第四農場で暮らしました。私は十一歳までテニアンに住んでいました。テニアンでは人夫を雇つていて、男の四人、夫婦連れの人夫が二人で、石川の出身で山城やまぐすくさんという方がいました。私はチューロの学校に通い、小学校一年生の頃から学校から帰ってきたら、畑仕事を手伝っていました。チューロの学校には四年生、昭和十三年まで通いました。ひと月に一回は街へも遊びに行っていました。テニアンには芝居シーがいて、芝居小屋は四つもありました。

テニアンにいる頃、私はうんと勉強をさせられました。羅宗公園にあがつて海を見ると、サイパン島が見えました。小学校四年生ぐらいの頃でしたでしょうか、こんなちっぽけなところで一生を終わるのかなと思つて、もう勉強をしに行けるならどんなひどいところでもかまわない、ここを出て進学することを考えました。私は探究心や正義感も強く、蓄音器もどうして音がでるか、調べてみました。学校ではデキヤーでしたよ。私は同級生を引き連れてバ

ンシルーなどの木を「お前の木はこれ。私の木はこれ。」って言って、全員に分けて与えていつの間にか大将になっていました。帰還者会会長の宜野座さんもその頃の友人です。

ソンソンでは県人会の運動会が小学校の運動場で開催されていました。私も四年生ぐらいのときに参加して、色々賞を貰いました。沖縄県人会の運動会にはカルピスなども出ていました。ときには、県人会の人たちは新港にみんなで集まって魚をとって、シンメナーベで炊いたり、天ぷらを揚げて食べていました。ソンソンには病院や郵便局も色々ありました。製糖工場にはテニアンをたつ前に連れて行ってもらいました。

テニアンに飛行場を作ることになり、帰還者会会長の宜野座さんのお父さんは、飛行場を作るために宜野座組をつくりました。労働力として囚人が来ており、赤誠隊といっていました。父と宜野座さんは体が大きいものですから、この囚人たちを管理する刑務官の補助みたい仕事でぜひ残ってくれといわれたそうですが、父は私を師範学校へ入れるために引き揚げると断ったそうです。昭和十五年の最後の引き揚げだったと思います。私は昭和十三年に弟と先に引き揚げていました。私は四月に「たいよう丸」という沖縄直行の船でテニアンから祖母のいる八重山に帰ってきました。半年ぐらい経って、おばを頼って九月に台湾へ行きましたが、六年生のときに一中へ行きたいと思い、また八重山に戻ってきました。

昭和十五年に父と母そして妹、弟、妹が引き揚げてきて、登野城小学校に通いました。私は一中へ進学したかったのですが、お金が

ないので師範学校へ行くようにといわれました。師範学校は普通科というものがあつて、小学校から行けました。

昭和十六年四月、台湾の台北第二師範学校への進学が決まりました。台湾では英語を廃止して中国語を教えられていましたが、私はいい学校を受けようと思ってこっそり英語を勉強していました。昭和二〇年三月一日には学徒動員となり、私は陸軍の第二機関銃中隊に配属されました。戦後は留用となって、教員として二年半台湾に残り、昭和二十三年五月十五日に「ほうりん号」という船で引き揚げとなりました。

沖縄に戻って、一九五一年から教師をし、一九六二年から六四年までの二年間はアメリカに留学、その後工業関係の部署にいましたが、琉球政府の文教局に引つ張られて浦添高校の創立に携わりました。最後は浦添工業高校の校長で終わりました。

浦添に来たのは浦添高校に勤務した頃です。私は自動車の排気ガスがとても嫌いで、ここはまだ自然が残っていて、そういう所が好きでした。私が一番長く住んでいるのが浦添です。

【二〇一一年九月九日 崎浜靖 調査】

沖縄県浦添市

沖縄移民の島・原爆搭載の島テニアン島

新城智子

テニアン生まれ

昭和十五年十二月十五日

私の両親は与那城村屋慶名（現うるま市）の出身で、私はテニアン島生まれです。浦添ニュータウンに転居してきたのは、結婚後の昭和四七年頃です。

幼少の私がテニアン島の生活で覚えているのは、パンの実の焼ける匂いと、生い茂る木立のトンネルをくぐり抜けて、海に走って行った風景です。それから、年間を通してスコールがありました。時間を知っているかのように、三時頃になると強い雨がザーッと降り出してはパツと止み、涼しくなります。洋服が濡れても気持ちよく平気でした。

私の父大石根清俊は、大正五年生まれです。当時の沖縄は極貧の「そてつ地獄」といわれた頃で、南洋興発株式会社が沖縄から移民募集をしていたようで、父は十九歳で単身渡航して南洋興発会社の自動車部に勤めることになったようです。また、委任統治領だったテニアン島は、沖縄からのサトウキビ農業従事者の移民が急増したとのこと。その頃より妻子の呼び寄せが始まったようで、私の母千代は幼馴染だった父に呼び寄せ花嫁として十九歳のときに結婚しています。母は六人姉妹の長女で、家事の手伝いのために小学校三年

生までしか通えなかったようで、紡績工場などで働きに出て、家計を助けていたようです。

父が自動車部の車庫長になった昭和十年頃からは、構内社宅の生活は優遇されていたようです。面白いことに、人事異動で昇進のたびにランクの高い部屋に引っ越しするシステムがあったということです。父の同僚だった人の話で、当時、運転免許を取得するのにサイパン島まで行って四日間の試験があつて、そのなかで一番に父が合格したようです。

沖縄テニアン会那覇支部発行の「二本椰子」に、当時の母の思い出をつづった手記があります。構内社宅では市街地に住んでいる人たちとの交流が盛んだったようで、作品展示会がよく開催されました。何かいいものを出品しようと隣組の婦人たちとの合作で「かたつむりフライ」を出したら見事一位になった喜びなどが書かれています。そこで四人の子どもにも恵まれ、豊かで充実した日々は、母の人生のなかで最も幸せだった頃だと思っています。

楽しかった構内社宅生活も戦争の足音とともに次第に形を変えていきました。県外の人たちの引き揚げが始まり、最後まで残ったのは私たちとお隣の同郷の人だけとなっていきます。社宅内にあった避難壕も危険にさらされ、生活の場が一瞬にして戦場へと変わっていきました。避難命令が出されカリリナス台地に集結するようにとのことで、四歳の私はおばに背負られて逃げて行ったのをかすかに覚えています。

父をはじめ、南洋興発会社の従業員は軍属として現地召集されて

いました。植木医院に看護婦として勤めていたおばが戦争で解散になったのをきっかけに、私たち家族と最後まで一緒に逃げまわることになりました。母にとつてはありがたいことだったようです。

カロリナス台地にある大きな洞窟には三〇人ほどが避難してましたが、入り口付近は排泄物でウジがわいていたといいます。河川がないため天水や地下水からの夜間に水くみに行くのは、九歳になった兄や男たちの仕事だったようです。アメリカ軍は十二時と午後の休みには、軍艦からジャズが流れていたと母が覚えていました。

現地召集された人たちは、一度だけ家族に会いに行くことが許されたようで、カロリナスの避難壕に父が訪ねてきたとき、兄には「妹たちの面倒をよく見なさいね」と言葉をかけたようです。姉は「父ちゃん出て行かないで、どこへも行かないで」と泣いて父のズボンの裾を引っ張って引き留めたと語っていました。父は自動車部の人たちと部隊へと戻って行ったようです。そのときの父の年齢は二八歳でした。

昭和十九年七月、米軍の猛攻撃を受け、その辺りは一木一草もない真っ白に荒廃した世界に変わりました。私たち家族も壕のなかの人たちも無事でした。カロリナス台地下の南東端は断崖絶壁になっていて、追い詰められて崖から身を投じて命を落として人も多かったです。私たちの壕内では「集団自決」（強制死）はなかったと聞いています。米軍の呼びかけに壕に隠れた人たちは、一人ひとり投降して出ていきました。沖縄県出身者戦没者数はサイパン島で約六〇〇〇人、テニアン島で約三五〇〇人で、抑留邦人の七割が沖縄

出身だったようです。

昭和二〇年、テニアン・チューロキャン（収容所）の軍病院の看護婦助手をしていた母は、負傷者の治療に何度も卒倒したようですが、引き揚げ時に、同僚だった米国人から貰ったミシンを持ち帰ってその後の生活に役立てています。

昭和二十一年一月に沖縄への集中的な引き揚げが開始されました。家族ごとにLST（戦車揚陸船）に乗る順番は決まっていますが、乗船予定日に母がひどい腹痛で歩けなくなり、キャンセルになりました。それで私たちは六月に最後の引き揚げ者となりました。広い艦内の真ん中にドラム缶に入った水があるだけで、その周囲には船酔いの人たちがゴロゴロと寝転がっていました。トイレといえば、艦外にある手すりに捕まりずっと下にある海面を見ながらウンチをする状況で、手を放すと海に落ちてしまう恐怖がありました。

ふるさと沖縄に下船してインヌミヤードイ（現沖縄市高原）に到着。六日間の検疫期間があつて、私たちは頭から全身DDT（殺虫剤粉末）をかけられたり、予防接種や種痘など強制的に受けさせられました。

引き揚げ者はインヌミヤードイで証明書がないと住民登録ができないので、市町村宛てに「受け入れ依頼書」「引き揚げ証明書」を作成したようです。当時、食糧は無償配布でしたが住民登録をしていないと配布が受けられませんでした。そこで初めて食べた少しのお米とヨモギのたくさん入ったお汁の苦さと強い香りは、いまだに忘れられません。

市町村ごとにトラックに乗せられ、それぞれの故郷に出発しまし

た。母の故郷のある屋慶名では、母の両親や弟妹たちはみな健在でした。祖父母は初めて会う南洋の孫たちの色が真っ黒いのには驚いている様子でした。わたしのいとこは「ヤナ、イルクルーグアー」と言い、方言が分からないことも「いじめ」の対象になりました。引き揚げ者は沖繩を見捨てて外地に行ったということで、世間から嫌われていたし、母子家庭だったこともあって信用されませんでした。生活のために米軍施設でハウスメイドとして働いていたことが、周囲からさらに冷たい視線を浴びていたようです。

母は私たちがいじめられないように、テナアンから持ってきたミシンで軍の払い下げ品の落下傘やカーキーズボン・毛布などで誰も着ていないオリジナルの洋服やカバンを造り、丁寧に刺繍まで施していました。私はそれが自慢でした。そのミシンを活用して母はアメリカ人の家庭をまわって、立体裁断で洋服を作っていたこともありました。でも生活は苦しかったです。その頃は、世間に貧富の差が何故あるのかを真剣に考えていたりしました。

父が軍属で現地召集されていたので、戦死者広報名簿に名前が掲載されていました。テナアン島で生まれ現地で戦死した妹の場合は、もちろん引き揚げ者名簿にも名前がないので、混乱した当時の村政では仮戸籍を作るにも現地での死亡者はあえて登録しなくてもよいとの村役場の指示があったようです。

私の転校手続きで戸籍謄本をとったときに、妹の名前がないことを初めて知りました。妹の生存していた証を形に残したい思いが強く、母の元気なうちにと家庭裁判所に申し出て、半年かけて妹の戸

籍を作りました。

南洋群島慰霊墓参団としてテナアン島に二度行きました。初回は健在だった母と、二回目は夫と姉姉とで行きました。五歳まで生活していた私の故郷は、あの頃の生い茂る木々も香りもなく、プルシャンブルーの澄んだ海の美しさと肌を刺すような太陽とムツとする湿気だけのひっそりとした平らな島でした。

何よりもショックだったことは、米軍のハゴイ空軍基地で昭和二〇年に原子爆弾積荷場で、秘密裏に組み立てられた原爆をB29戦闘爆撃機に搭載し、広島・長崎に向けて発進したということです。初回に行ったときはその場所には成長の悪いプルメリアの花が植えられていたのが、二度目に行ったときには、三角屋根のガラス張りの見学施設となっていてアメリカ国家歴史文化財に指定されていました。日本語と英語で表示されています。ハゴイ飛行場はいまだに米空軍の訓練飛行場として使用されています。島の大半は米軍管理下にありながら個人の経済状況は悪く、基地建設に活路を見いだそうと、テナアン市長は普天間移設受け入れを表明しています。

私の生まれ育ったテナアン島も沖繩も、戦後なお米国の手中にあることが許せないし、基地の加重負担で募る不安や怒り、あきらめなどと複雑な心境はいつまで続くのでしょうか。

【二〇一二年七月十二日石川朋子調査】

沖繩県浦添市

とれたところは南洋テニアン

儀間光男

テニアン生まれ

昭和十八年七月二四日

私は昭和十八年に南洋群島のテニアンで生まれました。父の話によると、父は元よりそろばんをよくして、シマで養蚕業の指導員もやったりしていたのですが、那覇に丁稚奉公に出て、商業を勉強にきて、それがきっかけに昭和六年に南洋のテニアンに渡ったそうです。昭和六年の夏といっていました。何月は聞いていませんが、五、六月じゃなかったのかなと思います。

父は儀間光八といっています。明治四〇年四月十日の生まれで、伊是名の整理客出身です。父のきょうだいは男が三人、女が二人で、父は一番末っ子の五番目、三男坊です。母も同じ伊是名出身で明治四二年の生まれです。父は左肩の腱を切っていて、左肩が少し不自由だったものですから兵隊へ行っていないくて、もっぱら商売で生計を立てていました。伊是名貧乏ということ、学校も出ないで商売でそろばんを身につけていましたから、それで南洋で商売しないかっということで誘われて、じゃあ行ってみようといつて、妻子は残したまま単身で南洋行きました。その暮れには妻子を呼び寄せしています。

子どもは昭和五年に長女が伊是名島で生まれて、南洋で昭和七年

に二女、昭和十年、十一年と連続して女の子が生まれて、十三年に長男が、十六年に女の子、十八年が私で二男です。戦後引き揚げて、沖縄で昭和二一年に三男が生まれました。二四年に四男坊、二六年に末っ子の女の子が生まれています。二八年生まれの子もいましたが、はしかですぐ亡くなりましたので、十一人きょうだいで今九人残っています。

七年生まれの姉のキミコは南洋で国民学校を出ています。テニアン国民学校ですね。その下のヨネコも学校を少し出ていましたが、避難の途中で壕に避難している所に艦砲の破片が入り込んで、両足切断で出血多量で亡くなりました。十六年生まれの姉も避難した壕の中で、艦砲の破片受けて亡くなりました。ですから私はしょっちゅう南洋へ行くのです。引き揚げるときは、両親と昭和七年、十一年生まれの姉二人、そして十三年生まれの兄と私でした。

父はテニアンに渡って最初に、商売屋の才覚で儀間商会という食料雑貨店をすぐオープンしました。極めて順調で、二年後ぐらいには生命会社の南洋代理店をするようになりました。自宅、住宅、雑貨店、事務所とありました。番地は南洋群島テニアン町二〇番地という所で、俗にいうソンソンですね。今は公園になっていますが、父のかつお節倉庫が残っています。店はその向かいにありました。屋敷は二五〇坪ありました。地の利を得ていたと思います。

食料雑貨は沖縄の那覇から運んでいました。かつお節をはじめ、沖縄の人たちが必要なものの全部輸入していました。万単位の人口ですから需要があつたのでしょう。お店では奥武島の人を三、四人雇っ

ていました。船乗りのウミンチュを含めると二〇人ぐらい雇っていたと思います。日用雑貨と、船から上がる魚がありましたから、魚店も経営拡大していきました。

生命会社の南洋代理店を兼ねているときは、まだ子どもは女の子二人でした。そのあいだ、事業が拡大されてマダロ、カツオ船、戦争直前までに船を六隻持っていました。みんな軍用船に徴用されて一隻も残りませんでした。父に「ウミンチュでもないのに、なんでウミンチュやったのか」と聞きましたら、南洋にウミンチュが来て、船を持って儲けて沖縄へ引き揚げるけれど、引きとり手がないというので「うちの船を引き取ってくれんか」っていう話になって、みんな父に預けていったそうなんです。そして父はその船で漁船団を作り、カツオ漁船六隻の船主になったのだそうです。船乗りには伊是名・慶良間・具志川など、沖縄県各地から、南洋にウミンチュとして来た人たちを集めて乗せていました。そのうちに父は南洋の漁業組合連合会の会長になり、市場建設など携わっていきました。戦争に追われて市場も徴収されると、漁業組合の事務所を自宅の二階に移して業務処理、残務処理をしたそうです。

同じ郷里の人とのつながりは、伊是名、伊平屋の出身が集まることとがあり、みなさんうちを中継して集まっていたそうです。その頃の父は、当時の三〇〇円ぐらいの給料をとっていたそうです。マチャー収入、生命保険、それから船会社。当時の校長が七〇円程度の給料だった頃に、父は三〇〇円ぐらいの給料でなかなか儲かっているから、伊是名、伊平屋の関係者の多くはうちで寝泊まりしたりし

たそうです。

昭和八年か九年に父方の祖父が、父の兄の子でいこのトモ姉さんを連れて南洋へ来ていたそうです。祖父が伊是名に帰るとき、長女のヤス姉さんに「おじいちゃんとシマ（伊是名）へ行こう」っていったらすぐOKしたそうで、トモ姉さんは南洋において、ヤス姉さんを伊是名に連れて帰って行きました。いとこのトモ姉さんは私たちとともに終戦はテニアンで迎えました。後から、父を頼ってトモ姉さんのきょうだいの清輝も来ていました。最初はテニアンで床屋をして、サイパンのガラパンに移って床屋していたのですが、戦火に巻き込まれて亡くなりました。

南洋では豊かな暮らしでしたから、両親とも南洋がよかったといっています。セレブですからね。でも母も働きづめでした。相当苦勞したなと思うのですが、母は強い人ですからあまり口には出なかったです。どんな苦勞したからだった、こうだったというのはあまりいわずにね。雑貨店に刺身店、魚屋やらで働きづめですよ。でも、戦争が迫るなか、南洋興発の専習学校へ無料で魚を差し入れしていたそうです。戦後、当時学生だった伊礼先生が、いつも私にお礼をいっていたんです。「戦争が始まったら寮に魚が入らなくて、儀間商会、あなたの母が魚を差し入れてくれた」と、その思い出をよく話してくれました。母からは聞いたことはありませんでした。

現地のチャム口人の話はよく出ました。非常に優しい人々だったといっていました。ただ抑圧されて、ウチナンチュも抑圧は少しあったけど、さらに抑圧されていたけれど人間は非常に素直でいい

人たちだったと。うちにも何人かお酒をもらいに来たり、食べ物を所望して来たりしていたようで、危なかったけど隠して持たしたりしていたそうです。

私のちょうど満一歳の誕生日に米軍が上陸しています。今まで聞いた話によると、米軍は昭和十九年七月二四日、テニアンにはサイパンから上陸しました。姉二人は避難した壕で亡くなりました。入口で着弾し爆発して、真つ赤な破片が壕の中に入ってきたそうです。私たちは前にいたのですが、奥にいた姉二人がそれで亡くなりました。この壕には他の方たちも大勢いて、姉たちの他に二人亡くなったそうです。それから家族みんな、他の方たちと一緒に逃げ回るわけです。逃げまわるなかで、もう水も食糧もなく、私なんて満一歳で水を欲しがると水もないから、雨が降ると牛や馬の爪痕に水溜まりますよね、その水を飲まされているんですね。それで脱水症状起こし、見込ないっていつて、逃げまわる途中で道の側に私をおいたそうです。もう救えないと。しかし、置いたけれど、母は私を取りに戻って、その過程で父のグループと母と私の二人はばらばらになりました。父は母が私を抱き取りに戻ったことを知らなくて、振り向いたら母がいらないものですから「ああ、死んだんだなー」としか思わなかったそうです。

私と母は早い時期に捕虜になっていたと思います。私たちは壕にいたのですが、出てこいって呼びかけられて、母が私を抱いて最初に出たそうです。母は恐怖心はあったけれど、ここで死ぬのも外へ行って死ぬのも一緒だと。どうせ夫も他の子ももういないだろうと

頭にあったそうです。狭い穴のなかで死ぬよりは、青空見て死んだほうがいいって。思い切って出て後、残っている人たちみんな出てきて収容されたそうです。私と母が収容所へは先に入って、二週間後に父たちがトラックで運ばれてきたそうです。父たちはカロリーナス台地まで逃げていたそうです。

収容所の話を聞くと、私たちは収容所には長くはいなかったそうです。どうしてかという、みんなを沖縄へ帰すための色んな手続きの手伝いを父がしていたそうで、キャンプを出て一戸建ての家に移動して、そこで特に伊是名、伊平屋へ帰る人たちの手続きをしていたようです。私はキャンプでの話はそんなに知りませんが、母の話によると、私は着の身着のまま裸ですから、米兵がシャツをくれたり、どこからか着物を持ってきて着せられて、私をかわいがっていたそうです。食事なんかも、そんなにひもじい思いをしたということはなかったと思います。引き揚げの手続きをするときの給料みたいなものはなかったそうです。

引き揚げは一番最後になりました。昭和二十二年四月、一番最後の引き揚げです。父は南洋に残る運動を米軍にやったそうです。何とかここで立て直したいという思いがあったようです。テニアンに残りたい、残してくれと。でも聞き入れられなくて、証書類、預金通帳、保険証書も含めて取り上げられて家族の写真も全部、革のカバンも全部とられ、強制送還されました。

インヌミヤードウイに来てからの記憶が少しあります。インヌミヤードウイには十日ぐらいいたと聞いています。それから伊是名の

浜に着くと、私は真つ先に飛び降りて走り回ったのを覚えています。私たち一家は、本家の屋敷内の馬車小屋で、地べたに板を置いてそこにむしろを引いて、そこで一年近く寝泊まりしていました。その間に祖父から屋敷を与えられて、家造っています。



2009年のテニアン墓参のときにあいさつをする儀間光男さん [2009年撮影]

父は裸一貫で出て行って、あれだけの財産を築いたのですが、裸一貫でまた帰ってきたんです。ただ救われたのは、伊是名に送ったお金で祖父が田畑を買っていて、一緒に耕してくれましたから食べるには充分でした。ただお金には困りました。父は帰ってきてから、持ち前のそろばんを使って、勢理客の共同売店を立ち上げ、初代売店主任を務めました。勢理客共同売店です。売店主任を二か年ぐらいして次の人に渡して、その後区長になりました。区長も二、三年やって、次は農協の監査員、幹事になりました。その辺からは少し現金もありましたが、なんせ子たくさんですから大変だったと思います。父は昭和四五年に浦添に移住しました。浦添でもやっぱりマチャグワーっていて、トーカチまでマチャグワーをしました。

私は伊是名には中学校を出るまでいました。高校は中央高校へ行きました。今の球陽高校の所です。那覇の松川に姉たちがいましたので、そこから学校へ通いました。その後、東京農大の農学部農学科に入学しました。海外青年開発隊の農業指導でインドネシアに行きたいと思っていたので、大学に入ると同時にそれに向けて勉強しましたが、病気で断念せざるを得ませんでした。沖縄に戻ってきたのは昭和四三年、そして昭和四六年に浦添へ来ました。

戦後、私が最初に南洋に行ったのは昭和の後半だったと思います。きっかけはやっぱり姉二人を弔いたいということです。現在もずっと続いています。平成五年には両親を連れて南洋へ行きました。母はそれまで南洋には行く気にはならないといっていました。思い出したくない。過酷だったんでしょうね。でも連れて行ったとき、テ

ニアンの空港を降りたらトーチカをした父の足が速くなって、私を置いて行くんですね。そして母は、かつての屋敷跡、今は公園になっていて座つて「帰らない」って言ってます。「この土地は買った覚えはあるけど、売った覚えはないから、光男、お前ここにプレハブ作れ、自分の屋敷だし、もう私は帰らない」と言いましたね。ほぼ屋敷の真ん中と思われる所にどんと座つて「自分の屋敷だ」と。「もう帰らない」と。かすかな抵抗だったと思います。あれは私も印象的でした。まさかそう言うとは思いませんでした。平成五年に南洋へ行ったときは、姉二人も一緒でした。校舎跡へ行ったらかすかに覚えていて、この辺に座っていたとはしゃいでおりましたけど、戦争の恐怖で忘れてしまったといひます。

春、三月頃から私は南洋の風を感じるんです。心をよぎる風です。三月になると「南洋から風が来た」っていつも言うんだけど、南洋行くとまた、サイパンの風とニアンの風、ロタの風、全然違った感じがします。ニアンの風は完全にのれますよ。「よし」って言うって騒ぎ出す。血が騒ぐ。自分にとってのアイデンティティというのはニアンにもあるし、もちろん伊是名にもあると思います。やはりその自己紹介でいうと、とれたところは南洋テナンです。生まれたところじゃなくて、とれたところです。

【二〇二二年十一月二七日石川朋子調査】

沖縄県浦添市

人生の基礎はポナペ・パラオに

松原勝吉

旧平良市生まれ

私の人生の基礎となっているのは、ポナペ、パラオでの体験にあつたと思っています。

私の父は明治四〇年の生まれです。父は同じ久松部落の方がカツオ漁の船を持っている縁で漁業移民としてポナペに行きました。昭和十二年に母と三歳上の姉と私が呼び寄せられ、家族そろつてナツト村での生活が始まりました。母も父と同じ年の生まれです。第二人はポナペで生まれました。妹は戦後宮古で生まれました。

私たちは宮古から船で沖縄本島に渡り、一週間ぐらい那覇に滞在して那覇港から横浜へ行きました。横浜から定期的に南洋に行っている大型旅客船でサイパン、トラックに寄つて約二か月かけてポナペに着きました。私が小学校二年生の一学期、八歳のときです。

ポナペのコロナには、南洋貿易のカツオ船の波止場があつて、カツオ工場もありました。私の住んでいる所からコロナにあるポナペ尋常小学校へは、ポンポン船に乗つて通いました。栈橋で降りて、商店街を通り学校まで歩いて行きました。大通りには食堂、大湾写真館、双葉屋というお店や神社がありました。

小学校から帰るのは二時か三時ぐらいと早かったので、帰りにはいつも本屋に寄っていました。お金がないので本を買うことができ

ませんでしたので、立ち読みをしていました。三年生か四年生のとき、いつもの様に立ち読みをして時間が経つのを忘れてしまい、船に乗り遅れて帰るに帰れなくなりました。そのときは桟橋の倉庫で麻袋をかぶって寝て、朝食を食べないでそこから学校へ行きました。

ポナペの学校には日本各地から先生が来ていました。学校では国語、算数の他に習字や絵なども学びました。習字の発表会もありました。運動場には鉄棒などもあり設備も充実していました。音楽の授業では、ピアノを開けてピアノの構造なども習いました。校舎は一階建てで、学年一クラス三〇人ぐらいでした。

私の友だちに、東京出身の校長先生の子どもがいて、夏休みはその子の家で二週間ぐらい泊まって過ごしました。好きな本を読んで、宿題も一緒にやって、食事をごちそうになりましたね。夏休みには、山や川で学校の先生と先輩や後輩などを含めて約二〇人ぐらいでキャンプをしました。一週間から十日間野宿をし、三角山とアサマ橋を挟んである大きな川に行つて、魚を釣ったりエビを捕ったりしました。自然との触れ合いは今でも忘れられません。

小学校の六年間というのは色々なものに興味があつて吸収していききました。小学生のときに勉強でポナペ支庁から表彰されたこともあります。

私はパラオ中学に進学しました。昭和十六年、十三歳のときでした。ポナペから三人受験して、みんな合格して一期生となりました。パラオ中学ができるということで先生から勧められてのことでしたが、進学する気持ちも十分にありました。中学は四年制で一年目は校舎

もちゃんとできていなくて、しばらくパラオ小学校の仮校舎で学んだのち、本校舎と寮が南洋神社の近くにできました。中学校はクラス五〇人で、サイパンやテニアン、パラオからも進学していました。国語・数学・理科・歴史・音楽・体育などの教科があり、落ち着いた環境で授業を受けることができました。朝の起床は六時頃で、朝食を食べて学校へ行きました。寮は三人部屋で八畳くらいの広さでした。一人ずつ机と布団があつて、同級生、一期下の後輩と同じ部屋でした。掃除は当番制で、食堂で配ぜんや洗いのなどもしていました。寮の部屋替えはほとんどありませんでした。電気ではなくランプでした。

戦争が激しくなってきた頃には、校庭が缶詰や米など保存がきくものの食糧置き場になりました。二年生になると、勤労奉仕作業もあつて飛行場建設に駆り出されました。昭和十九年には戦争が悪化してサイパン、テニアンが攻撃され玉碎し、パラオも空襲を受けたので授業もできなくなり、引き揚げる者は準備しなさいということになり、昭和十八年に引き揚げてきました。

戦後一九八五年に、「沖縄ポナペ会」を発足することになりました。私も会長を何年か務めました。ポナペに育った私たちにとつて、自然豊かなポナペへの郷愁の念は絶えません。終戦五〇年の節目には、その会も十周年を迎えましたので記念誌を刊行しました。数度にわたりポナペに行くこともできました。現地の方との交流は続いています。また、ポナペ・パラオ帰りの方との交流も通っています。

【二〇一二年八月二三日 石川朋子 調査】

浦添市立図書館

パラオで開墾しながらの避難生活

仲栄真八重（旧姓タカヤマ）

本部町生まれ

昭和七年八月五日

私は本部村出身です。パラオから引き揚げて、名護で学校を卒業した後、那覇に十五年住んで、復帰前に浦添に移ってきました。パラオからの引き揚げですが、その前にラサ島にもいました。父が石を掘っていたと覚えています。炭鉱夫だったのでしょう。

ラサ島にいたのは、私が四、五歳の頃です。呼び寄せではなく、家族一緒に両親と私と弟で、妹はラサで生まれました。ラサ島から一、二年ぐらいで、伊豆味に引き揚げました。ところがしばらくして、父と母がまたラサ島に行くことになりました。

岡山に紡績で行っていた父の弟が、「来年からは学校なのに、あんな島グアーに連れて行くねー、僕がこっちで学校歩かす」と私を引き取りました。しかし、おじは未婚でまだ一八、九歳ぐらいでしたから、私を学校に通わすことができず、今度は大阪の親戚のところへ

連れて行かれました。

結局最後は、沖繩に帰る人がいたので「一緒に連れて行つてちょうだい」と、その人に預けられて沖繩に帰されました。こうして沖繩に帰ってきたのですが、大阪から沖繩に戻ってきたときには一、年生の半ばで二学期か三学期ぐらいでした。伊豆見で学校に通うことになったのですが、方言が全然分からなくて、ヤマトグチばかり使っていました。岡山、大阪では学校に行っていないから、みんなが手を上げたら私も手を上げて、手を下ろしたら下ろして。いつも当てられるけれど分からないですよ。どうしてみんな手を上げるのかなと思つて一緒に手を上げていましたね。

パラオへは父が先に行つていて、母と私と妹と弟は昭和十六年にパラオのコロールへ行きました。父の呼び寄せです。パラオで暮したのは四年間でした。私が行くときには戦争が始まっていたので、祖父は沖繩に残すといっていたのですが、どうしても母と一緒に連れていくと頑張りました。パラオへ行く船は木造で、沖繩の人が多かったですね。海が荒れたら大変でしたよ。あっちにコロコロ、こっちにコロコロして、何か月かかりましたかね。

私たちは台風が来るからといって、横浜に船が入りました。そうしたら二、三日もいますよね。みんなが船から下りて見学しに行くというので、子どもは私だけでしたが、「船にいるのが嫌だから私も行く」と言つてついて行きました。皇居にも行きました。玉砂利でしたけどそこにひざまずいて、「拝みなさい」と言われて、みんなひざまずいて拝みました。二重橋のところでした。あっちこっち行つ

て食事して、それから船に戻りました。パラオでは船も横づけできませんでしたからポンポン船が迎えに来て「はい」って、人と荷物という感じで渡されて行きました。

私の父はパラオでトゥンドウ（波止場の荷役）の仕事をしていました。港湾荷役の人たちはあちこちから来ていました。コロールの四丁目の本願寺通りに一年いましたよ。トタン屋根の一軒屋で隣があつて二所帯でした。隣はヤマトンチュでしたが、どこからの人かは分かりません。その頃食事は三食お米で、ごはん味噌汁がありました。芋は配給でしたね。その後アイブクロの学校の裏に移りましたが、農業をするといつてアルミズに移って、人の土地を借りて農業をしていました。

私は小学校三年のときにパラオへ行きましたので、二年生までは



小学校4・5年のクラスメートたちと
〔仲栄真八重氏提供〕

沖縄の学校に通っていますが、伊豆味の学校の様子とパラオの学校は全然違いました。パラオは文化的だと思いました。あの頃沖縄まだ裸足でしたから。私は低学年だからそのまま三年に入れました。校舎も全然違いました。クラスは五、六〇人はいたと思います。朝鮮の人も四、五人いました。

朝鮮の子どもたちは、四、五人で固まって、沖縄の人や内地の人たちとは遊びもしませんでしたので、朝鮮の人だなんていうのはすぐ分かりました。顔を見ても分かりましたね。色白で、ディキヤー（優秀）でした。

五年生の頃でしたか、学校の近くに住んでいた現地の人たちの部落で写真を写したことがあります。向こうの人はおもしろいですよ。「あんたいくつなるの」と聞いたら、「あの椰子の木と同じ」って。それで「椰子の木はいくつなるの」って聞いたら「僕と同じ」って。生まれたときに椰子の木を植えるからだそうです。

パラオの小学校では先生たちは何かといったら、真っ白の上下の制服を着ていましたね。先生方は普段は半ズボンでしたが、その時は長ズボンでした。女生徒はセーラー服を着ていました。北島角子さんも同級生です。福島の人もとくさんいました。

私たちはまだ子どもでしたけどオリオールには、避難しながら開墾しに行きました。マニラ麻が植えられていましたが、みんな伐採して畑を作って芋を植えました。兵隊の食糧だということでした。

赤い旗が出たら学校は休み、白い旗だったら学校に来るように。それを見にわざわざまた支度をして南洋神社の広場へ行つて、赤だっ

たら帰るわけですよ、白だと学校へ行きました。第二校では四、五年からは山学校でしたね。

校舎は兵隊が入ってきていました。この頃私たち低学年は教室で薬きょうなどの弾磨きをさせられました。

私はパラオでは四回引っ越しをしました。四丁目からアルミズ、学校の後ろのアイブクロ、またアルミズに移動しました。父はアイブクロにいたときまでは荷揚げの仕事やっていましたが、アルミズに行ったときからは現地の人の土地を借りて農業をして野菜を作っていました。塩ちようだいとかマツチちようだいとかいって、地主さんが来ていましたね。

空襲が激しくなってきたので、避難しながらみんなオギワルに行きなさいということになって、開墾しながらオギワルに移動させられました。そうすると、その頃からは学校なんて全然行かず家の手伝いで子守りをしていました。

数えて十三歳からは大人の仲間だからと、十三歳以上はヤマトンチュの家に十三歳以上の子どもたちは集められて農業をしました。食糧増産ですね。指導員がいて、班長とかつていました。

畑では茄子などの野菜と芋を作っていました。結構広い畑で二、三〇人ぐらい一緒にいたと思います。寮みたいで自分たちでご飯も作りました。

飛行機の音が聞こえたら、みんな逃げました。見つけると爆弾を落としていくのです。みんなと畑にいるときに、私は山のちよつと高い所で妹の面倒をみながら監視の役目をさせられました。音が聞

こえたら「東の方向爆音、退避」と大きい声を出すわけですよ。そして大丈夫になると「爆音なし、作業開始」とまた言うのです。山の中の合間に畑があつて、東も西もどこか分からないのに「東の方向爆音」、「西の方向爆音、退避」と大きな声を出していました。今よく考えてみると、人の命を預かるこんな仕事をよくやっていたと思うね。考えたらおかしいね。馬鹿だったと思います。

戦争が終わって沖縄に引き揚げて一番びつくりしたのは、裸足で歩いてしたこと。そして子どもが方言を使っていることが珍しくて、母に「お母さん。子どもが方言を使っている」と言いました。それから、私が一番びつくりしたのは、ソテツを食べさせられたときです。もう見たとたんに震えましたね。南洋での話は何日かかっても終わらないですね。

戦後沖縄に帰って、伊豆味小学校の八年生になりました。学校で「待ちに待った乗船の日」という作文を書いたら、先生にほめられて、クラスみんなの前で読みました。パラオの同級生は二〇人ぐらい一緒に帰って来ることができましたので、今でも集まって昔話をしています。

【二〇一一年九月九日 石川朋子調査】

浦添市立図書館

食べるものが何もなかったパラオでの戦争体験

銘苅光子

旧佐敷村生まれ

昭和十一年十月二三日

私の父は、戦前南洋ペリリューへ渡り、海軍の飛工場を作っていたということでした。母の兄にあたる方も南洋へ行っていました。二年後に母と私、二女と三人、呼び寄せで南洋へ行きました。何月だったかはちょっと覚えていません。とっても暑いときでした。長くいたわけではありませんが、物心がついた五歳ぐらいのときには南洋に來ています。終戦後、十一歳のときに帰ってきたので南洋にいたのは六年ぐらいです。三女、四女の妹は南洋生まれです。

向こうへ行ったら、もう、すごい。何ていうか、全然生活が違ったというか。環境が違ったんです。鮮明に覚えているんですよ。戦前の沖繩のことは全然わからないです。父が沖繩に戻ってくるつもりだったのかはわかりません。ただ、とにかくすごい所でしたよ、本当に。もうびっくりするくらい。その後、コロール島へ行きました。父はずっと大工をしていました。私たちは浜の近くに住んでいて、母が畑をしてました。母は一時期ですがパイン缶詰工場働いていたことがあります。

母が野菜なんかを頭に乘せてコロールの街に行くとき、私もよくついて行きました。そこには兵隊さんがいて、色々とかわいがって

くれました。「何か歌を歌って」と言つて。歌つたらアイスクャンデーとかをくれるので、いつもそれを目当てに街について行つたんです。パラオでは一番の街だったと思います。

山の麓には海軍の墓地があつて、丸太を組んで毎日煙り出している様子を見たことがあります。そのすぐ下は海で、広々してよく遊んでました。パパヤーも落ちるくらいいっぱいあつてね。果物も近くに色んなものがいっぱいあつて。一時期は最高にいい所でした。しばらくはよかつたんです、本当に。楽しくてね。

戦争が始まる前、母の兄がいるガラスマオという所に母ときようだいたちで行き、しばらくそこで避難していました。

戦争が始まると父は兵隊にとられ、私たちは日本人が開拓した朝日村という所に避難しました。そこはジャングルの近くで空も見えない、日が全然差さない暗い所でした。朝日村には他にも避難している人たちがいて、壁のない長屋で一緒に過ごしていました。避難生活では食べるものがなくて大変でした。ひもじくてひもじくて、みんなわんわん泣くし、病氣はするし。みんなもう倒れて、もうほとんど飢えて亡くなりました。食べるものがないから、リンドウジュの苗とか、そこら辺のゼンマイとかとって食べる。とにかく何でも。向こうはアフリカマイマイがいっぱいいんですが、あとはとり尽くして何もいませんでしたよ。もう何でも手当たり次第。バナナの芯だとか、何でも食べましたね、ほんとに。草でも何でも。みんな栄養失調で。母は脚氣にかかつて歩けなくなるぐらいでした。水も、そこら辺でちよろちよろつてしているのを溜めて使うぐらいの状態

でしたから。火も起こすのも大変でした。あるとき、火種が切れたのでマチグワー（商店）をしていた父の親戚の所に山一つ越えて火種をもらいに行ったのですが、その帰りに缶詰工場の近くで機銃にあつたことがありました。

終戦になって、私たちはみんな泣いて喜びました。これでもう銀飯が食べられるって。これまでは「我慢せえ我慢せえ」の教育ですからね。戦後の食糧調達は自分たちで行ってましたが、日本兵が引き揚げた後に軍の倉庫に豆や金平糖が残っていて、それをみんなで食べました。

昭和二十一年の一月、パラオから米軍の船に乗って五日かけて沖縄に帰ってきました。船の名前は覚えていません。引き揚げ船の中では、私はよく甲板に降りて歌を歌ったりしてました。アメリカ兵からお菓子を貰って喜んだりしていました。南洋から帰ってきたのは手荷物くらいです。うちの母が「一月の沖縄は寒いだろう」って、日本軍の倉庫にあった毛布をオーバーコートに縫い直したものを着ました。靴まで作っていましたよ。私たちの家族は六人全員無事に沖縄に戻ってくることができました。

引き揚げ後は一時期、父方の親戚がいる知念の志喜屋に行き、その後ウフグスクに行きました。その後佐敷に戻り、父が海から拾ってきた材木で家造ってそこに住みました。沖縄に戻ってからも食べ物がないで大変でした。あるとき、葉が茂っている所に行ったら、服をつけたままの兵隊の骨があつたということもあります。私が六年生ぐらいの頃までは畑のあぜ道みたいところに兵隊の屍があり

ました。

佐敷中学校を卒業後、すぐに那覇市与儀の洋裁店に住み込みして四年間働きました。そして一九五九年に結婚し、夫の実家のある浦添市に引っ越してきました。結婚後も自宅で約六〇年近く洋裁店を経営し、子どもを育てながら泊通信高校に通いました。四年間日曜日だけ学校に通い、一期生として卒業、今は孫たちと一緒に生活しています。今が一番幸せです。平和はずっと続いて欲しいと思います。

【二〇〇九年九月二十四日 崎浜靖調査】

沖縄県浦添市

パラオでの体験を残していく

翁長盛夫

昭和十二年

私は昭和十二年に宮城出身の父盛徳と、城間出身の母静江の長男として生まれました。家の屋号はイーメーヌクワン（上ノ前の小湾）といえます。パラオへは両親・姉・妹・弟・そして私の家族六人で行きました。私が四歳のときです。妹は末子、一番下の弟が秀男といいました。私のきょうだいは全部で七人いますが、四人は沖縄に残っていました。父が先に行つての呼び寄せだったのかは、よく分

かりません。姉の良子は後から来ました。多分十七、八歳だったと思います。

父はパラオのガラスマオという所で農業を営んでいました。そこは沖繩の人が割と多く、特にヤンバルの人たちが多くいました。ヤマシロさんという方がポンポン船を持っていて、コロールとパラオとの遊覧船というのでしょうか、買い物にはこのポンポン船に乗ってコロールへ行きました。シモニシさんという炭焼きをしている方もいました。コロールには神社があつて、前に大きな道路があつて、そして憲兵がいました。父は芋と野菜を作っていて、沖繩の県人会の副会長も務めて、私が全然知らない人との交流もたくさんありました。南洋は季節がありませんから、ずっとふんどし一本で暮らしました。あちらに父方の親戚はいませんでした、母方の城間の親戚がいました。

私が国民学校に通う頃には戦争が始まり、もう勉強をすることはありませんでした。戦争が激しくなると、両親は軍作業へ行き、そのあいだ私は家で子守りをしていました。学校に集まったら空襲の避難訓練、それから防空壕の中で飛行機をヒカウキと習いました。そんなことしか覚えていません。姉は軍の中で電話の交換手をしていました。あの時代は大変な時期ですが、貴重な体験だったと思います。その頃父は沖繩の親戚と連絡をとりあっていたようで、沖繩も戦争になったということ、こっちはこっちで激しい戦争だということを知っていました。

沖繩戦は大変でしたが、パラオの戦争は食べるものはあったと思

います。果物や色々な木の実を食べて、川に行ったらエビがいたのですくって食べました。あるとき、父は班のために食糧を調達に行くくと、戦闘機の爆撃に遭い、機銃が指をかすめて破傷風になりました。定期的にくる発作に苦しみ、痛みがずっとくるようで座っているときにもロープを捕まえての生活をしていました。

引き揚げるときは、まとめて軍のLSTで帰ってきました。甲板の上では映画も観ていましたし、野球もしました。こんな大きな国とよく戦争をしたものだと思います。

帰ってきたのは昭和二年の正月です。終戦して一年は向こうにいて、インヌミヤードウイに帰ってきました。向こうで亡くなつて、弟の位牌を私が持ち、妹は父親が手を引いて上陸した覚えがあります。そのときに仮棧橋でDDTを撒かれました。着るものがなく、肌も全部びわれするほどの寒さで、アメリカの毛布でオーバーを作つて着ました。シラミがたくさん入っていましたので、大きなドラム缶にお湯を沸かして浸けたりしました。インヌミヤードウイは一週間で出たでしょうか、トラックに乗せられた私たちは、仲間のテントヤーに入りました。

父が元気だった頃に話ができたらよかったと思います。父は班長でしたから、何人くらいいたよ、誰々がいたよということもお話してきましたと思います。もったいないですね。父は八九歳で亡くなりました。あれから十年余りますから、生きていたなら一〇〇歳ですね。帰ってきてからすぐ第一回の区長になりました。第一回の老人会長も務めていました。母の静江は七七歳で亡くなりました。

沖縄に帰ってきてからは、パラオにいたときの人たちとの交流はほとんどありませんでしたが、時々友達が父を訪ねて来て、懐かしい話をしていました。

私はアメリカンエンジニアコーポレーションで機械の溶接の仕事をしていました。大きなエアコンを撤去したり基地の中の仕事が主でした。浦添の城間キンザーの仕事が多かったです。定年退職の前ですから十年ほど前でしょうか、鳥島にも派遣されて行きました。そこは激戦地で、映画にもありましたね。エンジンを取り換えるということで一か月くらいいました。何百万円かけても行けない所ですから貴重な経験をしました。

パラオへは夢見ていたんですよ。行ってみたくなって。自分の歩いた所を見てみたい、絶対行きたいとずっと夢見ていました。いつか実現したいですね。私が生まれて生活した所ですから。この体験を残さないといけないと、そう思います。

【二〇〇九年九月二四日 崎浜靖 調査】

沖縄県浦添市

ポナペで写真屋を営んだ父

宮城福正

テニアン生まれ

昭和十年十二月十一日

南洋の思い出をこのように話すのは初めてです。父福松は本部伊豆味の出身で、母まつは羽地の出身です。南洋へ行く前は家族で泊に住んでいました。病院で働いていて、医者代理で診療に行くこともあったそうです。「医介輔」で招へいされたこともあったようですが、那覇で南洋と同じように写真屋をしていました。

父と母は渡航する前に結婚して、昭和八年に姉勝子が生まれました。父はテニアンの土地写真屋の方に呼ばれて先に渡航しました。二年ほど経って、姉が二歳の頃、母と姉を呼び寄せたそうです。その頃には父はすでに独立して伊佐写真館を開業していました。

私は昭和十年にテニアンで生まれました。私が四歳の頃ポナペに移りました。マタラニウム村にはひと月くらいいて、父は先にコロニアに移って家を建築していました。しばらくは仲尾松一さんの家族と同じ棟に住んでいました。ポナペではセツ子、ミヨコの妹二人、キヨシ、キヨノブ、キヨマツの弟三人が生まれました。

マタラニウムではよく、かつお船が川を上ってきていました。水路があって波も入ってこないで湖みたいでした。マングローブ林があってガサミもたくさんいました。鯉の「ちんちこ」という部

位をカツオ工場で手に入れて食べました。とてもおいしかったの覚えています。かつお船が来ると、子どもたちはそれを狙って集まっていた。ウミンチュ（漁師）の奥さんたちも陸揚げのときはたらいを持って待っていました。自分たちで食べる分だけのなまり鰹も作っていました。川にはえび、鰻がいました。ポナペの人にとって鰻は神聖なもので、それを食べる習慣はありませんでした。

日本人は港の近くに住んでいて、現地の人は辺鄙で開発されていない所に住んでいました。近所にアナーツさんという方がいて、私たちにとっても親切にしてくれました。病院の庭の掃除や私の家の雑用なども手伝ってくれました。私が兵隊ごっこをすると、鉄砲まで作ってくれました。

コロニアには朝鮮の人も多くいました。朝鮮の人も蔑視、差別扱いをされていました。コロニアには、ポナペの地元の人とはあまり見かけませんでした。けれども、私は地元の人に入って、一緒に食事をしたり、遊んだりしていました。ジョカージに行く手前の坂を降りる前に屋敷があつて、そこでよく遊びました。今は給油所が建っています。プロテスタントの教会で雨宿りをしていたら出られなくなつて行方不明だと大騒ぎになったこともありました。

父の写真館では内地の方も働いていました。写真の修正技師でヒライズミさんという方でした。ポナペでは家でも方言は使うことはありませんでした。

三年生の途中に、戦争が始まり、学校へ行ける状況ではありませんでした。姉は五年生だったと思います。学校では避難訓練が度々

あり、男の下級生を女の上級生が、女の下級生を男の上級生が誘導していました。学校から少し離れたグランドの道路のところに壕が掘られていました。

ジョカージの土木工事の棟梁で、ヤマシロさんという方が、十・十空襲が来ることを前日には知っていたようです。海軍からの情報ということでした。私は朝早く起きて、コロニアまで歩いて学校へ行っていたのですが、山城さんが「明日は学校行くな」と現地の人を使つて私たちの所までカヌーを漕いで来て教えてくれました。ですからその日は学校へは行きませんでした。でも松一兄さんは学校へ行きました。ところが、私たちの方が空襲の被害にあつて、私の家、写真屋は燃えてしまいました。松一兄さんは学校からここが燃えるのを見たそうです。この空襲でコロニアの街、学校、民家など焼けてしまいました。ポナペ支庁はコンクリート造りでしたから残りませんでした。

ナンポウマルには飛行場がありましたので。私たちはテヤンの山へ避難しました。日本軍がコロニアからテアンの山を開発して、戦車道路作つて、マタラニウム直行便のような道路を作っていました。

戦争が始まるということは、大人は知っていたようで防空壕を掘つて、農耕地を借りて芋も植えていました。私たち家族は防空壕を掘る余裕がなくて、空襲が始まると、近くのマンゴーの木の下で家族みんな四・五人一緒に布団をかぶって隠れました。

防空壕ができてそこに避難した三日後に、大きなマンゴーの木が二つに割れて、折れてしまうほどの攻撃がありました。防空壕がで



家族でピクニックしたときの記念撮影 [宮城福正氏 提供]

きあがるのが遅れていたら、大変なことになっていました。

たまには山から降りて畑へ芋をとりに行きました。そこにも防空壕が掘られていました。まだ八歳の私も一人で行くこともありました。空襲が始まると走って行って、防空壕に入りました。食糧はありますから一時的にそこに隠れて生活して、また芋を刈りとって山に行ったりしました。ですから昼間に機銃掃射を受けたこともあります。私は変なイジャグワーでしたから、空中戦を寝ころがって見たこともあります。

戦争が終わる頃には、ほとんど空襲がなかったので家に戻って終戦を迎えました。コロニアの街はほとんど焼け野原で、写真館は跡形もありませんでした。

私たちはとてもついていて、生き延びてこれたと思います。私がテナン島で生まれて、ポナペへ移ったのも、私がよく病気をするので、ユタにみてもらったそうです。そしたら「テナン島には合わないから出て行った方がいい」と言われたからだそうです。ポナペに移ってからみんな健康になるし、商売は繁盛して、本当にその通りでした。これが第一の奇跡で、第二の奇跡は、疎開するつもりで、浮き袋を作って訓練までさせられたのですが、海で死ぬより陸で死んだ方がいいという父親の反対で、疎開船には乗りませんでした。その船はサイパンで攻撃されたそうです。私たちは乗らなかったのも助かりました。しかし引き揚げ後、沖縄で妹が栄養失調で亡くなりました。

終戦時、ポナペに食糧が充分保管されていました。戦争が終わり、

テアンの裾野のタピオカ畑の真ん中辺りにニッパ椰子で校舎のようなものが造られ、引き揚げるまで学校として使っていました。学校のそばには事務所があつたと思います。ひと月か、ふた月ぐらいは通つたと思います。

十二月前にはLSTに乗って出航しました。支庁棧橋の辺りに集まって、LSMで沖まで行つて、停泊しているLSTに乗りました。クリスマスにグアムに寄港したときには、沖に三隻止まっていました。私たちは疎開するつもりでいっぱい冬着を買い込んでいました。畑のど真ん中にドラム缶二つに、ゴザを巻いて押さえて土をかぶせて保管してあつたので、終戦になつて冬着を着ることができました。それから、キャンパスを使って朝鮮の人に靴を作らせていました。母はミシンを持っていたので、家に呼んで作らせたそうです。この靴を履いてLSTに乗りました。鉄板の上に並ばされたとき、鉄板が焼けていてみんな熱いと飛んでいましたが、私の家族は靴を履いていたので、熱くはありませんでした。

ポナペから引き揚げるときは、ナービ（鍋）などは海に捨てましたが、荷物を持てるだけ持つてきました。母は味噌樽を強引に持つて来ました。これは命だからです。通訳を通してアメリカ軍の了解ももらいました。それから買い置きしてあつた日本からのヤミ米も持ちました。LSTではキッチンでご飯を炊いておにぎりを作ってくれました。また、卵缶・ビーフ缶・チーズ缶やコーヒーなどのレーションがありました。チーズなんて誰も食べたことがなかったので、いっぱい残っていました。

ちょうどクリスマスのときに、グアム島に着きました。クリスマスということで、米軍が休みでしたので一泊か二泊したと思います。船は三隻が停泊していたと思います。そして久里浜へ入港しましたが、三日後にウチナンチュの数人が日本脳膜炎にかかりました。ポナペでかかつて、寒い所に来てから発症したそうです。私の母もかかつてしまい、一時期半身がおかしくなっていました。

久里浜からは、静岡へ向かうのと、三重の方に行くグループに分かれました。他にも行先はあつたのかもしれませんが、それは分かりません。行き先は自分たちで選んだものではありませんでした。私たちは三重の加佐登で降りたのですが、寒くて、寮で寝かされるまでは意識がありませんでした。妹はとても元気者でしたからいつも尻を叩かれていました。

今の鈴鹿サーキットの近くでしょうか。そこに海軍か陸軍大きな寮があつてそこに沖縄人は二〇〇〇人ぐらいいたと思います。講堂や大きなプールもありました。その地名はよく覚えていません。その兵舎には沖縄の人ばかりでした。食事はごはん茶碗より、ちよつと大きめのお椀に入れたおかゆと薄い沢庵でした。あまりにも少ないということで、三角おにぎりみたいなものになったりしました。それでもやつぱりヤーサ（空腹）しますから、両親は農家の手伝いをして米や麦をもらつてきました。母は田植えを手伝つて一日米一升をもらいました。父は農家出身じゃありませんから、下手で腰が痛くて休み休みするものですから、そのときは麦一升でした。

加佐登駅に近い所にも寮があつて、訓練所になっていました。次

第一一応自給自足せよという感じになっていました。種芋の配給があつて、中庭の柿の木の実が大きくなるうとする時期まで、芋を植えました。私たちは葉っぱから切つて植えますが、ヤマトウターはタネから植えますから、出てきたカス芋も食べました

一弟のキヨマツが二、三歳、キヨシは六歳ぐらいになっていました。畑に出たら、ちっちゃい子は鳥が襲いました。スーサーよりちよつと大きめの鳥で、チューつと飛んで来てトンで突いて、子どもはワーって泣いていました。田んぼのタニシをとつて食べたり、田んぼの肥やしにと入れられた黄色くなっている大根の葉っぱも拾つて来て、炊いて食べました。この兵舎では配給で足りない分は自分で作つて食べていました。

買い出しにも行きました。たばこの配給があつて、買えるよつていうことで私たちはたばこを吸いませんが、お金を持って朝五時前に出て、四日市まで行つて並んでたばこを一人一個買つて来て、大人にその三倍ぐらいで売りました。母にイチジクだったか、ビワだったか珍しい果物を買つてもらつた思い出があります。一部の人は、仕事がないのでカミカンティーして、地元の人畑のじゃがいもを荒らしに行ったりする人もいたので、夜はゴロゴロゴロつてじゃがいもが転がる音が聞こえたりしました。

あるとき、沖縄県民は泥棒だからつてことで講堂に集められました。監獄に入れるというものですから「物を盗んで監獄に入つて、飯食わされる、これほどありがたいことはないだろう」と言う方がいて、そうだなんて、全員が手挙げたものですから警察の人がひつ

くり返りました。そのとき中心になっていたのが、沖縄県人会長の比嘉さんでした。県人会長は兵舎で二〇〇〇人くらいが集まったところで選ばれました。その比嘉さんが折衝して、一時期子どもたちは近くにあつた小学校へ通いました。三重県の既存の学校で勉強させようということをしたのですが、石が飛んで来たりして、一週間も通いませんでした。母も「沖縄県民非国民や、国籍なしや、殺したつて罪はあらへん」とも言われたそうです。

それでも私たちはいつも奇跡が重なつていたと思います。三重県に行かないで、松一兄さんたちが行つた静岡だったら、栄養失調で誰か死んでいたと思います。静岡は栄養失調でなくなる方が大勢いたそうです。三重は近くに農家が多くて、畑を手伝つたりして食料をもらうこともできました。

そのうち、沖縄への引き揚げが始まりました。私たちは名古屋から出港しました。三重から名古屋まで汽車に乗つて、名古屋からLSTに乗りました。名古屋から出るとき、「赤いりんごの歌」が流れるなか、見送りされた記憶があります。引き揚げた頃には八月になっていたと思います。

久場崎の浮き桟橋に降りた途端、DDTをかけられて、かまぼこ兵舎、コンセントに四、五日ぐらいいたと思います。そしてGMCに乗せられて、本部の渡久地まで行つて羽地まで祖父たちを探しに行きました。羽地に来たときには、ちょうど稲刈りの時期じゃなかったかなと思っています。羽地では小学校四年生でしたが、三重から持ち帰った教科書を先生が、原本にして教科書をガリ版で生徒の分

を作りました。

その後、母の姉の家族が住んでいる同じ羽地村の山田部落へ移りました。羽地ではマリアに二回、山田では赤痢にもかかり大変な思いをしました。そして、那覇に移ることになり、小学校六年生は大道小学校に通いました。当時住んでいた栄町は野っ原で何もなくブルトナーで穴を掘り、そこがチリ捨て場でした。そこには家を造る材木やルーフィングという、屋根を造るための資材などもありましたので、写真屋をするつもりで家を建てました。

高校卒業してすぐの頃は、コザの十字路の黒人街や白人街をまわって写真を撮りました。那覇からバスに乗って行って、お金は前もってもらって、遅い便でまた帰って来て、翌日現像して写真をプリントして届けていました。

父が写真屋を開業していたので、私は写真の勉強をして来いということでヤマトに行きました。六か月ぐらい勉強して、帰って来たら琉球放送でカメラマンを二人採用するということで、試験を受けたら採用されました。試験は天妃小学校で受けました。二人を採用するのにたくさんの方が受験していました。試験は「報道人としての使命」を書け、ということでした。これひとつだけでしたが、報道人としてあるべき姿、良識あることを書いたと思います。書いたら通ってしまいました。サンドイッチシャープの親子ラジオを聞いていたら僕の番号が呼ばれたので、びっくりしました。そういうことで琉球放送のムービーカメラマンとして勤めることになりました。復帰運動の最中、毒ガス撤去の取材で輸送車を追いかけていました。

浦添には、復帰後に移ってきました。

私たちの体験を、発ったときから帰ってくるまでの苦勞をぜひ残してほしいと思います。ただ、共同でテアンの山に作った最終決壊を使用しなかったことは幸いです。

【二〇一一年九月六日石川朋子調査】

【二〇一二年八月二日石川朋子調査】

沖縄県浦添市



上陸の様子 [沖縄市総務課 市史編集担当所蔵]

台湾

TAIWAN

1895（明治28）年、台湾総督府の設置により台湾は日本の植民地となった。台湾には仕事や進学などの理由で、日本本土はもとより沖縄からも多くの人が移り住み、教員や公務員、台湾鉄道の仕事に携わる者もいた。第二次世界大戦では地上戦はなかったものの、都市部では空襲があり、台湾の山中などで疎開生活を送る人たちもいた。

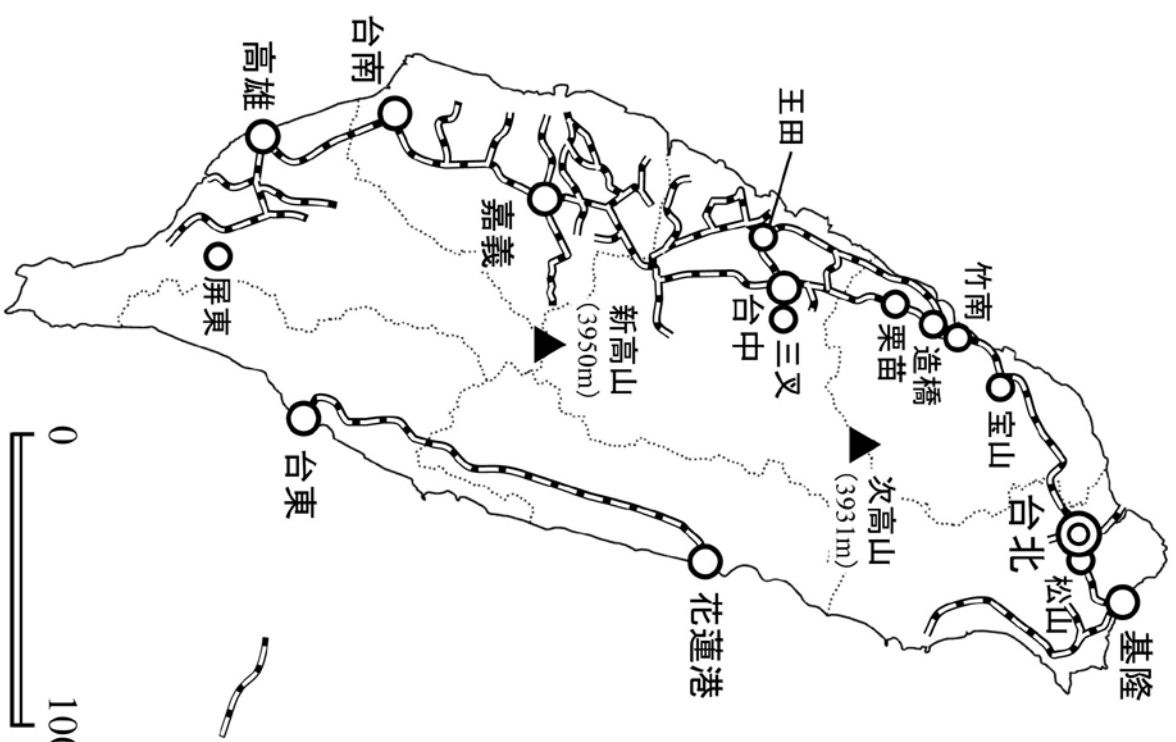
ハワイ・北米

南米

アジア太平洋

国内





鐵道路線(1935年ごろ)

与那国島

西表島

石垣島

宮古島

新京回

南京回

回東京

浦添

台北

台湾

当時の職位は、高等官・判任官・雇員・傭員と四段階あり、私は傭員から始まりました。出世には学歴が影響し、高文という試験制度がありました。私も判任官になるために勉強しましたが、若過ぎで通りませんでした。満十六歳から五年近く台湾鉄道で働きました。見習いのようなことから始まり、最後は採用面接もするようになっていました。職場の上司に那覇出身の登宮城邦弼（べしみやぎくにすけ）さんという判任官だった偉い人がいました。五九歳ぐらいの人でした。この人は吃音がありましたが書道の大家でしたね。この方の子どもさんも書道の大家でした。

台湾鉄道本部には相当な数の職員がいて、毎年、新規採用される人は五〇人程度だったように思います。四月に採用試験があつて、それで合格したなかからまた面接して、ということをやっていました。が、相当な人が受験していましたよ。採用試験は、数学がだいたひ昔の中学三年生レベルぐらいの問題、国語力、それから社会常識の三点を中心にした問題が出ていましたね。

鉄道本部内はほとんど日本人でした。台湾の方は現場が多かったですね。台湾の方でも車掌さんにはなれますよ。しかし、駅長や助役なんかはいませんでした。私が辞めるまでに台湾の方で助役になったのが二人か三人ぐらいいましたね。この方たちは非常に優秀でしたね。

同僚の方で思い出に残っている方がいます。台湾人の方で、私が十七、十八歳頃に入ってきた皆昭永（ソウショウエイ）という当時十五歳ぐらいの子です。その子は非常に真面目で台北から遠い竹南から通ってきていた

んです。あんな遠い所から、朝五時頃に家を出るんでしょうね、七時には出勤していたんです。私は彼と一緒に食事もしたし、きょうだいみたいに話し合つてね。彼も私に懐いてきていました。私は彼に差別的な扱いを一切しなかったです。

私が台湾鉄道を入隊のため辞めて帰るときには「必ず兵隊終わつたら、また台湾に来てください」と言つて泣き別れましたよ。復員してどうしても一回は台湾に行きたかつたけど、仕事や生活もあつてなかなか行けずにいて。その子がどうしているかと思つて、色々聞きまわりましたが、亡くなつたという話を聞きました。今も生きていれば八四、五歳ぐらいにはなりますね。

夜間中学校の同級生にも、徐徳鎮（ジョウトクチン）さんや曾障可（ソウショウカ）さんなど、非常に親しくしていた方が四、五人ほどもいました。彼らもみんな真面目で優秀でした。

私は台湾の方たちとよくしていましたが、他の日本人たちはあまりそうではなかったです。やはり何か差別意識があつたのかもしれない。食事も別でとつていましたし、一緒に飲みに行くこともなかったと思います。給与も台湾の方は日本人の七割でした。国の制度でやむを得ない面もあつたんですが、本当は同じ給料をあげたらいいのにと、いつも思っていました。

昭和十七年十二月、徴兵され海軍入団のために職を辞して帰郷しました。生きて帰れるか分からないから、入団前に島の親に親孝行をしてこようと帰つたのです。

昭和十八年一月十日、佐世保の第二海兵団に入団しました。横須

賀の久里浜に海軍の通信学校があり、四月一日から八月までそこで学び、九月から新しくできた山口の防府の通信学校に転校して十二月には卒業しました。そして、軍艦妙高の通信員として配属されました。妙高は一等巡洋艦、一五〇〇人乗りで戦艦の次に大きな船でした。スピードもありました。私の仕事はレシーバーをつけてあらゆる情報を収集することでした。通信兵は艦橋といって船の高い所に位置し、その上は艦長がいる指令室でした。情報はすぐに艦長に届けました。通信兵は六〇人おり、その中で同年兵は四人いました。三人は戦死し、私だけが生き残りました。トラック諸島・パラオ・スマトラとまわり、シンガポールで終戦を迎えました。ダバオでは米軍の激しい攻撃を何度も受け、軍艦はあちこち破壊されました。よく生きて帰れたなという人もいて、私自身でもそう思います。

ボルネオのブルネイにいたとき、米軍の艦隊がグアムで集結しているという情報が入りました。攻撃するために出撃したのですが、途中でやられてしまいました。軍艦羽黒に牽引されてシンガポールに戻り、仮修理をして日本に戻るとき再度敵の攻撃を受け、シンガポールに戻りました。そして、私はそこで終戦を迎えました。

地下壕の無線で聞いた天皇の声は途切れ途切れで聞きづらかったです。無線の内容を班長に告げると、「正式な命令が出るまでは誰にも言うな」と厳しく指示されました。私は椅子に腰かけたまま、あらゆる思考がぬけ殻となって、ただただ茫然としていました。すると、突然電話が鳴りました。電話をとると、イギリス兵が「ハローハロー」と言ってきました。そして、「ハウメニーメンバーズ？（何人いる

んだ？）と聞かれたので「ファイブメン（男五人）」と答えました。そして「ドンムーブ（そこを動くな）」と言われてね、私たちはシンガポールでイギリス兵の捕虜となったわけです。終戦後、他の地域では相当ひどい目にあったそうですが、私たちはそういう感覚は全然なかったですね。というのは、福留繁海軍中将と英国のマウンテンバッテン中将は、英国の海軍大学校の同期で、その縁で捕虜生活は和気あいあいとした面があったのです。食糧・衣服ともに不自由なく、生活も軍艦妙高の中で過ごせました。捕虜作業には動員されましたが、荷物の運搬ぐらいで、きつい労働を強いられるということもなかったのです。終戦となり、軍艦妙高はイギリス軍の命令によりマラッカ海峡で沈没処理させられました。

私は兵隊二七〇万人ほどを日本に送り返す復員作業に携わりました。マレー半島のバトゥー・パハトに捕虜収容所相当のものがあり、南方方面の日本兵が全て収容されていました。私はそこで、彼らを日本に送り返すという業務をやりました。私自身は全ての復員作業を終了させ、昭和二年十二月に最後の引揚船で横須賀に着きました。

鹿児島では小学校の同級生に厄介になり、奄美に帰る手立てを考えていました。島では戦死したと思われていたので、生存を知るとすぐに帰れと催促されました。私を特別可愛がっていた九三歳になる祖父が、孫の私が帰ってくるまでは死ぬわけにはいかないと待っているというので、帰島を急ぎました。帰島すると今度は、私が結婚するまでは死ぬないというので、祖父の前で三三九度を挙げたら、

本当に二週間ほどして祖父は大往生を遂げました。妻とは親戚同士でした。

奄美でサトウキビ・サツマイモ・野菜を作ったが、二男だったこともあり財産としてもらった畑も広くはなく、家族五人を食べさせていくのはきびしかったです。親に支えられて生活していたようなものだったので、ひと旗あげようと単身で沖縄に渡ることになりました。

那覇の天久、現在の琉球新報の所にあつた松川久仁男さんが経営する松川木工所には、奄美で大工の棟梁だった妻の父が自分の弟子を五人ばかり引き連れて働いていました。あの頃は米軍の廃材で、テーブルなどを作ったりしていました。松川久仁男さんは戦前台湾の商業高等学校で教員をしていた方で、私はその側を通じて通勤していましたから、同僚と剣道をしている松川さんを見知っていました。私も台湾鉄道で剣道の試合に出たことがあり、そのときの審判長が松川さんだったのです。あの松川さんの木工所だったので、びっくりしました。

私は義父を頼って沖縄に来たのですが、大工などしたことがないので、鉋がけをしたら相当怒られてしまい、邪魔になるから別の仕事を探して来い、といわれてしまいました。二か月くらいは木工所で働きました。それで、天願まで仕事探しに行ったら募集があり、天願のアメリカ軍のキャンプに入っているレックス（REX）といってPXの本部のガードマンに採用されました。そこに半年ほど勤務した後、ハーバービューホテルの近くにあつた琉球特別警備隊の訓

練所の第三期生として入所しました。卒業後は大山にあつた陸軍病院のキャンプのガード隊員に就きました。

その頃は大謝名に住んでいましたが、風紀がよくないので大山への移転を考えました。しかし、当時の大山はよそ者を入れない風潮が強かったのです。同じガードマン仲間の大山の人が地元の人を説得してくれ、又吉さんという老婦人二人暮らしの家の半分を借りてくれました。五八号線から海側の家です。家主の又吉さんは豪農でしたが、当時は高齢女性だけだったので手が回らず、田畑は荒れ放題でした。ガードマンは夜の仕事だったので午前中は睡眠をとり、日中の空き時間を利用して頼んで農作業を手伝うようになりました。

農業は奄美で存分やっていたので、三反あまりの荒れていた田畑が瞬く間に立派になり、作物が実るようになりました。大山の人も感心して、「今、部落は衰えているから、よその人も入れよう」ということになり、次第によそ者にも寛大になって借家を許すようになったのです。私も笠利にいた妻子を呼び寄せ、本格的に沖縄での定住生活へ向かいました。

警備隊は泊に本部があり、四八〇人くらいの隊員を中部地区の警備に車で送り迎えていました。そのなかから私を含めた十人がCID、つまり犯罪捜査官に抜擢されました。CIDは瑞慶覧の憲兵隊本部内に置かれていたので、職場はそこに移りました。仕事は軍内で物がなくなったり、米兵が民間で悪さをしたりしたときに捜査をするというものでした。誰々の時計がなくなったといえ、全島の質屋を回って探しました。その品物があると質屋から話を聞いて

報告書を書き、米国人の捜査官が直接捜査をしました。米兵の脱税行為も捜査し、摘発は憲兵隊がしました。

軍に雇用されていた沖縄人の犯罪捜査は、命令されればやりましたが、ほとんどそれはありませんでした。アメリカは米兵の犯罪にとっても厳しかったです。

仕事としては、ガードマンはただ立っているだけだから、楽といえば楽。捜査官は民間に入って色々調べるので、大変といえば大変でした。事件はたくさんあったが、CID内で処理して上にいかないうちに指示していましたね。

そのあいだにガードマンの組織が泊に移動したので、それに伴い私の一家も安謝に引っ越しました。安謝小学校の前で妻がイツセンマチャグワーを開いたが、儲けはありませんでした。

浦添への移住は、生まれ島に帰る同僚のガードマンから、それまで住んでいた勢理客のトタン屋根の家をもらったことに始まります。地主は別だったので、地主にその家を渡すことにして、妻がたまたま見つけた売り家が宮城にあり、昭和五六年そこへ越して来ました。宮城には先に弟が越していたので決定は容易でした。

私は奄美が日本復帰した昭和二八年を境に、本籍を浦添の宮城に移しました。兄・姉・本人に弟という四人のきょうだいのうち、兄は笠利に残り、戦前台湾に住んでいた姉も沖縄に来ました。浦添にいた弟は大阪へ移住し、奈良に定住しています。

私は、昭和四八年から浦添市議会議員を三期務め、議員になった年の六月にはガードマンを辞めました。民生委員の監査委員もやり

ました。

笠利は私にとっては故郷であり、子どもに「自分の祖先を忘れてはいけない。笠利に連れて行って墓参りをさせたい」と思っています。この年になったらいつ死ぬか分からない、あと何年生きるか分かりませんから。自分のルーツを子どもに見せておかないといかんなど思っているんです。

子ども二人は奄美生まれ、三男が大山で、四男が安謝で生まれました。病弱の妻の日常生活の介助もしているので毎日が多忙です。

私の人生九〇年を振り返ってみたら、結局人間真面目にやることが大事ですよ。私は沖縄での生活が長いわけですが、沖縄の方たちのおおらかな助けで、今があると非常に感謝しています。イチヤリバチョウデーという言葉がありますが、非常に人間として大事なことで私はつくづく思います。

親からの厳しいしつけとして「人に絶対迷惑をかけるな」と言われて育ったので、自分のできないことを他人に強要しない、また、みんなと仲よくすることが平和な社会を作ることになるのではないのでしょうか。問題が起きたら、相手の意見も聞いて話し合うことが大事だと思います。

【二〇一二年六月六日大城道子調査】

【二〇一二年六月二〇日野入直美調査】

沖縄県浦添市

同僚の紹介で浦添出身の夫と結婚

比嘉好子（旧姓喜友名）

北谷村生まれ

大正十二年十一月二七日

夫の比嘉正育^{まさいく}は大正八年一月十日、仲間で生まれました。夫は大阪の兵役所から台湾に転属され、台湾に来ていました。私は昭和十五年に台湾に行きましたので、夫はその何年か前には行っていたんでしょね。結婚前のことですからよく分かりません。

私は旧姓を喜友名といいます。戦前はヨシという名前でしたが、戦後に今の名前に変えました。私が生まれたのは、今の北谷町上勢頭です。北谷尋常小学校を卒業後、最初は産婆になろうと思って勉強をしていましたが、あんまりこわくてね。それで辞めて洋裁学校に行き、垣花で洋裁をやっていました。

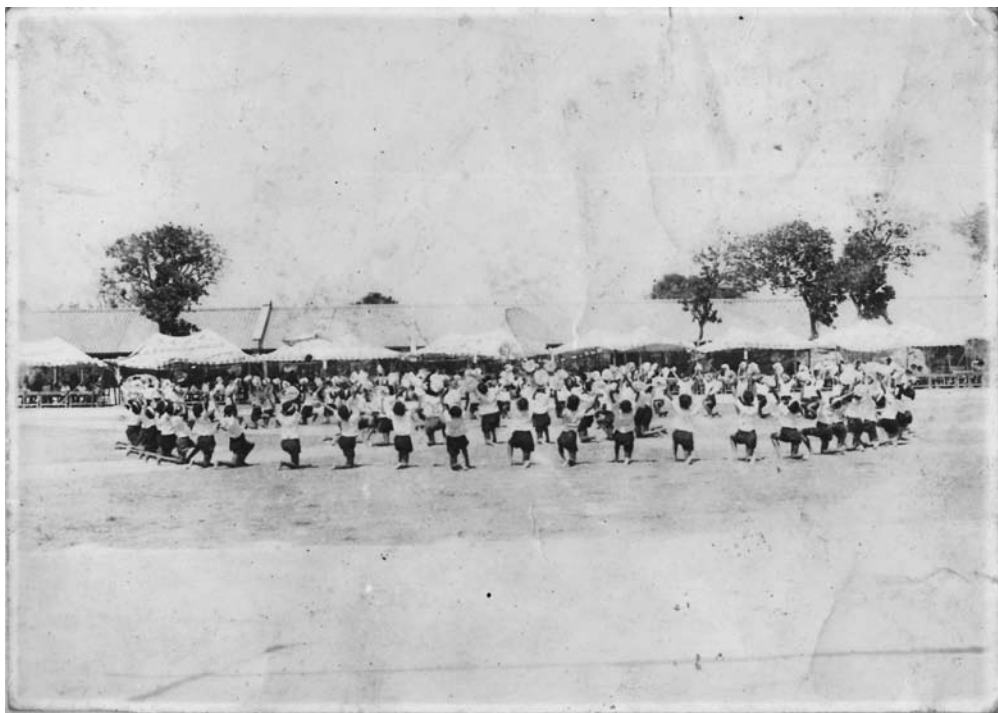
台湾に行ったのは、台湾にいるハルコ姉さんが結婚して二人も娘ができたのに、子どもたちを見せに一度も帰って来ないもんですから、母が私を台湾に行かせて、私が義兄の面倒をみているあいだに、姉たちを面会に帰しなさいっていうことがきっかけでした。姉の結婚相手は伊江島出身の人で、戦後伊江村長を務めた真栄里豊太郎さんです。当時学校の先生をしていました。ハルコ姉さんは台中で小学校の先生をしていた本家のウフチュンナーの喜村のおじさんに誘われて、台湾に行っています。ハルコ姉さんは郵便局に勤めていた

かと思いますが、その辺はちょっと覚えていません。そういうことで、私は台湾に行きました。

台湾では宝山という所にいました。台北よりもっと西に下った所です。そこで姉たちの家で生活し、姉が戻ってきた後もそのまま同居していました。その頃には私も大東国民学校という小学校で先生をしていました。昭和十七年ぐらいから勤めたと思います。私は教員免許を持っていませんでしたが、屏東師範学校で教員免許がとれるようなシステムがあつたんですよ。それで、向こうに入って免許をとりました。屏東師範学校は一年コースと半年コースがありました。私は半年コースでしたが、一年コースは準訓導になりました。免許をもらつてすぐに、大東国民学校に行きました。

受け持ったのは一年生を二回、それから三年生、六年生でした。小学校ですから全教科教えました。でも音楽は全然だめでしたね。生徒は一クラス三五、六人いたかと思っています。みんな台湾の人でした。教室内では、日本語を使うように気を遣っていましたけど、子どもたちは最初は最初から日本語を話していましたので、何も不自由を感じませんでした。教育勅語も先生方がおぼえるだけで、子どもたちに徹底していませんでした。家庭訪問もやりましたよ。向こうの親は、大体商売とかお百姓さんとかが多かったですね。家庭訪問のときは親も日本語で会話をしていました。初めて纏足を見たんですけどね、おばあちゃんが幼女の足をくびつて竹製のベッドにいましたね。

大東国民学校の先生たちは本土出身者もいれば台湾の人もありました。同僚の紹介で夫の正育と結婚しました。結婚したのが満で数え



大東国民学校の運動会 [比嘉好子氏提供]

ると二〇歳ぐらいのときです。早かったですね。結婚式は台湾でやったんですよね。夫に赤紙が来ていたので、急いで結婚しました。

結婚してからは疎開でした。学校も生徒が分散してしまったので、少し田舎にある集会所みたいな所を借りて授業をするようになりました。そのうち、私たちもハルコ姉さんたちと台中の製糖工場の寮に引っ越すことになり、ここで大東国民学校のみなさんと別れ別れになったんです。向こうはそんなにひどい戦争はありませんでした。食べるものもあまり困っていません。ただ、引き揚げるときにお金を持っていけなかったのが、海に捨ててきました。これだけって決まった分しか持っていけなかったんですよ。私たちは兵隊として引き揚げたんですよね。だから、この一メートル四方について自分の持ち物を全部検査されて、初めてお金も捨てました。一応その前にお金は全部先に送っていました。

引き揚げは最初、私たちは夫のきょうだいやお婆のいる大阪に行きました。一年ぐらいいて、それから浦添の仲間に戻ってきました。戻ってきたといっても、向こうで嫁いでいましたから、まわりはみんな知らない人ばかりでしょう、だから沖縄に帰ってきた気分は全然なかったですよ。

沖縄に帰ってからは、子育てをしながら仲間で幼稚園の先生をしました。あの頃は各々の公民館で幼稚園をやっていました。ただ、末っ子が生まれたので辞めました。三年ぐらいはやりましたかね。夫は引き揚げ後、浦添の役所に入りました。沖縄では一番、食べ物に困りました。着物は全部売って、今日の食べ物は何しよかなって、

そんなことを考えてましたよ。

戦後、一回だけ夫と宝山へ行きましたが、観光だったので素通りでしたね。当時の教え子たちは今頃みんないい地位に就いていると思います。戦後教え子や同僚たちとのやりとりはありません。同僚に会いたくないという気持ちは、いまだにありませんけどね。

【二〇二二年六月二〇日野入直美調査】

沖縄県浦添市



仲間の幼稚園で働く比嘉好子さん（後方）[比嘉好子氏提供]

台中工業学校に入学、二年生のときに終戦

金城隆

台湾生まれ

昭和六年十一月二三日

生まれは台湾の苗栗郡三叉^{ビョウリツサンシャ}という所だと思いますね。きょうだいは現在三人、私と弟の俊夫（三男。昭和十一年生）と安男（四男。昭和十六年生）で、兄清光（長男。沖縄で死亡）と妹二人（台湾で死亡）は、小さいときに亡くなっています。

父は金城清善（明治三十六年生）、母は照子（明治四〇年生。昭和十九年台湾で死亡）です。家の屋号はナーカメンターグワー（仲前田小）です。両親は昭和二年か三年頃、一緒に台湾に行ったようです。父のきょうだいは六男二女で、父は六男です。長男蒲太、二男宇舎、四男亀江の三夫婦と子ども一人の七人は、大正時代にブラジルに移民し、三男三良、長女カメ（村会議員伊波善吉氏と結婚）、二女カマ（区長伊波蒲助氏と結婚）と父は、沖縄に残ったようです。五男仁王は、十五歳で死亡したとのことです。兄三良は商売（バクヨー）をし、父は内間で祖父母と農業をしていました。何を作っていたのかは分かりませんが、多分芋とサトウキビだったと思います。

当時沖縄は不景気だったんでしょうね。それで沖縄で農業しているよりは台湾に行つて働こう、ということで行つたみたいですよ。

母も内間出身です。結婚前は、那覇で女中奉公をしていたようで、

機転の利く女性で、台湾鉄道の官舎では他府県の奥さん方と仲よく付き合っていました。母は私が六年生のときに亡くなりました。子どもが小さいので、私が工業一年の九月に後妻にシズエを迎えました。

台湾に渡って一年後に、私の兄が生まれました。そのとき、台湾で産んだのではなく、沖繩に帰ってから産んだようです。でもその子は沖繩でそのまま亡くなってしまい、父はその子の顔は見えないんですね。その後の子ども、私からは台湾で生まれています。ワラビナー（童名）はないです。台湾で生まれるとそういうのはないですね。実は台湾では名を清英^{せいえい}といっていました。沖繩に帰ってきて改名したんです。というのも、近所に同じ名前が多かったわけですよ。それで変えたんです。

私が生まれたとき、父は台湾鉄道で働いてました。台湾に行った当時は知り合いの玉寄さんという方の下で植木屋をしていたみたいです。台湾鉄道の上層部には、沖繩の人、副主席だった神村幸太郎さんもいたようで、そういう伝手を頼ったのか知りませんが、後から台湾鉄道に勤めるようになったようですね。

台湾鉄道では、最初は工夫のようなことをしていたんだと思いますが、私が生まれた頃には保線といって、汽車がちゃんと通れるようにレールを管理する仕事でした。父は工事長として台湾人の工夫を十人ぐらい使って、一つの駅から次の駅との間の線路を管理するというのが仕事でした。毎日作業予定を作って管理していました。今はコンクリートの枕木なんかありますが、昔は木でしたからね。

木は雨が降ると次第に腐りますよね。それで悪いものは交換したり、何回かは実際に汽車に乗ってみて揺れ具合からどこが悪いとかいうのを確認する仕事もしていました。

台湾鉄道は今考えても大変いい仕事だったと思いますね。父は高等科までしか出ていませんでしたが、とてもいい待遇でしたよ。最後の頃には月俸が一〇〇円で、しかも加俸^{かほう}というのがあって外地手当が一〇〇%あったんです。中国で鉄道関係の仕事をすると二〇〇%あったみたいです。台湾鉄道には沖繩の方がたくさんいた。私たちの住んでいた王田の隣の駅、烏日^{ウジツ}には、花城さんっていう方がいらつしゃってね。台中駅にも保線士をしていた西平さんという沖繩の人がいました。この方は首里の出身だったかもしれませんが、戦後は浦添の大平に住んでいました。もうお亡くなりになりましたね。

花城さんや西平さんと父は、よく集まってお酒を飲んだりする間柄でしたよ。少し遠い所には、同じ鉄道関係の方で仲本さん（那覇市銘苅出身）もいて、この方の家には遊びに行くことがありました。それから岸本さんとかね。それから、烏日とは反対の隣の追分^{オイフケ}には、内間出身の比嘉さんという方が工事長をしていましたね。

こうしてみると、沖繩の人は多かったんですね。でも、台湾ではどこの出身かというのは全然気にもしなかったですね。鹿児島の人であろうと、どこの県であろうと日本人ということで。私たちは沖繩人ってことで何かされた覚えはまったくないですけどね。ただ、他の方に聞いたら、やっぱり差別はあったっていう人もいたん

ですけどね。学校なんかでは気にすることはなかったですね。

台湾人との付き合いもありましたね。お盆とかお正月に、台湾人の部下の方の家に招いて下さるんですよ。父の部下で一人だけ、陳江松チンコウショウという方の名前だけは覚えています。この方も亡くなりましてたけど、父が亡くなってから、仏壇に手を合わせに一度沖繩に来ていましたね。台湾に行ったときに陳さんと会いました。最初会ったときは、「日本語は聞けるけど、言葉が出ない」って言うてましたね。

父が沖繩にいた祖父母に送金したかどうかははっきり分かりませんが、沖繩の黒糖は送られてきたように思います。昭和十六年に沖繩の祖父が具合が悪くなって、父が一時帰りました。父が帰ったときには一時回復したんですが、結局亡くなりましたね。父が沖繩に戻るときに、私も一緒に行く予定だったんですが、具合を悪くしてしまい、沖繩に帰ることができませんでした。

私が生まれた三叉ビョウリツという所はものすごく田舎なんです。学校は苗栗ビョウリツという所の小学校に入学しました。最初は竹南チクナンの小学校に行く予定だったんですけど、四月に苗栗に急に父の転勤が決まって、慌てて苗栗の小学校に母と一緒に入学手続きをした覚えがあります。入学前に竹南の小学校に行つて、その運動会を見に行きました。それで「ここに入るんだよ」って言われたんですけど、急に転勤なつてね。そのときは造橋ソウキョウという所にいたようです。台湾では、日本人が通う小学校とは別に、台湾人が通う公学校がありました。一番長くいたのは王田オウデンという所でしたね。そこが最後までいた所で、七年間住んでいました。

苗栗の小学校には二年生の二学期までいました。その後明治小学校に転校しました。小学校では修学旅行が楽しかったですね。五年生のときに台南・高雄等に行きました。一週間ぐらいたったか、汽車で行つてあちこちを見て回りました。六年生になったら北部に行く予定だったんですが戦争で中止になりました。

卒業後は台中工業学校に入学しました。本当は機械科に行きたかったんですが、父が土木関係の仕事をしていたので、土木科に入れたということで土木科に入りました。しかし二年生のときに戦争が終わりしました。

戦争中は勉強全然できませんでしたよ。国から「中学生はみんな学校に行かずに、国が命じる仕事をしなさい」っていう方針が出たんです。学徒動員みたいなものですね。それで私たちも動員されて。ちゃんと勉強したのは一年生の始め頃で、二年生になってからは全くしなかったと思います。二年になってからは、軍の防空壕を作ったり、飛行場のたこつぼを掘ったりね。それから、飛行場の敷石になる玉石を川に集めに行ったりですね、こういう動員をさせられました。そして、最終的には中学三年生から兵隊にとられたので、私たち二年生が最上級生みたいな感じになつて。

台中市内に住んでる人は、家から行けたんですよ。私は土木科の同級生で、鹿児島出身の吉留さんの家に泊まったりして、一緒に間に合わせて行つたりしていました。

それから、中学に入ったら、教練つていうのがありました。配属将校つていうのがいるんですよ。配属将校と、教練教官という軍人

たちがいて、兵隊みたいな訓練をさせられましたね。配属将校は少尉で、教練教官は准尉でしたね。

台中工業学校では、同級生の廖棟梁さんリョウトウリョウと友人でした。私は土木科でしたが、彼は応用化学科でね。クラスは違ってましたが家が近かったので、帰りはいつも一緒に帰っていました。学校は台中と烏日の間にありました。あの頃は中学生はバスに乗ってはだめだって言われたので、歩いて通ってたんですね。中学校は台湾人も日本人も同じ学校に進むことができました。彼は烏日の公学校を出たみたいですが、とても優秀で金持ちの子でもありました。彼は今、台北で会社社長をしています。

十年ほど前に、廖棟梁さんに五六年ぶりに会いました。このときは鹿児島県の吉留さんも一緒に台湾に行つて、会いましたね。そのときは彼が同級生を集めて、歓迎会をしてくれましたね。別の同級生、張貴専さんチョウキセンと蔡振源さんサイシンゲンが台中を案内してくれました。当時の同級生との会話は全部日本語でしたね。

戦時中、食べるものには一切困らなかったですね。部下の台湾人たちが家で作っていた作物なんかを分けてもらったりしていたので、他の人よりは食べるものに困るっていうのは、まったくなかったと思います。他の人がどうだったかそれは知りませんがね。收容中も各班ごとにちゃんと食べるものはあったんです。だから、食べるものには困りませんでした。沖縄に帰る前に、收容所が台北へ移りましたが、台北に行つてからは少し困りましたね。あるにはあったんですが、それだけでは足りないということで、アフリカマイマイ

を食べたことがありましたね。今に比べたら不自由だったのかもしれませんが、当時はこれが当たり前と思っていましたから、今振り返ったとしても、不自由だったなという気持ちは全くありません。

よく思い出せないんですけど、戦争末期の頃に学校の近くでも空中戦がありました。駅に停まっていた機関車が、機銃掃射を受けて戦争が終わるまでそのままになっていました。また、近くの鉄橋が爆撃されたこともありましたが、家の裏に作つてあった防空壕に避難したのは一、二回ぐらいでしたね。学校でも特に防空壕には入らなかったですね。

ただ、戦争中は日本人が威張つて台湾人を制裁したりしていましたよ。ですから、戦争が終わると同時に、台湾人の学生が日本人を殴ったりしてね。私はそういう組には加わらなかったですね。臆病だったっていうこともありましたが、まわりは全部台湾人でしたからね。父も台湾人と仕事をしているし、区別なく付き合っていました。だから、戦後何事もなく帰つて来られたんですね。人によつては、殺されたり迫害されたりしていましたから。引き揚げを待てず、闇船で帰った人もいました。家財道具も一切捨てて、家族を連れて。また、行方不明になったっていう人もいたようです。私たちの知り合いの中ではいなかったんですけど、噂では「誰々が行方不明なってるよ」という話がありました。警察関係の人が多かったですね。父はそういう迫害とかは全く受けなかったですよ。戦前も戦後も同じように、台湾人と一緒にお酒を飲んで、道で歌を歌って歩いたりしていましたからね。そういう迫害なんかは全然なかったです。

戦争が終ると、本土出身の方は仕事をなくしたんですよ。父は工手長の仕事を部下に引き継ぎ、収容所に収容されるまでのあいだ、仕事していましたね。ただ、収容されているあいだも何もしないで暮らしているのも何だからってことで、やはり鉄道関係の仕事を請け負って、何人かと組んで仕事をしていました。私はその飯炊きに雇われてついに行ったことがあります。

昭和二年の四月までに、本土の人はだいたい引き揚げたんですよ。でも、沖縄県は引き揚げできないということで、多分五月頃だったと思います。全員収容されました。私たちは台中の明治小学校の一年生の教室に収容されました。一年生の教室は六組まであって、そこに人がいっぱいいました。台中にいたとき闇商売をしたこともありました。台湾人との付き合いがあったので、お米なんか購入しやすかったんです。彼らからお米を買って汽車で南部に持って行って高く売ったりね。汽車は父が辞めるまでただで乗れたんですよ。

九月か十月ぐらいまでは台中にいて、それから台湾総督府に収容されました。台北まで汽車で移動しました。そこは台湾全土から来た人たちもみんな一緒でした。台湾総督府は一か月ぐらいいたんじゃないかなと思いますよ。引き揚げの船が出るまでのあいだはここにいて、引き揚げの一週間ぐらい前に基隆の倉庫に移って、船の順番を待って帰ってきたんですよ。引き揚げは両親と私、第二人の五人でした。船の名前は知りませんが、LSTだったと思います。ですから船が揺れて酔いましたので、ずっとデッキにいました。

船で一昼夜を過ごし、久場崎に上陸してそこに一泊しまして、翌日、

トラックに乗って浦添村仲間に行き、そこから首里高校に入りました。台湾で収容されているあいだに沖縄出身の先生たちが、子どもたちをこのままにしておいてはいかんということでみんなを集めて勉強を教えていて、弟と一緒に行っていたんですね。それで首里高校の編入試験のときに非常に助かりました。よく覚えていないんですが、仲間には半年ぐらいいて、内間が開放されるいうことで移動したんだと思います。内間では父の姉の家の屋敷の一部分に、木造の茅葺家を建てて住みました。

沖縄に来たときにはびっくりしました。飲み水も使う水もすぐ近くにはなくて、安波茶辺りの泉から水を担いで、仲間まで行ってたんですよ。確か、当時十四歳でした。台湾では水を担いだことなんか一回もなかったです。向こうでは山の泉から、ずっとパイプで家の近くのタンクに水を引いて、そこで水を漉して小さい水タンクに貯めて、それを各家庭に配水していたんです。そういう風にしてましたからね、沖縄では本当に大変な生活ではありましたね。

でも、親はもつと大変だったはず。食糧を調達するって。配給もろくにないし、農業したって、収穫できるまでには長期間かかりますから。だから、それまでのあいだは自分の持っている物を処分して食べ物を買ったんじゃないんですかね。義理の母も持ってきた着物なんかをどんどん売って、生活費に充てたんじゃないかなと思います。

高校を卒業したのは十九歳のときです。戦争と台湾での収容所生活で、一年ぐらいは空白ができていますからね。首里高校を出た後、

一時期軍作業に行きました。近所の知念さんの伝手で、軍の土木事務所に勤めたんですが、入ってすぐ二、三日後に人員整理にあつてね。それから一生懸命軍関係の仕事を探したんですが、見つからなくて、仕方なく父と一緒に農業をやっていました。戦後、父は「人に使われるのは嫌だから」という理由で、農業をしていたんです。農業をして何か月かして、勢理客にあつた軍の自動車学校で働いていた知り合いを通じて、そこで労務作業をしました。その後、仕事で知り合つた隊長の家で住み込みのハウスポーイを始めました。それからキャンプキンザーの部隊で機械の見習い工に入りました。高校を出て三年経つたときに、公務員試験を受け、琉球政府に入庁しました。十年ぐらい勤めて琉球開発金融公社（沖縄振興開発金融公庫）に入り、五六歳で退職後は中部徳州会病院で五年ぐらい勤め、今は引退しています。三男の俊夫は税務署に勤め、退職後は内間で税理士を開業しています。四男の安男は本土の会社で働き、定年して現在は横浜に住んでいます。

沖縄に引き揚げた後が一番大変でしたよ。とにかく、戦争で苦勞していますからね。どんな苦勞でも耐えられるという気持ちはあります。へこたれない。絶対に。どんなに貧しくても、耐えられるだけの自分ができたんじゃないかな、と思いますね。

【二〇〇九年九月九日野入直美調査】

沖縄県浦添市

社寮町に生まれ育つ

喜屋武マサ

台湾生まれ

昭和六年

私が住んでいた所は基隆市の社寮町って所だったの。社寮町は沖縄出身の漁民が多く住む所でした。両親はそれぞれ久米島から来て、台湾で知り合いました。家族は両親ときょうだい八人。私は二番目に生まれて、三歳上になる姉がいます。台湾で生まれたのが六人です。弟が二人いて、あとはみんな女の子です。父は社寮町にあつた岡崎造船所という所に勤めていました。

基隆は陸軍要塞司令部があつて、野外でカメラでも持ったらスパイって捕まえられたの。だから撮影が一切できなくて。学校で一学年修了したら写真を写すでしょう。できあがつた写真は、裏の方に要塞司令部の印鑑が押されていますよ。向こうでは憲兵って怖かったですよ。彼らが検査して歩いているからね。そんな所で暮らしていました。

基隆は造船所がすごかつたんですね。造船所とドック会社があつて、船ができあがるでしょう。進水式のときに厄を払って紅白のお餅をばらまくんですけど、それをよく拾いに行きましたね。海にもよく泳ぎに行きましたし。小さいときは海がとても広かつたんだけど、工場を作るためだんだん埋め立てされたのよ。でも、今でも

夢に埋め立てしていない頃の海が出てくるの。他にも倉庫みたいな所でヤマト芝居を見たことがありますし、あと社寮町には花柳界が三つあって、そこからお三味線の音が聞こえてきました。

向こうでは真砂小学校つて所に通っていたの。一年生のときに、姉・私・弟二人は母に連れられて沖縄一周旅行しましたね。八重山で一泊、宮古で一泊、そして那覇に。人力車に乗ってお芝居観に行きましたね。そして久米島に行きました。久米島には祖母がいたので長い期間いましたね。帰るときも同じようにして、全部で五〇日間かかりました。

小学校ではセーラー服を着ていました。そして一年生は白いエプロンを着けていたの。母たちはいつも日本の着物を着ていましたね。割烹着なんか着けて。家でもみんな着物を着ていて、母が全部縫っていたの。だから洋服を着たことなくて、四年生のときに初めてオーダーしたの。そして、綺麗なワンピース着て行ったら先生がびっくりして、すぐ写生したんですよ。戦後、真砂小学校の同窓会で何十年振りに先生に会いに行きました。同窓会は全国あちこちで開催して、浦添でもやったことがあります。

戦時中は「贅沢は敵だ」とか言ってね、学校に行くときもバスに乗ってはだめで、ずっと歩いて行きました。四里くらいあったように思いますが、とにかく厳しかったです。それから防空頭巾かぶってバケツ持ってリレーしたり、そんな練習をしていました。その頃の私は軍国少女でしたよ。だから軍歌と学校の歌しか分からないんですよ。演歌なんかも全然分からないです。いつも口ずさんでるのは軍歌か唱歌なんかです。こんな時代の人だから、少し頑固だねっ

て思うときもありますよ。

家では標準語でした。きょうだいは方言が話せませんが、語学に興味がある私は積極的に方言を使っていますね。私は台湾の人とはあまり付き合っていないので台湾語はあまり分かりません。ただ数字は分かります。台湾の人たちと友達になろうと思わなかったし、ちよつと敬遠していた感じだったんです。でも戦後、白人が黒人を敬遠しているのを見て「あつ自分もあんなだったんだなあ」って思っ

て。台湾の人に対してね。

向こうでの食事はお魚が多かったですね。年の夜には、母が牛肉のおつゆを炊いたのを思い出します。牛は脂っこいんですけど、母の作るおつゆは全然そんな感じじゃなかったですね。多分脂は全部捨てていたんでしょう。日本風の料理ではなかった感じですね。それからニンニクの葉をテーブルにおいて食べてました。そしてトイレに行きたいときはこれを持って行きなさいっていわれたんですね。それで「どうして」って聞いたら、多分魔よけなのかもしれないけど、ニンニクの葉は方言で「ヒル」って言って、夜だけど昼よつていう意味でトイレに行きなさいって。そういわれたのを覚えてます。お正月にはサーターアンダギーがあつて、みかんを積み上げて飾りました。そして、餅をつきに行つて。こんなことをしていました。平和な所だったんですが、空襲のせいでみんなちりちりバラバラになつてしまいました。

空襲が来る前、アメリカの飛行機が低空飛行してきて照明弾つていうのか、それが照らされて、飛行機のなかにいた兵隊さんがアカ

ブサーだったんですよ。この飛行機が行った二、三日後に空襲があったので、あのときは偵察に来たんだなって。空襲で慌てふためいて逃げようと思ったら、小高い山は友軍がみんな鉄条網を張って囲っていて。入ったら銃殺されるんだけど、みんなこじ開けて入ってきましたね。でも軍も何もいかなかったですよ。

基隆市から台北にいかない二つくらい手前、南港ってあるんですよ。最初はそこに避難しました。南港に避難したのは母と下のきょうだいたちで、父と姉と私は基隆に残っていました。父は造船所に働いていたので残り、私は空襲に遭いながらも父のご飯を作っていました。

そのうち、南港も危ないとなって、さらに台中に避難するときには私も一緒に行きました。台中に行ったときは、弟たちは地元の人たちの田んぼに出て草とりをしていたみたいです。竿の先にミミズをくっつけた糸を吊ると、蛙が飛びつくんですよ。それをマラリアにかかった母に煎じて飲ませたりしましたね。

終戦になってビラが落ちてきましたね。それを読んだら「戦争終りました」って日本語で書いていましたよ。そしたら、今度は台湾人が暴れ出してね。怖かったですよ。戦争が終わった後は社寮町に戻ってきました。父は引き揚げる前まで、造船所で働いていました。日本人はすぐに帰ることができましたが、沖縄はアメリカが入っているから一年遅れて帰ったんです。そしてね、帰るときは何にも持てなかったのよ。一人二〇〇〇円しか持てないの。二〇〇〇円って何もならないけど、みんな色んな所に隠してね。

引き揚げは十五歳のときです。久米島に行きました。私たちが来るということで、母の兄が一軒家を造ってくれていました。木材がないので海の石と土を固めて造った家で、暴風雨が来たらやられるんじゃないかっていう感じの家でした。引き揚げてきたときには母はお腹が大きかったし、姉はお嫁に行っていたから、もう私が一番上ですからね。大変ではありましたが苦労とも思わなかったです。家のことを助けようとしてね。

仕事をするために私と三女で本島に来ました。あの頃は軍作業です。カーペンター（大工）がお家を建てた後に、家の中を掃除する仕事をやっていました。お給料をもらったから、封筒に入れて久米島の両親に送ったんだけど、後から父に聞いたら「届いてなかったよ」って言ってたんです。お金の送り方が分からなくて、B円をそのまま入れて送ったの。郵便局で書留にすると分からなくて。だから、聞いたときにはアキサミヨーって思いましたよ。あの時はね、働いたらみんなおうちに入れたのよ。今の子なんて、みんな化粧品買うでしょう。私びっくりしてますよ。

結婚後、一番下の子が幼稚園を出た頃に、軍で洋裁の仕事もしていたことがあります。洋裁は学校に行かず独学でした。生地を切るのが面白くて。とっても楽しかったですよ。洋裁をやっているあいだに、調理師の学校に行っただけです。校長先生と知り合いだったので「調理学校作るよ」ってことで、私はすぐ面接を受けたの。あの頃はもう四〇歳も過ぎていたから、向こうの人もびっくりしたと思います。他はみんな若い人。儲けようという気なくて、料理をプ

口から習いたいという一心で行ったんだけど、昭和五〇年に卒業したら、すぐ浦添の中央公民館で料理を教え始めました。それから社会保険センターや勤労青少年ホーム、南原風中央公民館でも教えていて、三〇年ぐらいこういう仕事をしています。

今は少し贅沢だなと思いますね。台湾にいた頃は戦時中で、何もかも質素だったから。パーマメントとかないし、私なんかはそれが当たり前と思っているので、戦後になって、心が派手になっているというのか、今もちよつともなじめないけど、でも吸収したいですね。何でもやりたいですね。

【二〇二二年七月十日野入直美調査】

沖縄県浦添市

小東京・台南での生活

稲福房子

台湾生まれ

昭和七年六月二五日

父は喜村朝教（子どものり）といいます。戦前は喜友名（ともな）といっていました。戦後改姓しています。父はもともと北谷の上勢頭（かみせど）出身です。沖縄の二中、那覇高校の前身ですね、そこを卒業して大学に行く予定だったらしいんですけど、その年に父親が亡くなって行けなくなったので師範学校に行ったらいいんですね。師範学校は教育養成の学校ですから教師になって、何年か勤めて単身台湾に行ってみたんですね。だから向こうでも教員をしていました。向こう行つてすぐ小学校に勤めて、何年かしてか知りませんが母と会ったんです。両親は台湾で知り合つて結婚しています。

母は泊の出身でした。母の父親が刑務官だったらしく、多分転勤のため家族で台湾に来たんじゃないかと思っています。物心ついた頃から台湾にいたようですので、沖縄の方言はだめでしたね。

父が最初に行った所は、多分屏東（ピンシュン）って所かと思っています。屏東が最初で、台南に行つて、高雄（タカオ）に行つたんだと思います。私が覚えてるのは台南市と高雄のことで、屏東のときはほとんど分からないですね。父は囲碁が趣味でした。日曜日になるとね、囲碁のお客さんが来ると父は応接間で碁ばっかしするんですね。碁をやりだすと時

間が経つのも忘れてやるんです。子どもとしては父がとられるってことで嫌でしたね。

向こうには日本人の小学校と、公学校といって台湾人の子弟が学ぶ学校がありました。父は公学校に行ってみたって希望をしたよ。うで、公学校に就職してます。職員はほとんど日本人でしたが、何人かは現地の方がいらっしやいました。父が勤めていた学校には必ず官舎がありました。校長の家とちよつと離れて教頭の家があつて、独身の人も家も入れてほしい三つあり、官舎は日本風でした。

官舎にいたときは、現地の人との付き合いがありましたね。お正月なんかになったら、式が終わったら職員全部校長の家に来るんですね。ですから、家はふすまを全部外して二部屋を一緒にして、長いテーブルを作つて。母は前の晩からいろんなご馳走を作っていました。十一時か十二時頃に式が終わると職員がみんな来て、私の家でお正月を祝うんです。そのときに、現地の職員の方がお手伝いに来てくれたりとかしていましたよ。また、父の教え子が卒業後に家に遊びに来ていたこともありました。

それから台南市に行きました。このとき父は少し田舎の学校に行っていて、子どもたちは田舎で生活するより都会にいた方がいいだろうってことで、父は単身赴任をして私たちは台南で生活し、土曜日ごとに父が帰って来てまた戻らうってことをしていました。台南ではあまり現地の方との付き合いはなかったですね。

台南は大きな街でした。銀座があつて大きなデパートもありました。私はそこで小学校に入学しましたから、一番覚えていいる所です。

周囲に家があつて、近所の人たちとお付き合いがありました。その方たちは他県の方もいましたし、沖繩出身の方もいました。沖繩出身の方とは、戦後もお会いしたことがありました。

通った小学校は南門尋常小学校、教科書は日本で使っていた同じ教科書です。小学校の近くに南門神社があつて、入学式の後、担任の先生が生徒を連れて、先生を先頭に隊列を作つてそこに参拝に行きました。後ろからは父兄と一緒に来て参拝したのを覚えています。それから近くに外苑があつて、そこでよく姉たちと遊びました。

向こうは「小東京」といわれているぐらいでした。植民地ですから本当に日本化されてました。言葉も日本語を使わせるわけですからね、どこ行つても日本語が通用するので小さな東京つていわれていたんですよ。ですから生活自体は多分日本と一緒にだったと思いますよ。かえつて沖繩よりも日本的だったと思います。住まいも沖繩のような住まいじゃなくて、日本風の玄関があつて、縁側があつて、応接間があつて、床の間があつてね。

一週間に一回、土曜日に父が家に帰って来ると、父は私を連れて夜店に行きました。銀座のちよつと奥のほうに運河があつて、そこに夜店がいっぱいできるんです。そこで子ども用のパチンコみたいなので遊んで、終わったらキャラメルとかいろんな出てくるのをもらつたり、一緒に焼き鳥屋に行つたりしていました。

一度、母と一緒に祖母を訪ねて沖繩に来たことがあります。小学校の一年か二年の夏休みだったと思います。一番上の姉は女学校の



台湾で暮らしていた頃の稲福房子さん（右）と姉たち〔稲福房子氏提供〕

寮に入っていたので、二番目の姉と私と妹で行きました。一か月ぐらい滞在したと思います。沖縄に来てびっくりしたことがあります。母の実家のある泊に行こうとして、安里の駅でタクシーに乗ったんですが、タクシーの運転手がみんな沖縄の人だったことです。向こうでは日本人はほとんど官吏で、力仕事はだいたい現地の人が多かったので「あ、沖縄の人が運転してる」ってびっくりしました。両親が沖縄に送金していたかどうかということは、子どものときなのでよく分かりませんが、沖縄から黒砂糖が送られてきたのは覚えています。父の妹からよく送られて来ていました。

小学校四年のときに高雄の太湖に移り、岡山国民学校に行きました。岡山国民学校を卒業する頃、ちょうど戦争が一番厳しくて学校に行けなくなりました。卒業式もできないほどでしたが台南一高女の受験があったので、高雄から台南に行こうとしたら、台南が大空襲で受験ができなくなっていました。

高雄にいた頃が一番空襲がすごかったですね。父は空襲になると、学校を守らないといけないからすぐ学校に行っちゃうんです。あの頃は御真影っていうんですか、教育勅語とかそういうのを入れた特別なものがありましたから。それを守らないといけないって。あの時代ですからね、すぐ学校に駆けつけるわけですよ。私たち家族は、家の裏に防空壕がありましたから、そこに入って避難していました。比較的近くにばらばらと落ちたことはありませんでしたけど。幸い何もなくて大丈夫でした。

その頃、父の学校には横山中隊が駐屯していました。夕方になると、

よく下士官の人たちが羊羹なんかを持って遊びに来ていました。彼らは家の中には入らないで、縁側に座って父とお話をしていた、戦争はどうなるんだろうという心配がありました。ただあの頃は、日本は勝つていわれた時代ですから。負けるとは思ってなかったの、いずれは勝って元通りになるんだろうなって。そのまま台湾にいるんだろうなとは思ってました。

戦争で困ったことはぜんぜん記憶にないです。食糧不足はもちろんあつてお菓子がなくなりましたが、ただそんなに不自由した記憶っていないのはないです。バナナなんかもいっぱいありますし、校庭にもちよつと離れたところに畑なんかもありましたから。ただ、お米が少なくなってきたらしいことは分かっていた、お芋の入ったごはんは食べていました。

終戦の日のことは覚えています。ちょうど父は校長会かなんかで出ていたんですね。私は家で下士官の人と一緒に遊んだりしていたんです。そしたら父が、急にぱーっと帰って来たんです。緊張した面持ちで帰って来てね。「重大発表があるから各自家で聴くように」と言われてみんな解散したらしくて。私たちも何かなと思っていたんです。父がラジオの前で一生懸命じーっとして、真剣な顔でいたのを覚えています。

夕方になると兵隊さんたちもやって来て、縁側の所で何か話していたんですね。そのとき初めて「重大発表」というのが、終戦の玉音放送だったというのを知りました。あつ、戦争負けたんだって、姉たちとちよつと泣いた覚えがあります。「ほんとに日本

負けたの、負けたの」とか言つて。そのときはちよつと信じられなかったですね。それから「どうなるんだろう」っていうのはありましたね。父は学校のこともありますし、対処しないといけないから大変だったと思います。そのときはまだ兵隊が学校に駐屯していましたから。ただ、周辺がとても慌ただしくなりましたね。

学校のすぐ裏に警察があつたんですけれどね、警察の方たちは職業上現地の人たちにもいろんな取り調べをしていますから、夜襲があるんじゃないかってとても心配してました。幸い近所の警察ではそういうのはなかったんですけど、特に警察が恨まれるケースが多いわけです。父は優しい人で現地の人と仲がよかったので、恨まれることはなかったのですが、周辺がとてもざわついていました。

その後、沖縄は戦争があつた所だからすぐは戻されないという情報が入って来たんです。他府県の人たちは引き揚げて行つたんですけどね、沖縄の人だけはなかなか帰れていう命令が来なかったです。父は情報をあちこちから集めながら、沖縄に帰るまでのあいだ、教員として勤めていました。

そして、沖縄の人たちが高雄の港に集結しているっていうことで、高雄に行き、そこに五、六月ほどいました。高雄港の倉庫のような所で、共同生活をしていましたね。その後また情報が入って来て、今度は台北タイペイに集結ということになって、また大移動しました。台北では総督府に入りました。総督府は空襲を受けて半分壊れていましたが、まだ残っていたんですね。その残っている所に入つて、そこでまた共同生活を何か月かして。それから、他府県の人たちが引き揚

げたので、彼らが使っていた台北の市営住宅に入りました。さらに何か月かしてやっと帰れるっていう情報が入って、基隆^{キールン}に集結して基隆から帰ってきました。

高雄から台北までの移動は、大型バスだったような気もするんですが多分列車でしょうね。台北から市営住宅に行ったときは、台北駅に行ったのを覚えています。ちょうどそのときに蒋介石を見たんです。駅の前の道路が、急に人でいっぱいになったので何事かと思ったら、蒋介石が台湾に来てオープンカーで通りますって。すると、蒋介石がオープンカーに乗ってゆっくり通るのを見ました。

台北駅から基隆まで汽車に乗り、基隆から船に乗って沖繩に来ました。船は上陸用舟艇だったんじゃないかと思います。ものすごい船酔いしましたよ。食事がとれなくて。甲板に出るとよくなるので、外に出て風にあたってましたね。

引き揚げるとき、持って帰れるものが限定されたんですよ。父は読書家でしたので世界名作集とか日本名作集がいっぱいあったんですけど、みんな現地の友人たちにあげています。だからほとんど着の身着のまま帰って来たわけですね。碁盤と掛け軸はいくつか持ち帰ったようです。

沖繩に上陸したのは十一月つていうのだけ覚えてます。久場崎でした。そこには長いこといませんでした。そこで父は名簿みたいなものを見せてもらったんじゃないかと思います。そして、きょうだい
が宜野座に知っていることを知って宜野座に行きました。そこには父の弟や姉たちがいたので、私たちもしばらくそこで生活しました。しか

し学校に行かないといけないので、宜野座高校を受験し、合格して一日だけ学校に行って、北谷に戻るようになったので戻ってコザ高校に編入しました。卒業後は琉球大学に進み、教職に就きました。戦後父は北谷で教育委員の仕事をしました。

沖繩に帰ってきてから、二度ほど台湾に行きました。向こうで生まれていますから懐かしいですね。

【二〇一二年三月九日 野人直美 調査】

沖繩県浦添市

私の古里 蓬萊宝島・台湾

下地健造

台湾生まれ

昭和八年

灣生（台湾生まれの台湾育ち）の私は、太平洋戦争の終戦を台湾台北市松山の双葉国民学校六年在学中に迎えました。終戦後の同校での思い出は、北京語と中華民国国歌の学習と毎朝の中国国旗掲揚でした。特に、台湾初代長官として、中国内陸重慶から着任される「陳儀長官」の出迎えに、三日も松山空港に通い、四日目によつと、公
民学校生徒と並んで中国国旗を振り、賑やかに出迎えしたことで

す。

このとき、昼食の「おにぎり」の配布が台湾人生徒には二個、日本人生徒には一個で、不公平だと不満をいう下級生もいましたが、子ども心にも始めて「日本の敗戦」を実感しました。

台湾から本土・沖縄・韓国への引き揚げ者は、基隆港の新港埠頭を集結し、同埠頭からそれぞれの帰国船に乗船し帰国しました。

私の家族六人（両親・祖母・姉・弟・私）は、米国リバティー型大型貨物船の帰国船で、両親の古里・宮古島平良市下里に帰国しました。同帰国船には、沖縄・本土各地への帰国者に、帰還兵も一緒に乗船しており、相当混雑していました。

この帰国船が、「基隆港」岸壁を離岸したとき、どこからともなく、「ラバウル小唄」を振った「台湾小唄」が聞こえてきましたが、直ぐに涙声の合唱になりました。

「さらば台湾よ、また来るまでは、

しばし別れの涙がにじむ、

恋し懐かしあの島見れば、

椰子の葉かげに十字星……」と

私も、同歌を口ずさみながら、戦後、日本人を見れば、「四本足、四等国民」と叫んでいた、台湾人子ども等の罵声を思い出し、涙が出て悲しくなりました。私は、父と一緒に、帰国船の最上階の甲板に上がり、遠くなる「基隆港」を見ながら、

「揺れるひかりだ 緑の風だ

南風（みなみ）そよ吹きや 豊かな穂波

米は二度なる甘蔗は伸びる

名さへ 蓬萊宝島 台湾樂しや良い所」と

「台湾樂しや」を涙声で歌いました。

学校の遠足で度々遊びに来た、台湾八景の基隆市中正公園が見えたときは、「観音像」に向かい合掌し、「成人したら、いつの日か、生まれ故郷台湾・台北に、必ず帰郷させて下さい」とお祈りしました。帰国船が東方にコースを変更し、遠くに蘇澳高地が見えると、父と一緒に、台湾高砂族乙女の死を讃えた「サヨンの鐘」を歌いました。

「嵐吹きまく 峰麓（ふもと）

流れ危うき丸木橋

渡るは誰ぞ 麗（うるわ）し乙女

紅き唇 ああ サヨン」

蓬萊宝島・台湾が、遠く霞んでくると、最後は、「雨夜花」を、一番は台湾語で歌い、次は日本語で、一番／三番を歌い、家族が待つ船室に戻りました。

台湾語

日本語

(1) 雨夜花 雨夜花

(1) 雨の降る夜に

受風雨 吹落地

吹いてる花は

無人看見 瞑目怨嗟

風に吹かれて

花謝落土 不再回

ほろほろと散る

「歌は世につれ、世は歌につれ」と言う言葉がありますが、この「雨夜花」は、日本統治下で、やるせない思いをしていた台湾人の悲しみの歌だと思います。

しかし、私にとつて、台湾は「天国」で、終戦前の台湾の愛唱歌は、公務員定年後二〇年、八〇歳の老人には、今でも愛唱歌で、一人のときはよく歌います。

私の台湾への想いは、四五年後の平成二年四月一日、西銘県知事の見事な外交手腕で実現されました。「沖縄県台湾事務所」の中華民国・台湾への設置が、「外交関係がない」との事由で、外務省・自治省から否認されましたが、実質的には、沖縄県台北事務所が、「(社)沖縄県物産振興会・台北事務所」の看板で見事に開設されました。

私は、県知事公室参事から、(社)沖縄県物産振興会「理事」に出向し、(社)沖縄県物産振興会台北事務所初代事務所長に派遣され、願望を達成しました。

【二〇〇九年八月六日 久部和子 調査】

沖縄県浦添市